

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

【目的】

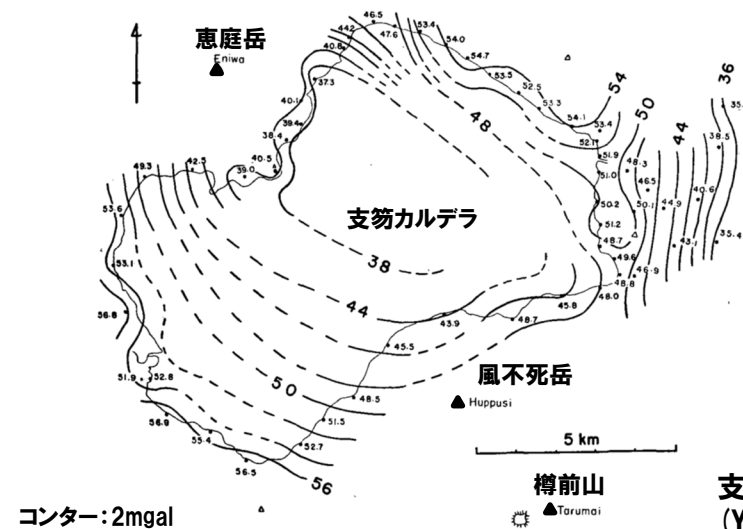
- 下鶴ほか編(2008)によれば、重力異常から地下密度構造を求めることができ、周辺の地殻に比べて火山の下に何らかの質量欠損があるか、過剰があるかは火山の地下構造を論ずるうえで重要であるとされている。
- このことから、重力異常を踏まえた支笏カルデラ周辺の地下構造に関して考察している文献について確認する。

【Yokoyama and Aota (1965)】

- 支笏カルデラ周辺において、重力測定を行っているYokoyama and Aota (1965)をレビューした。
 - ・Yokoyama and Aota (1965)によれば、重力測定の結果、カルデラ中心部において、低重力異常が認められるとされている。
 - ・重力異常から、最大層厚2km程度の逆円錐状に堆積した密度の低い堆積物が推定されるとされている。

【検討結果】

- 重力異常を踏まえたマグマ溜まりに関して考察されている文献は認められない。



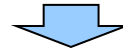
支笏カルデラ周辺における重力異常図
(Yokoyama and Aota (1965) に加筆)

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-5 地球物理学的調査(火山性地震及び地殻変動:まとめ)

【目的】

○マグマの移動・上昇, 集積等の活動の有無を把握するため, 火山性地震及び地殻変動の観点から検討を実施する。



【各項目における検討結果】

(火山性地震(低周波地震))(次頁~P132参照)

○恵庭岳周辺の下部地殻(約20km以深)において, 低周波地震が散発的に認められるが, 上部地殻には低周波地震群は認められない。

(地殻変動)(P134~P138参照)

○プレート間固着効果等に伴う定常的な変動, 周辺の地震による余効変動, 白老町の局所的な変動等が認められるが, これ以外に継続的かつ顕著な変位の累積は認められない。



○支笏カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)には, 現状, 大規模なマグマの移動・上昇, 集積等の活動を示す兆候は認められないと判断される。

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震-まとめ-) (1/5)

一部修正 (R3/10/14審査会合)

【目的】

- 下鶴ほか編(2008)によれば、火山性地震のうち低周波地震は、マグマや熱水などの流体が関与して発生していると考えられているものが多いとされている。
- このことから、支笏カルデラ周辺の低周波地震の時空間分布を確認した上で、上部地殻における低周波地震群の有無を確認する。



【検討結果】

- 確認に当たっては、公的機関の観測結果を取りまとめた気象庁編(2013)「日本活火山総覧(第4版)」, 「第147回火山噴火予知連絡会資料」気象庁(2020)並びに気象庁地震月報(カタログ編)(1983年1月~2020年3月)及び気象庁一元化処理検測値データ(2020年4月~2021年9月)を用いた。
- 確認結果は以下のとおり(下線部は低周波地震に関する事項)。
(気象庁, 2013)(次頁~P130参照)
 - 地震活動は、樽前山周辺の浅部に認められ、規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。
 - 低周波地震活動は、恵庭岳周辺の深部(深さ20~35km程度)に散発的に認められ、規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。
- (気象庁, 2020)(P131参照)
 - 地震活動は、樽前山周辺の浅部に認められ、樽前山の南西側の領域及び西側の領域については、2013年及び2014年に地震回数の増加が認められるが、本文献では2014年以降は低下傾向にあるとされている。
 - 低周波地震活動は、恵庭岳周辺の深部(深さ25~35km程度)に散発的に認められ、規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。
- (気象庁地震月報(カタログ編)及び気象庁一元化処理検測値データ)(P132参照)
 - 支笏カルデラ周辺においては、カルデラ南方の樽前山周辺に普通地震の震央が集中しており、カルデラ北西方の恵庭岳周辺で散発的に低周波地震の分布が認められる。
 - マグニチュード1以上の地震は、樽前山の南西側及び西側において2013年及び2014年に一時的に増加傾向が認められるが、深部の低周波地震については、発生数は少なく増加傾向も認められない。



- 支笏カルデラ周辺の火山性地震のうち、低周波地震活動は、恵庭岳周辺の下部地殻(約20km以深)に散発的に認められるが、上部地殻には認められない。

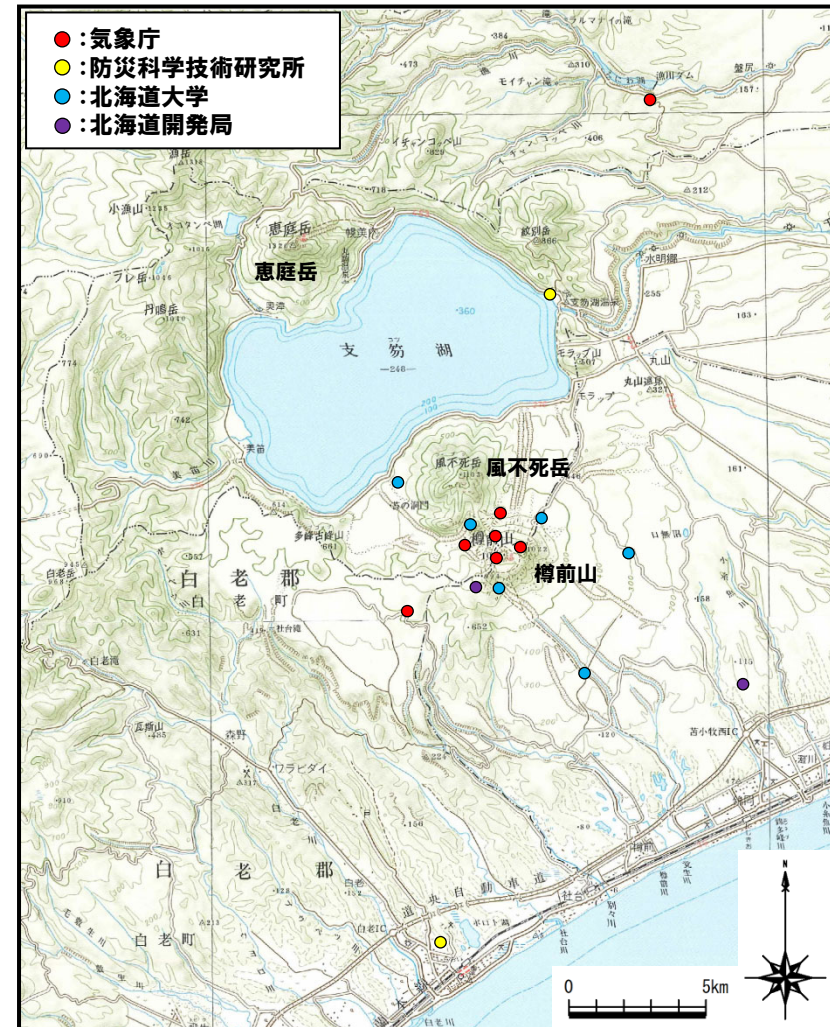
(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震) (2/5)

一部修正 (H25/11/13審査会合)

【気象庁編(2013)】

- 支笏カルデラ周辺には、公的機関の地震計が設置されている。
- 気象庁編(2013)「日本活火山総覧(第4版)」に地震活動及び深部低周波地震活動の時空間分布が取りまとめられている。



支笏カルデラ周辺の地震計位置図
(気象庁編(2013)「日本活火山総覧(第4版)」に基づき作成)

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

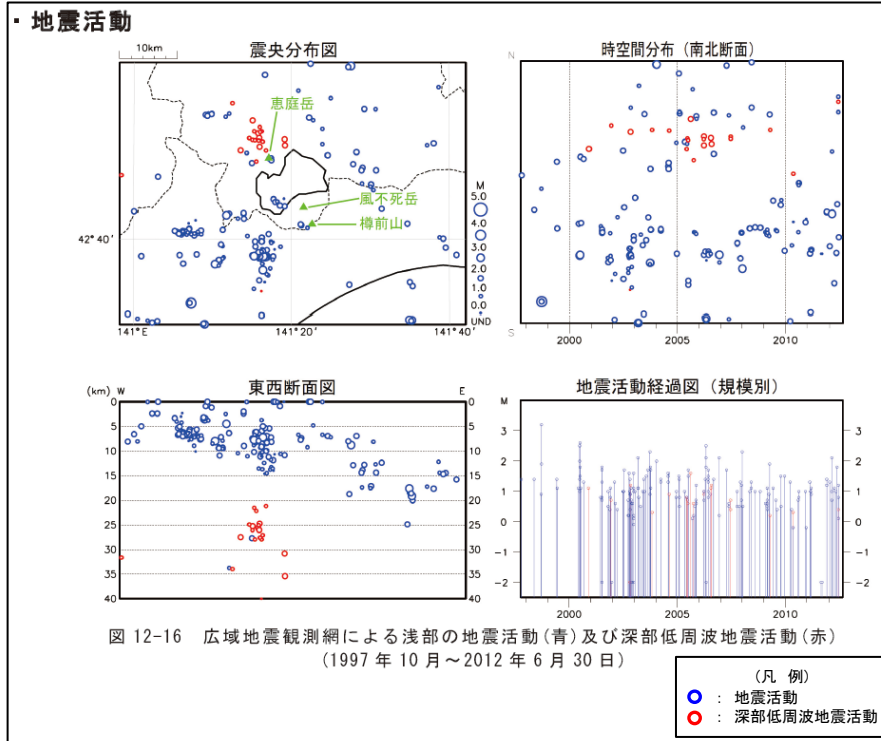
②-6 地球物理学的調査(火山性地震) (3/5)

一部修正 (H25/11/13審査会合)

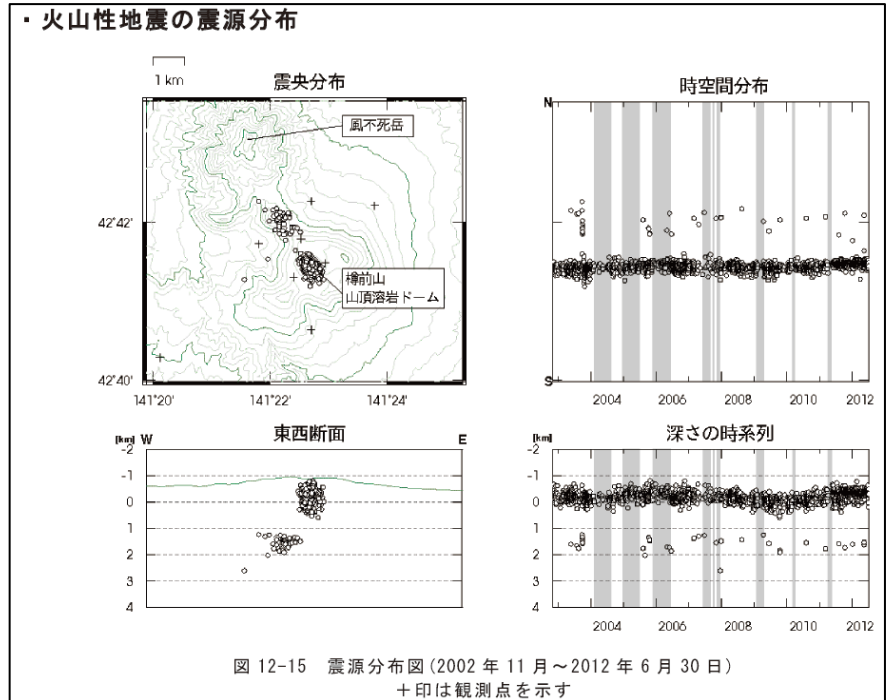
【気象庁編(2013)】

○支笏カルデラ周辺の地震活動(1997年10月～2012年6月)及び樽前山の火山性地震の震源分布(2002年11月～2012年6月)を下図に示す。

- 支笏カルデラ周辺においては、樽前山及び恵庭岳周辺に震央の分布が認められる。
- 地震活動は、樽前山周辺の浅部に認められ、規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。
- 低周波地震活動は、恵庭岳周辺の深部(深さ20～35km程度)に散発的に認められ、規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。



支笏カルデラ周辺の地震活動
(1997年10月～2012年6月30日, 「日本活火山総覧(第4版)」に加筆)



樽前山の火山性地震の震源分布
(2002年11月～2012年6月30日, 「日本活火山総覧(第4版)」)

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)(4/5)

一部修正 (R5/7/7審査会合)

【気象庁(2020)】

○「第147回火山噴火予知連絡会資料」(気象庁, 2020)では, 支笏カルデラ周辺の地震活動(1997年10月~2020年11月)について, 右図の通り示されている。



- 支笏カルデラ周辺においては, 樽前山及び恵庭岳周辺に震央の分布が認められる。
- 樽前山の南西側の領域(領域a)及び西側の領域においては, 2013年及び2014年に地震回数の増加が認められるが, 本文献では2014年以降は低下傾向にあるとされている。
- 低周波地震活動は, 恵庭岳周辺の深部(深さ25~35km程度)に散発的に認められ, 規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。
- また, 2013年及び2014年の地震の増加に伴う低周波地震の増加は認められない。

低周波地震活動は, 恵庭岳周辺の深部(深さ25~35km程度)に散発的に認められる。

樽前山の南西側の領域(領域a)及び西側の領域については, 2013年及び2014年に地震回数の増加が認められる。

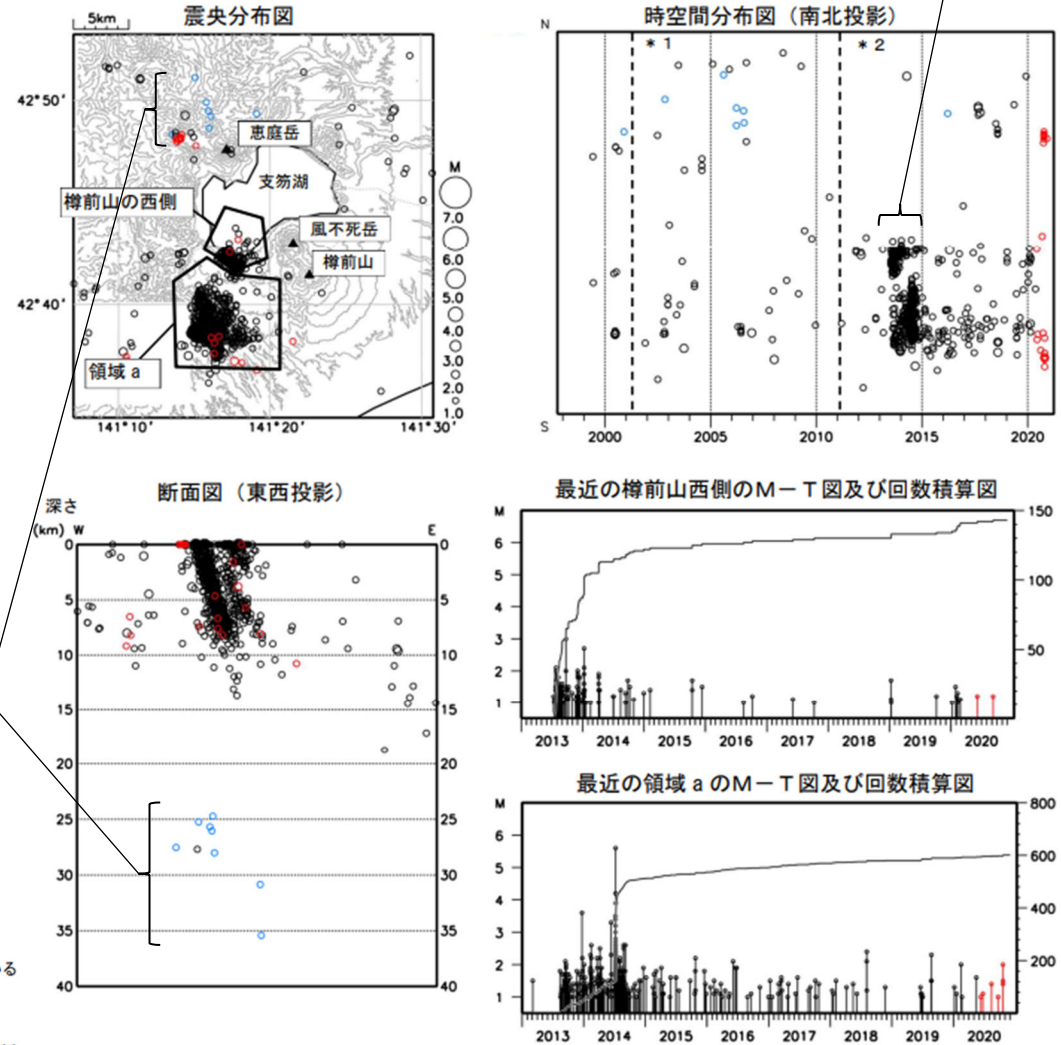


図8 樽前山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動 (1997年10月~2020年11月30日, M \geq 1.0、深さ40km以浅)

- : 1997年10月1日~2020年5月31日
- : 2020年6月1日~2020年11月30日
- : 深部低周波地震
- *1: 2001年10月以降, Hi-netの追加に伴い検知能力が向上している。
- *2: 2010年10月以降, 火山観測点の追加に伴い検知能力が向上している。

2020年4月18日から10月23日までの地震について, 暫定的に震源精査の基準を変更しているため, その前後の期間と比較して微小な地震での震源決定数の変化(増減)が見られる。2020年9月以降の震源は, 地震観測点の標高を考慮する等した新手法で求められている。この地図の作成には国土地理院発行の「数値地図50mメッシュ(標高)」を使用した。

・樽前山の南西側の領域(領域a)及び西側の領域を震源とする地震活動は, 2014年以降は低下傾向にある。

樽前山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動 (気象庁(2020)に加筆)

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)(5/5)

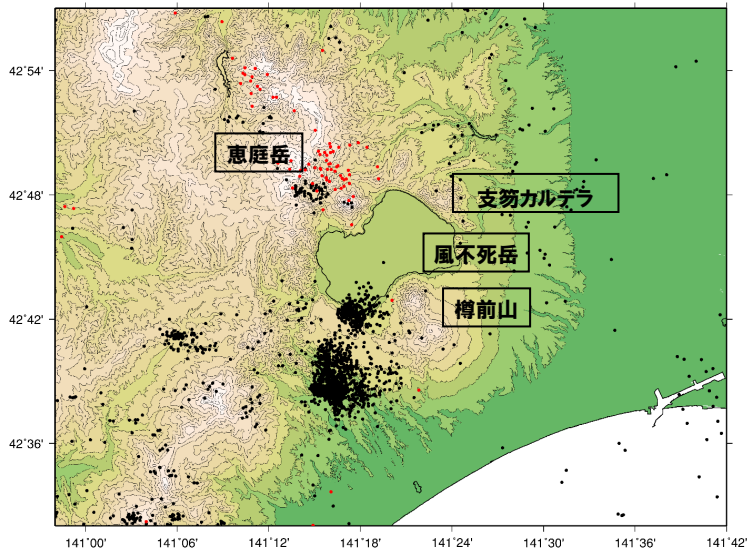
一部修正(R3/10/14審査会合)

【気象庁地震月報(カタログ編)及び気象庁一元化処理検測値データ】

○過去約40年間(1983年1月～2023年3月)における支笏カルデラ周辺の深さ40km以浅の地震活動の震央分布を示す。震央のデータは気象庁地震月報(カタログ編)(1983年1月～2022年3月)及び気象庁一元化処理検測値データ(2022年4月～2023年3月)を使用した。



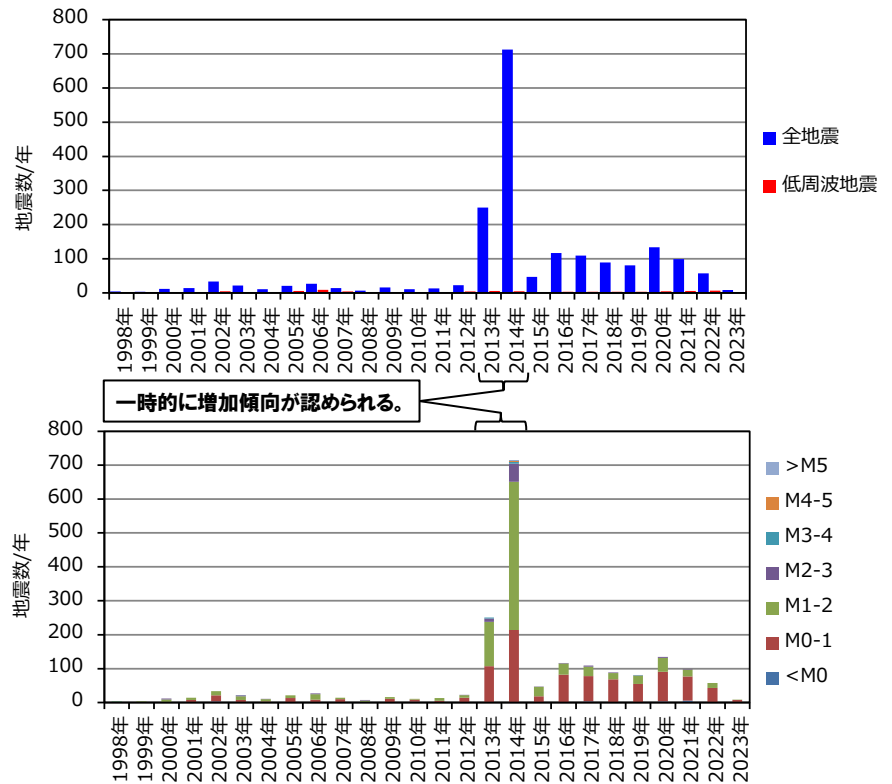
- 支笏カルデラ周辺においては、カルデラ南方の樽前山周辺に普通地震の震央が集中しており、カルデラ北西方の恵庭岳周辺で散発的に低周波地震の分布が認められる。
- マグニチュード1以上の地震は、樽前山の南西側及び西側において2013年及び2014年に一時的に増加傾向が認められるが、深部の低周波地震については、発生数は少なく増加傾向も認められない。



1983/1/1～2022/3/31:
気象庁地震月報(カタログ編)
2022/4/1～2023/3/31:
気象庁一元化処理検測値データ

凡例
●: 震央
●: 低周波地震震央

支笏カルデラ周辺の震央分布図※1
(1983年1月1日～2023年3月31日の記録、深さ40km以浅)



地震発生数の年別時間変化※1, 2 (1998年～2023年、深さ40km以浅)

※1 北海道ではHi-netの観測データ使用開始が2001年10月であることから、2001年10月前後でデータ精度が異なる。
※2 2023年は1月1日～3月31日のデータを掲載。

余白

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動-まとめ-) (1/5)

一部修正 (R3/10/14審査会合)

【目的】

- 青木(2016)によれば、マグマ溜まりにマグマが注入されると、マグマ溜まりが増圧し山体は膨張するとされている。
- このことから、電子基準点等のデータを整理した上で、継続的かつ顕著な変位の累積等の地殻変動の有無を確認する。



【検討結果】

(地殻変動(上下変動及び基線長変化))(次頁~P136参照)

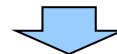
- 支笏カルデラ付近の上下変動は、一部基線において、プレート間固着効果等に伴う定常的な沈降及び2011年東北地方太平洋沖地震の余効変動に伴う隆起に由来する小樽1地点との相対的な差異を捉えているものと考えられ、これ以外に継続的かつ顕著な比高変化は認められない。
- 支笏カルデラ付近の基線長変化は、一部基線において、2003年十勝沖地震及び2011年東北地方太平洋沖地震の余効変動に伴う基線の伸びが認められるが、これ以外に継続的かつ顕著な膨張又は収縮傾向は認められない。

(地殻変動(干渉SAR時系列解析))(P137参照)

- 支笏カルデラ周辺においては、顕著な地殻変動は認められない。

(地殻変動(水準測量))(P138参照)

- 白老町に局所的な変動が認められるものの、顕著な隆起又は沈降は認められない。



- 支笏カルデラ周辺の地殻変動は、プレート間固着効果等に伴う定常的な変動、周辺の地震による余効変動、白老町の局所的な変動等が認められるが、これ以外に継続的かつ顕著な変位の累積は認められない。

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

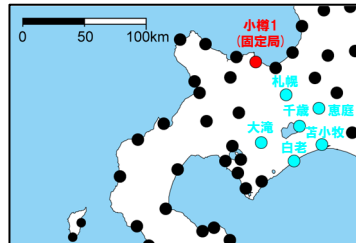
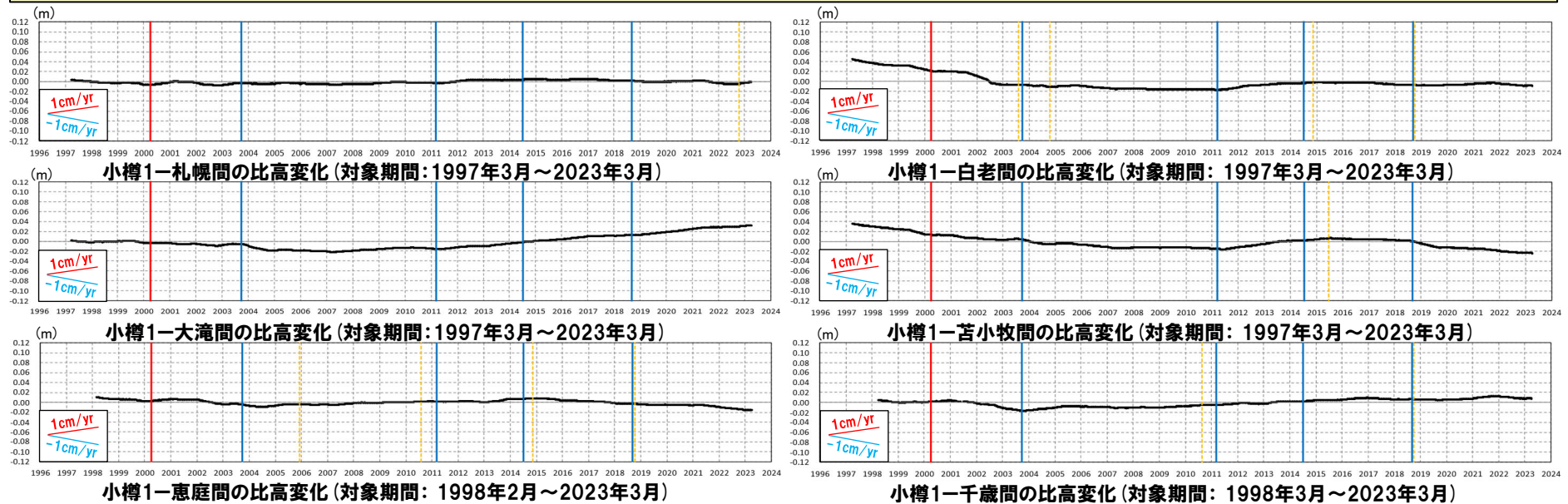
②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(2/5)

【上下変動】

- 支笏カルデラ付近の6基準点(札幌、大滝、恵庭、白老、苫小牧及び千歳)について、F5解を使用し、各電子基準点設置以降から2023年3月までの上下変動を示す。
- 固定局は、支笏カルデラと同様に東北日本弧延長部に位置し、第四紀火山から離隔があること等を踏まえ、小樽1地点とした。
- 季節変化に伴う影響(気象条件に関するノイズ、電子基準点周辺の樹木の生長等)を除去するために、各基準点の上下変動について1年間の移動平均グラフを作成した。



- 支笏カルデラ付近の上下変動は、一部基線において、プレート間固着効果等に伴う定常的な沈降及び2011年東北地方太平洋沖地震の余効変動に伴う隆起に由来する小樽1地点との相対的な差異を捉えているものと考えられ、これ以外に継続的かつ顕著な比高変化は認められない。



支笏カルデラ付近
電子基準点位置図

- 2000年3月有珠山噴火
- 2003年9月十勝沖地震
- 2011年3月東北地方太平洋沖地震
- 2014年7月胆振地方中東部の地震
- 2018年9月北海道胆振東部地震
- 伐木

(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

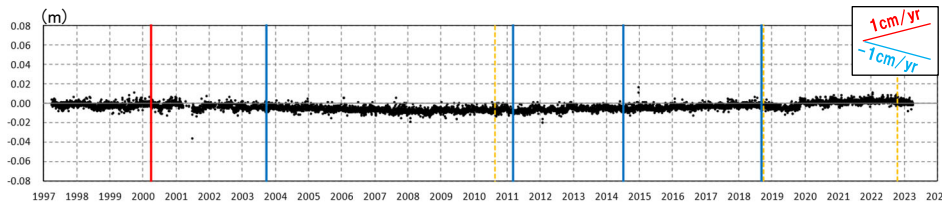
②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(3/5)

【基線長変化】

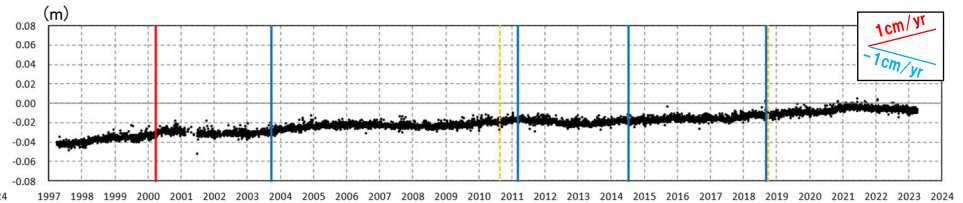
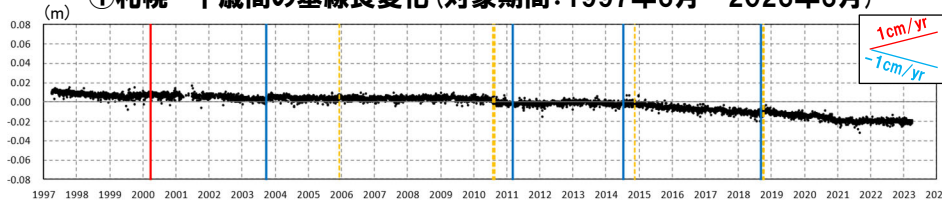
- 支笏カルデラ付近の6基準点(札幌, 大滝, 恵庭, 白老, 苫小牧及び千歳)を結んだ5基線について, F5解を使用し, 各電子基準点設置以降から2023年3月までの基線長変化を示す。
- 噴火, 地震, 伐木イベント等による不連続を除去するため, 左下黒枠内に示すイベントについて, イベント前後7日間の平均値を基に不連続を除去する補正を実施した。



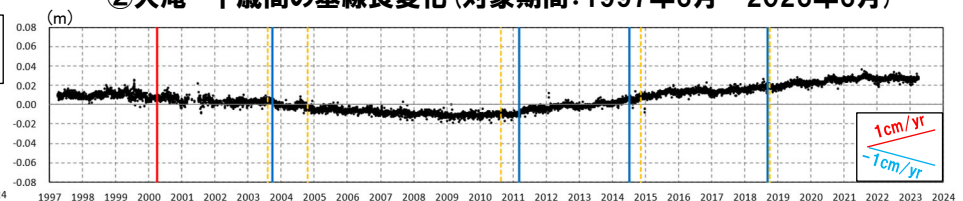
- 支笏カルデラ付近の基線長変化は, 一部基線において, 2003年十勝沖地震及び2011年東北地方太平洋沖地震の余効変動に伴う基線の伸びが認められるが, これ以外に継続的かつ顕著な膨張又は収縮傾向は認められない。



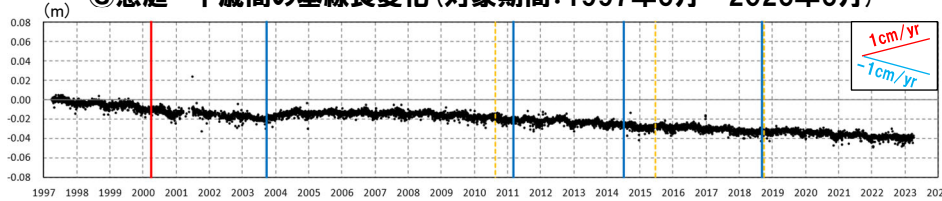
①札幌-千歳間の基線長変化(対象期間:1997年3月~2023年3月)



②大滝-千歳間の基線長変化(対象期間:1997年3月~2023年3月)



③恵庭-千歳間の基線長変化(対象期間:1997年3月~2023年3月)



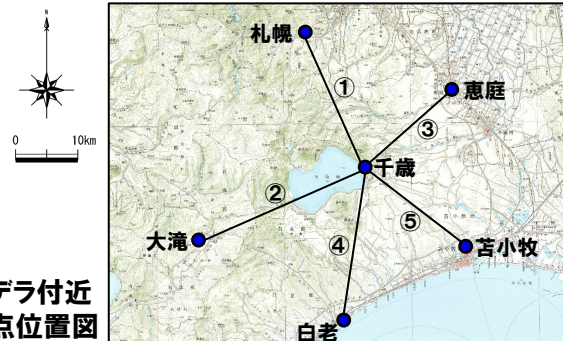
④白老-千歳間の基線長変化(対象期間:1997年3月~2023年3月)

⑤苫小牧-千歳間の基線長変化(対象期間:1997年3月~2023年3月)

補正対象イベント

- 2000年3月有珠山噴火
- 2003年9月十勝沖地震
- 2011年3月東北地方太平洋沖地震
- 2014年7月胆振地方中東部の地震
- 2018年9月北海道胆振東部地震
- 伐木

支笏カルデラ付近電子基準点位置図



(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(4/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

【干渉SAR時系列解析】

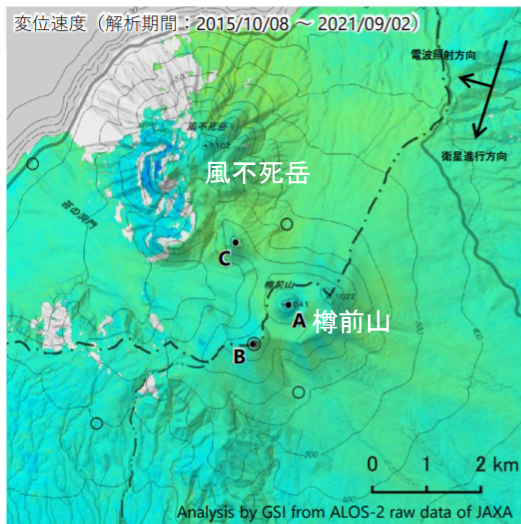
○第149回火山噴火予知連絡会資料(樽前山)(気象庁, 2021)によると, 樽前山周辺における干渉SAR時系列解析において, 「ノイズレベルを超える変動は見られません」とされている(本頁左図)。

【干渉SAR時系列解析(最新版)】

○2014年8月から2022年12月を対象とした干渉SAR時系列解析(国土地理院, 2023)*によれば, 支笏カルデラ周辺においては顕著な地殻変動は認められない(本頁右図)。

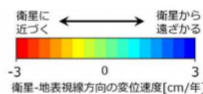
※国土地理院では, 宇宙航空研究開発機構(JAXA)が運用する衛星「だいち2号(ALOS-2)」のSARデータを使用し, 地表変動の監視を行っている。2023年3月に日本全域の干渉SAR時系列解析結果をHP上で公表した。ここで示す干渉SAR時系列解析結果は大規模な地震に伴う地殻・地盤変動及びプレート運動に伴う広い範囲に生じる地殻変動は除去されている。

ノイズレベルを超える変動は見られません。

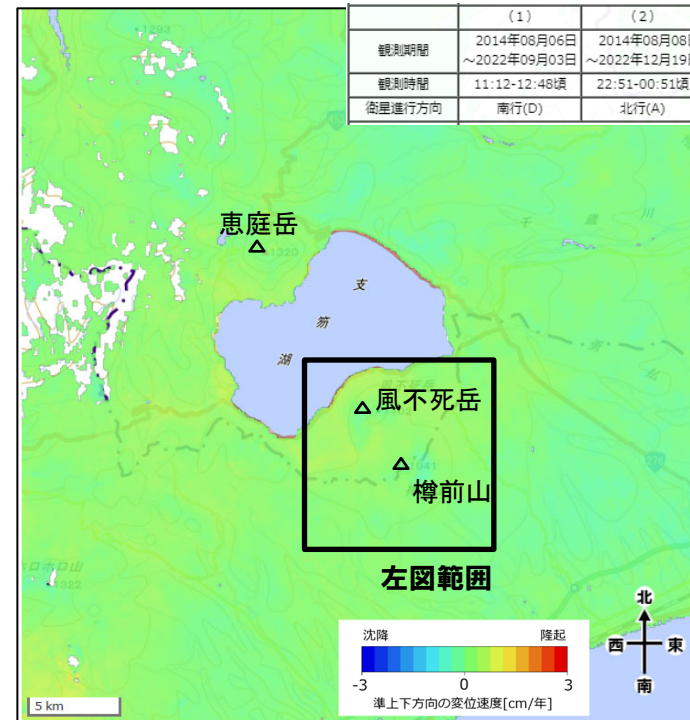


衛星名	ALOS-2
観測期間	2015/10/08 ~ 2021/09/02 (2156日間)
衛星進行方向	南行
電波照射方向	右(西)
観測モード*	U
入射角	38.9°
偏波	HH
データ数	12
干渉ペア数	14

* U: 高分解能(3m)モード
 ◎ 国土地理院GNSS観測点
 ○ 国土地理院以外のGNSS観測点



樽前山の干渉SAR時系列解析結果(衛星方向の変位速度, 南行)
(気象庁(2021)に加筆)



	(1)	(2)
観測期間	2014年08月06日 ~2022年09月03日	2014年08月06日 ~2022年12月19日
観測時間	11:12-12:48頃	22:51-00:51頃
衛星進行方向	南行(D)	北行(A)

支笏カルデラ周辺における2014-2022年間の
干渉SAR時系列解析結果(準上下成分の変位速度)(国土地理院(2023)に加筆)

○支笏カルデラ周辺においては, 顕著な地殻変動は認められない。

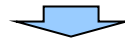
(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(5/5)

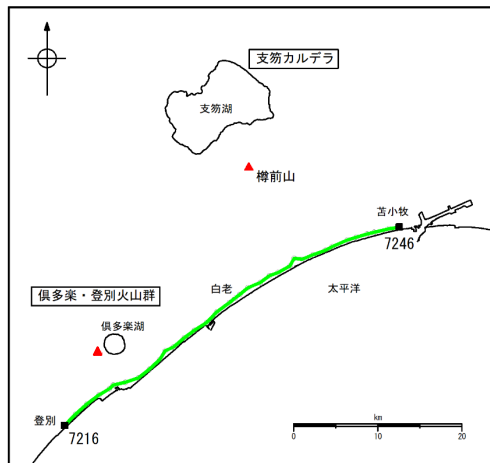
一部修正 (R3/10/14審査会合)

【水準測量】

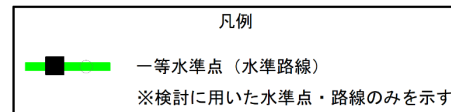
○過去約100年間における支笏カルデラ周辺の水準点の上下変動を示す。水準測量のデータは国土地理院一等水準点検測成果集録を使用した*。



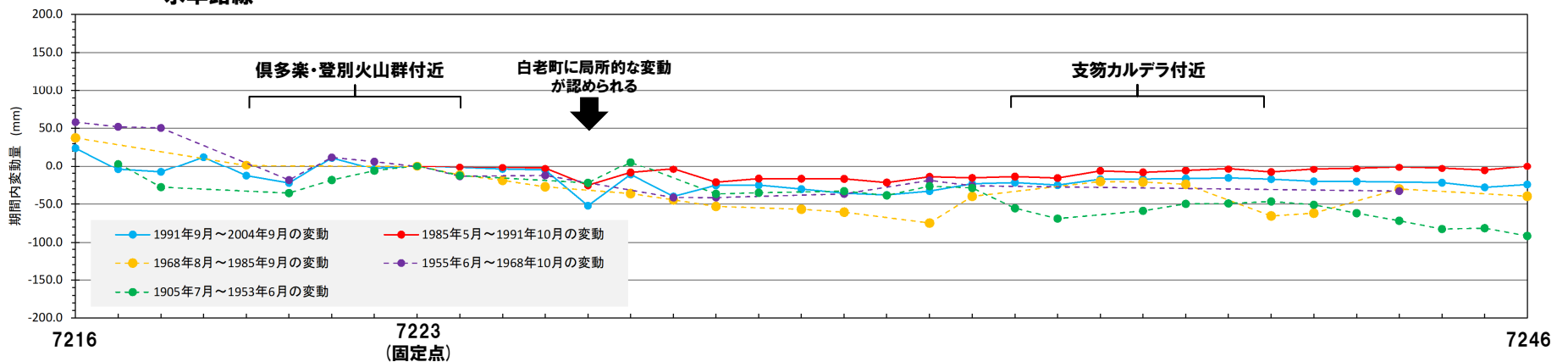
○白老町に局所的な変動が認められるものの、顕著な隆起又は沈降は認められない。



※当該検測成果集録においては、支笏カルデラ周辺の水準路線として、左図に示す一等水準点を用いた路線の他に、苫小牧付近から支笏カルデラ付近まで及び苫小牧付近から樽前山付近までの二等水準点を用いた2路線のデータもまとめられている。しかし、支笏カルデラ付近へ向かう路線は2001年及び2018年に、樽前山付近へ向かう路線は2001年及び2007年に測量が実施されており、下図のような変動量はそれぞれ1期間示されているのみである。このため、支笏カルデラ周辺の水準測量の結果として、より長期間のデータがある一等水準点を用いた路線の変動量を示している。



水準路線

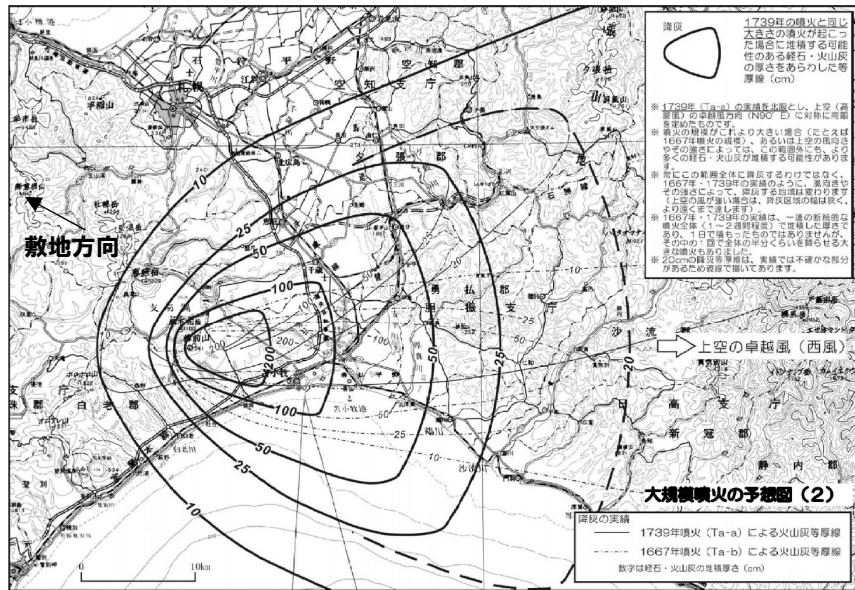


水準路線(水準点番号:7216-7246)沿いの期間内変動量(固定点:7223)

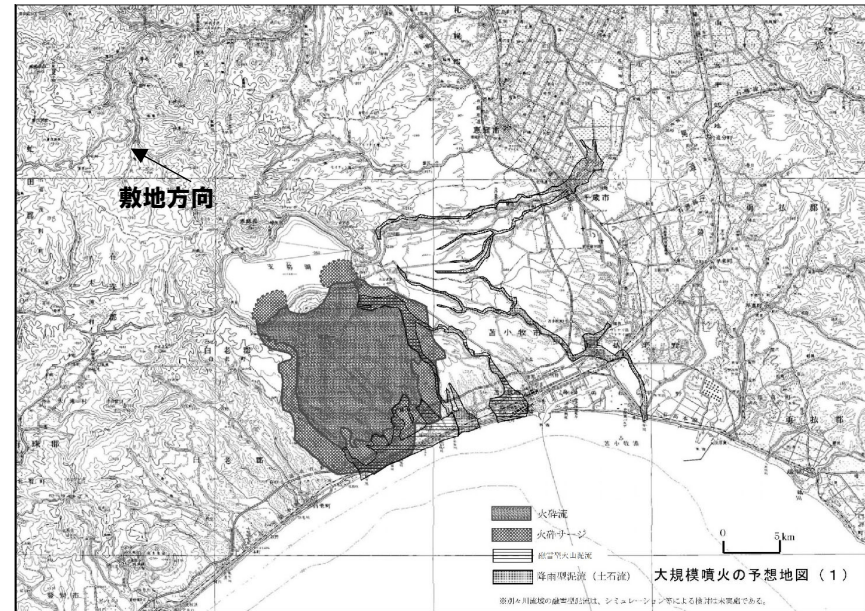
(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)

(参考) 樽前山火山防災協議会(2022)

○支笏カルデラの後カルデラ火山のうち樽前山について避難計画を定めた樽前山火山防災協議会(2022)によれば、最も大きな規模の噴火として、下図の通り、Ta-a及びTa-b相当の降灰及び火砕流による影響範囲が想定されており、巨大噴火規模の影響は想定されていない。



Ta-a及びTa-bによる降灰の想定影響範囲



Ta-a及びTa-bによる火砕流、火砕サージ、融雪型火山泥流及び降雨型泥流の想定影響範囲

最も大きな規模の噴火として想定された影響範囲(樽前山火山防災協議会(2022)に加筆)

1. 火山影響評価の概要	P. 4
2. 網羅的な文献調査の概要	P. 42
3. 原子力発電所に影響を及ぼし得る火山の抽出	P. 62
3.1 地理的領域にある第四紀火山	P. 65
3.2 将来の火山活動可能性の評価	P. 69
4. 原子力発電所の運用期間における火山活動に関する個別評価	P. 76
4.1 設計対応不可能な火山事象を伴う火山活動の評価	P. 79
4.1.1 火山活動の可能性評価	P. 81
4.1.2 巨大噴火の可能性評価	P. 91
4.1.2(1) 巨大噴火の可能性評価方法	P. 92
4.1.2(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)	P. 100
4.1.2(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)	P. 142
4.1.2(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)	P. 184
4.2 火山活動の規模と設計対応不可能な火山事象の評価	P. 225
5. 個別評価の結果を受けた原子力発電所への火山事象の影響評価	P. 266
5.1 降下火砕物の影響評価	P. 268
5.1.1 敷地及び敷地近傍で確認される降下火砕物の影響	P. 268
5.1.2 降下火砕物シミュレーション	P. 277
5.1.3 設計に用いる降下火砕物の層厚	P. 278
5.2 地理的領域内の火山による火山事象の影響	P. 280
6. 火山活動のモニタリング	P. 281
6.1 監視対象火山	P. 282
6.2 モニタリングの実施方法及び火山の状態	P. 288
7. 火山影響評価のまとめ	
参考文献	

・本章の説明内容

【評価結果】倶多楽・登別火山群の巨大噴火の可能性評価

① 活動履歴

②-1 地球物理学的調査(地下構造:まとめ)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造)

②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常)

②-5 地球物理学的調査(火山性地震及び地殻変動:まとめ)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)

(参考) 倶多楽火山防災協議会(2022)

余白

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

【評価結果】倶多楽・登別火山群の巨大噴火の可能性評価(1/2)

一部修正(R5/1/20審査会合)

- 倶多楽・登別火山群の現在の活動状況は、以下の検討結果(詳細は次頁表参照)を総合的に踏まえると、巨大噴火が差し迫った状態ではないと評価される。
 - ・活動履歴を踏まえると、巨大噴火(Kt-7噴出)時の状況と現在の状況は、火山活動度及び噴出物の体積の観点において差異が認められることから、現状、Kt-7を噴出したような噴火を起こす状態ではないと判断される。
 - ・地球物理学的調査のうち、地下構造調査(地震波速度構造、比抵抗構造及び重力異常)を踏まえると、上部地殻内において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さいと判断される。
 - ・地球物理学的調査のうち、火山性地震(低周波地震)及び地殻変動を踏まえると、大規模なマグマの移動・上昇、集積等の活動を示す兆候は認められないと判断される。
- また、網羅的な文献調査の結果、現状、巨大噴火が起こる可能性があるとする知見は認められない*ことから、運用期間中における巨大噴火の可能性を示す科学的に合理性のある具体的な根拠は得られていない。
- これらのことから、倶多楽・登別火山群の運用期間中における巨大噴火の可能性は十分に小さいと評価される。

*現状想定されている噴火規模について、参考としてP181に示す。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

【評価結果】倶多楽・登別火山群の巨大噴火の可能性評価(2/2)

一部修正(R5/1/20審査会合)

検討項目		検討結果	該当頁
①活動履歴		<ul style="list-style-type: none"> ○倶多楽・登別火山群においては、巨大噴火が約9万年前に1回発生しており、その噴出規模は、Amma-Miyasaka et al. (2020) において「VEI7 class」とされており、また、当社算出の噴出物体積が20km³以上となった。 ○巨大噴火による噴出物(Kt-7)を含め、先アヨロステージの噴出物について、全岩化学組成を示す知見は確認されない。 ○このため、巨大噴火の活動間隔及び最後の巨大噴火からの経過時間の観点並びに噴出物の組成の観点において、判断することは難しい。 ○しかし、倶多楽・登別火山群は、クッタラカルデラを形成したKt-1の噴火を最後に、現在に至る4万年間は登別ステージであるとされ、火山活動度が低下したままであり、複数回の活動が認められるが、噴出物体積は最大でも0.04km³であり、巨大噴火の噴出物体積と異なっている。 	次頁～ P149
		○巨大噴火(Kt-7噴出)時の状況と現在の状況は、火山活動度及び噴出物の体積の観点において差異が認められることから、現状、Kt-7を噴出したような噴火を起こす状態ではないと判断される。	
地球物理学的調査	②地下構造	<p>【地震波速度構造】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○倶多楽・登別火山群直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、以下の状況が認められる。 ・メルトの存在を示唆する低Vpかつ高Vp/Vs領域が、やや北方で、上部地殻の一部まで広がっているものの、その中心部は下部地殻に位置している。また、当該領域が倶多楽・登別火山群直下の浅所まで連続する状況は認められない。 ・深度約10km程度以浅においては、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。 ・倶多楽・登別火山群直下の浅所においては、低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域は信頼度が高くない範囲に含まれる若しくは隣接しており、また、通常の地震が深度10km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。 ・倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。 <p>【比抵抗構造】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・倶多楽・登別火山群直下の浅部(4km以浅)には熱水、高温及び熱水変質帯によると考えられる低比抵抗領域が部分的に認められるが、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域は認められない。 <p>【重力異常】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重力異常を踏まえマグマ溜まりに関して考察されている文献は認められない。 	P151～ P153
			○倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さいと判断される。
	③火山性地震	○火山性地震のうち、低周波地震活動は、ほとんど認められない。	P165～ P171
	④地殻変動	<ul style="list-style-type: none"> ○地殻変動は、白老町の局所的な変動、プレート間固着効果等に伴う定常的な変動、周辺の地震及び2000年有珠山噴火による余効変動等が認められる。 ○また、倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)において、2016年以降に確認される隆起及び当該領域を含む基線の伸びは認められるが、熱水の上昇・貯留に伴うものと推定される。 ○これらの変動以外に継続的かつ顕著な変位の累積は認められない。 	P172～ P180
	○倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)には、現状、大規模なマグマの移動・上昇、集積等の活動を示す兆候は認められないと判断される。		
	○倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さく、大規模なマグマの移動・上昇、集積等の活動を示す兆候は認められないと判断される。		

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

① 活動履歴(1/6)

一部修正(R5/1/20審査会合)

【目的】

- 巨大噴火時の状況と現在の状況との差異について、倶多楽・登別火山群における巨大噴火の活動間隔、最後の巨大噴火からの経過時間、噴出物の分布・体積、噴出物の組成等の観点から検討を実施する。



- 倶多楽・登別火山群の活動履歴、噴出量-年代階段ダイアグラム等をP146～P149に示し、倶多楽・登別火山群の活動の概要は以下のとおり。
 - ・倶多楽・登別火山群は、約11万年前～約9万年前にKt-8を噴出し、約9万年前に最大規模の噴火であるKt-7を噴出した噴火が発生した後、複数の珪長質マグマの活動(アヨロステージ:Kt-6, Kt-4, Kt-Hy及びKt-3, クッタラステージ:Kt-2及びKt-1)等が発生し、クッタラステージにおけるKt-1の噴火により現在のクッタラカルデラが形成された。
 - ・倶多楽・登別火山群は、クッタラカルデラを形成したKt-1の噴火を最後に、その後4万年間は火山活動度が低下したままであり、現在の噴火活動は、登別ステージである。

【検討結果】

(巨大噴火の活動間隔、最後の巨大噴火からの経過時間、噴出物の分布・体積)(P146～P148参照)

- Kt-7は確認地点は少ないものの北東方向に60km程度の地点で火砕流堆積物が認められ、Kt-7を噴出した噴火は、噴出規模が概算として「VEI7 class」とされていること及び当社で算出した噴出物体積が 20km^3 以上となった^{*1}ことから、巨大噴火に該当するものとして取り扱う。
- 登別ステージ以前においては、Kt-7を除く火砕流を含む火山噴出物については、噴出物ごとの分布境界は明確ではないが、Kt-7を除く火砕流堆積物の分布は山体近傍であることから(補足説明資料P36及びP40参照)、巨大噴火に該当しない。
- なお、これらの火砕流のうち、最大の噴出物体積は、Kt-1の 7.1km^3 である(次頁表参照)。
- 登別ステージ以降の最大規模の噴火は日和山溶岩ドーム(噴出物体積: 0.04km^3)であり、最大規模の降下火砕物を伴う噴火は約200年前のNb-aを噴出した噴火(噴出物体積:約 0.00046km^3)である。
- 森泉(1998)によれば、倶多楽・登別火山群の各ステージごとの噴出率は、アヨロステージが 4.9km^3 (DRE)/ka、竹浦ステージが 0.8km^3 (DRE)/ka、クッタラステージが 4.8km^3 (DRE)/ka、登別ステージが 0.01km^3 (DRE)/ka以下とされている。

(次頁へ続く)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

① 活動履歴 (2/6)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

(前頁からの続き)

(噴出物の組成) (P149参照)

- 巨大噴火による噴出物 (Kt-7) を含め、先アヨロステージの噴出物について、全岩化学組成を示す知見は確認されない。
- 森泉 (1998) に基づくと、中規模珪長質火砕噴火が発生したアヨロステージ、苦鉄質マグマが活動した竹浦ステージ、竹浦ステージを挟んで再び中規模珪長質火砕噴火が発生したクッタラステージと推移しており、各ステージの噴出物の組成には変化が認められる。
- また、勝井ほか (1988) に基づくと、現在の噴火活動である登別ステージの噴出物 (日和山溶岩) についても、珪長質な組成を示す。



- 倶多楽・登別火山群においては、巨大噴火が約9万年前に1回発生しており、その噴出規模は、Amma-Miyasaka et al. (2020) において「VEI7 class」とされており、また、当社算出の噴出物体積が20km³以上となった*1。
- 巨大噴火による噴出物 (Kt-7) を含め、先アヨロステージの噴出物について、全岩化学組成を示す知見は確認されない。
- このため、巨大噴火の活動間隔及び最後の巨大噴火からの経過時間の観点並びに噴出物の組成の観点において、判断することは難しい。
- しかし、倶多楽・登別火山群は、クッタラカルデラを形成したKt-1の噴火を最後に、現在に至る4万年間は登別ステージであるとされ、火山活動度が低下したままであり、複数回の活動が認められるが、噴出物体積は最大でも0.04km³であり、巨大噴火の噴出物体積と異なっている。
- したがって、巨大噴火 (Kt-7噴出) 時の状況と現在の状況は、火山活動度及び噴出物の体積の観点において差異が認められることから、現状、Kt-7を噴出したような噴火を起こす状態ではないと判断される。
- なお、登別ステージは、巨大噴火以降の中規模珪長質火砕噴火が発生したアヨロステージ、苦鉄質マグマが活動した竹浦ステージ、竹浦ステージを挟んで再び中規模珪長質火砕噴火が発生したクッタラステージのうち、アヨロステージ及びクッタラステージと同様、噴出物が珪長質な組成を示すが、両ステージとは異なり、約4万年間火砕噴火は発生しておらず、噴出率も極めて小さい。
- このため、現在の噴火活動は珪長質火砕噴火が発生したアヨロステージ及びクッタラステージのような状態には至っていないと判断されることから、現状においてKt-1、Kt-2、Kt-3、Kt-Hy及びKt-6と同規模の珪長質火砕噴火が発生する可能性は小さいと評価される (当評価を踏まえた「降下火砕物の影響評価」については、5.1章参照)。

登別ステージ以前の噴出物体積*2 () カッコ内はマグマ体積 (DRE)

噴出物名	噴出物体積 (km ³)		噴出物名	噴出物体積 (km ³)	
		火砕流 (km ³)			火砕流 (km ³)
Kt-1	25.4 (14.4)	7.1 (3.4)	Kt-4	18.8 (11)	2.1 (1)
Kt-3	34.4 (20.1)	4.7 (2.3)	Kt-6	28.9 (16.8)	4.2 (2)
Kt-Hy	9.2~10.5 (7~8)	0.8 (0.4) *3	Kt-8	≤VEI5 class	≤VEI5 class

*1 Kt-7を噴出した噴火は、Amma-Miyasaka et al. (2020) によれば、噴出規模が概算として「VEI7 class」とされているが、具体的な数値が示されていないことから、Amma-Miyasaka et al. (2020) を含む複数の文献を参考に、当社で噴出物体積を算出した。その結果、Kt-7の噴出物体積は60~90km³となり、最大値である90km³は、Amma-Miyasaka et al. (2020) における「VEI7 class」と大きな矛盾はないものと考えられる。

*2 噴出物体積は、P148の活動履歴に示すマグマ体積を山元 (2014) に基づき、当社が換算した。

*3 Miura et al. (2022) によれば、Kt-Hyの火砕物密度流は、サブユニット (Lpdc, Mpdcc及びUpdc) に区分できるとされ、マグマ体積については、Updcの0.4km³ (DRE) のみ推定されている。
 なお、同文献によれば、Lpdc及びMpdccの規模については、分布に不確実性があるため正確に決定できないものの、谷埋め型及び局所的な堆積物であることから、Updcよりも小さくなる可能性があると考えられている。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

① 活動履歴 (3/6)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

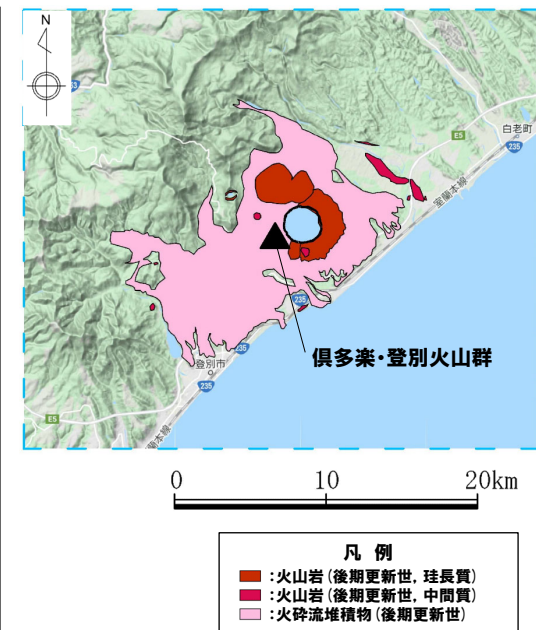
倶多楽・登別火山群の概要

火山名※1	C17 倶多楽・登別火山群
敷地からの距離	80.5km
火山の形式※2	成層火山-カルデラ, 溶岩ドーム
活動年代※3	約11万年前以降
評価	約1万年前以降に活動しており, 完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2023年8月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2023年8月確認。

※3 P148に示す倶多楽・登別火山群の活動履歴に基づく。

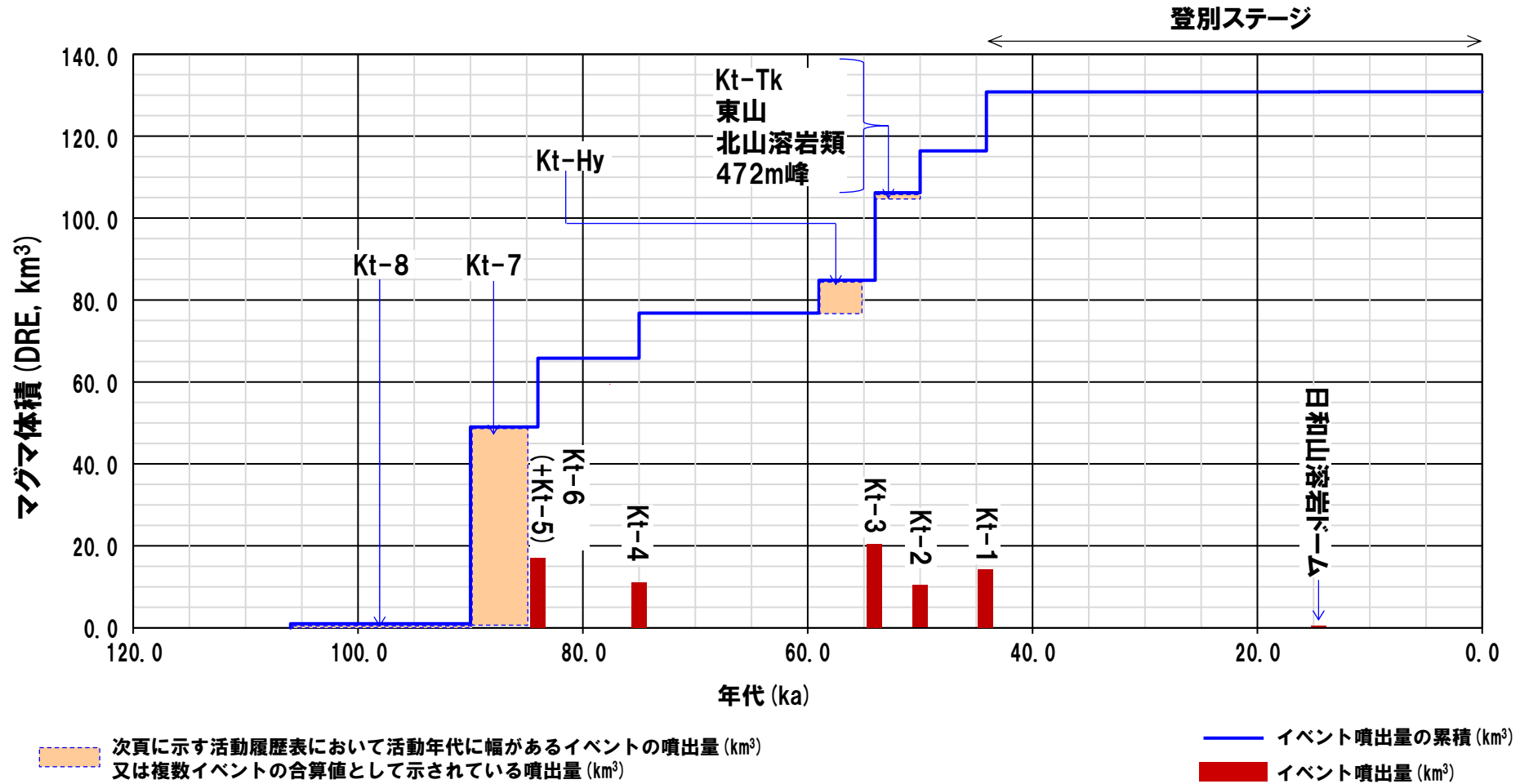


倶多楽・登別火山群の位置図
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

① 活動履歴 (4/6)

一部修正 (H28/2/5審査会合)



噴出量-年代階段ダイアグラム

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

① 活動履歴 (5/6)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

倶多楽・登別火山群活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 DRE (km ³)	火山体積 (km ³)	参考文献	
第四紀	完新世 A.D.1800頃 A.D.1800頃 8.5ka-A.D.1663	(裏地獄) (大湯沼) Nb-a~ ^{※1}	(水蒸気爆発) (水蒸気爆発) (水蒸気爆発)		
	更新世				
	登別 ステージ 14.5ka 不明	日和山溶岩ドーム 樺湖アグルチネート	0.04 不明	76.5	山縣 (1994) 森泉 (1998) 第四紀火山 カタログ委員 会編 (2000) 山元 (2014) Amma- Miyasaka et al. (2020) Miura et al. (2022)
	クッタラ ステージ 44.1ka ca.50ka	Kt-1: pfa,pfl,ps,sfa Kt-2: pfa	14.4 10.2		
	竹浦ステージ (episode Kt-Tk) 不明 不明	Kt-Tk: sfa 東山	0.4 0.2		
	episode Kt-Kt 不明 不明	北山溶岩類 472m峰	0.5 0.2		
	ca.54ka	Kt-3: pfa,afa,ps,pfl	20.1		
	アヨロ ステージ 59-55ka	Kt-Hy: pfa,ps,afa,pfl	7~8 ^{※2}		
	ca.75ka	Kt-4: pfa,ps,pfl	11		
	ca.84ka	Kt-6 (+Kt-5): pfa,ps,pfl	Kt-5: 不明 Kt-6: 16.8		
	90-85ka	Kt-7: pfa,pfl	6~24 (pfa) ^{※3} 24 (pfl) ^{※3}		
	先アヨロ ステージ 106-85ka 不明 不明	Kt-8: pfa,afa,pfl 石山溶岩流 地獄谷火砕丘	[\leq VEI5 class ^{※4}] 不明 不明		

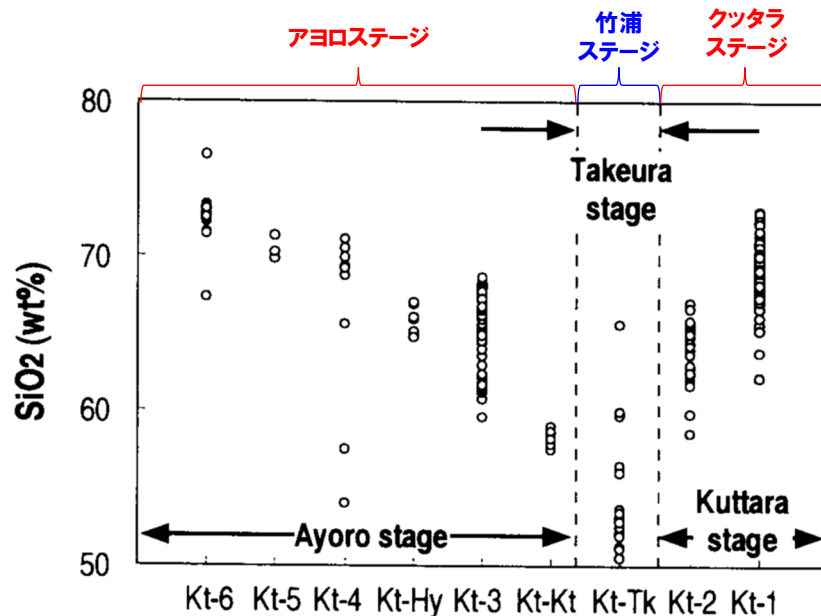
※1 後藤ほか (2013) によれば、12層の水蒸気噴火堆積物の各々の噴火堆積物の体積は10⁵m³オーダー、また、Goto et al. (2015a) によれば、Nb-aの噴出物体積は、4.6×10⁵m³とされている。
 ※2 Miura et al. (2022) によれば、成層火山の体積は6.7km³と推定され、表に示すマグマ体積はKt-Hyテフラの噴出物体積と成層火山体積の推定値を足し合わせた値とされている。
 ※3 Kt-7を噴出した噴火は、Amma-Miyasaka et al. (2020) によれば、噴出規模が概算として「VEI7 class」とされているが、具体的な数値が示されていないことから、Amma-Miyasaka et al. (2020) を含む複数の文献を参考に、当社で噴出物体積を算出した。その結果、Kt-7の噴出物体積は60~90km³となり、最大値である90km³は、Amma-Miyasaka et al. (2020) における「VEI7 class」と大きな矛盾はないものと考えられる。
 マグマ体積 (DRE) は、山元 (2014) に基づき換算した値であり、Kt-7のマグマ体積は30~48km³ (DRE) となったことから、噴出量-年代階段ダイアグラムにおいては、48km³として図示している。
 ※4 Miura et al. (2022) によれば、Kt-8の噴出規模は、概算として「 \leq VEI5 class」とされていることから、噴出量-年代階段ダイアグラムにおいては、マグマ体積 (DRE) を1km³として図示している。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

① 活動履歴 (6/6)

【噴出物の組成】

- 森泉(1998)に基づく、中規模珧長質火砕噴火が発生したアヨロステージ、苦鉄質マグマが活動した竹浦ステージ、竹浦ステージを挟んで再び中規模珧長質火砕噴火が発生したクッタラストージと推移しており、各ステージの噴出物の組成には変化が認められる。
- また、勝井ほか(1988)に基づく、現在の噴火活動である登別ステージの噴出物(日和山溶岩)についても、珧長質な組成を示す(右表参照)。



倶多楽・登別火山群の噴出物の全岩SiO₂含有量の時間変化 (森泉(1998)に加筆)

	登別ステージ	
	後カルデラ期	
No.	28	29
SiO ₂	67.08	56.98
TiO ₂	0.37	0.68
Al ₂ O ₃	15.35	15.72
Fe ₂ O ₃	3.19	7.33
FeO	1.80	2.48
MnO	0.06	0.16
MgO	1.64	3.31
CaO	4.32	7.49
Na ₂ O	3.33	3.04
K ₂ O	1.43	0.69
P ₂ O ₅	0.00	0.07
H ₂ O(+)	0.44	1.34
H ₂ O(-)	0.56	0.34
Total	99.57	99.63
Analyst	O.K	KK

No.28: 普通輝石シソ輝石デイサイト, 日和山円頂丘溶岩
 No.29: 日和山溶岩中の集積岩

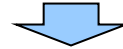
日和山溶岩の全岩化学組成 (勝井ほか(1988)に基づき作成)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-1 地球物理学的調査(地下構造:まとめ)

【目的】

○マグマ溜まりの位置、規模等を把握するため、地下構造調査(地震波速度構造、比抵抗構造及び重力異常)を実施する。



【各項目における検討結果】

(地震波速度構造)(次頁～P153参照)

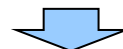
- 倶多楽・登別火山群直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、以下の状況が認められる。
 - ・メルトの存在を示唆する低Vpかつ高Vp/Vs領域が、やや北方で、上部地殻の一部まで広がっているものの、その中心部は下部地殻に位置している。また、当該領域が倶多楽・登別火山群直下の浅所まで連続する状況は認められない。
 - ・深度約10km程度以浅においては、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。
 - ・倶多楽・登別火山群直下の浅所においては、低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域は信頼度が低い範囲に含まれる若しくは隣接しており、また、通常地震が深度10km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。
 - ・倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。

(比抵抗構造)(P154～P159参照)

- 倶多楽・登別火山群直下の浅部(4km以浅)には熱水、高温及び熱水変質帯によると考えられる低比抵抗領域が部分的に認められるが、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域は認められない。

(重力異常)(P160～P163参照)

- 重力異常を踏まえマグマ溜まりに関して考察されている文献は認められない。



- 倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さいと判断される。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造-まとめ-) (1/3)

【目的】

- Nakajima et al. (2001) 及び中道 (2022) によると、活火山直下の上部地殻で観測される低Vp、低Vsかつ低Vp/Vs領域は水の存在でしか説明できないとされていることから、同領域は水の存在を示唆するものと判断される。
- また、最上部マントルから下部地殻で観測される低Vp、低Vsかつ高Vp/Vs領域は、メルトによるものとする方が適当であるとされていることから、本検討(地震波速度構造の観点からの地下構造の確認)においては、同領域はメルトの存在を示唆するものとして取り扱う。
- このことから、地震波速度構造においては、倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)を広く確認した上で、さらに約10km程度以浅において、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域の有無を確認する。
- また、あわせて低周波地震及び通常の地震の分布状況についても考慮する。



【検討結果(次頁~P153参照)】

- 倶多楽・登別火山群直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、以下の状況が認められる。
 - ・メルトの存在を示唆する低Vpかつ高Vp/Vs領域が、やや北方で、上部地殻の一部まで広がっているものの、その中心部は下部地殻に位置している。また、当該領域が倶多楽・登別火山群直下の浅所まで連続する状況は認められない。
 - ・深度約10km程度以浅においては、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。
 - ・倶多楽・登別火山群直下の浅所においては、低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域は信頼度が低い範囲に含まれる若しくは隣接しており、また、通常の地震が深度10km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。
- 倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造) (2/3)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

○防災科学技術研究所HP上では、「日本列島下の三次元地震波速度構造(2022年度版)」として、Hi-net、F-net及びS-netの観測網による地震記録を用いた、海域を含む日本全国を対象とした地震波トモグラフィ解析結果を公開している(解析手法等の詳細はMatsubara et al. (2022)に記載)。その公開データを用いて、当社が倶多楽・登別火山群における水平・鉛直断面図を作成した。



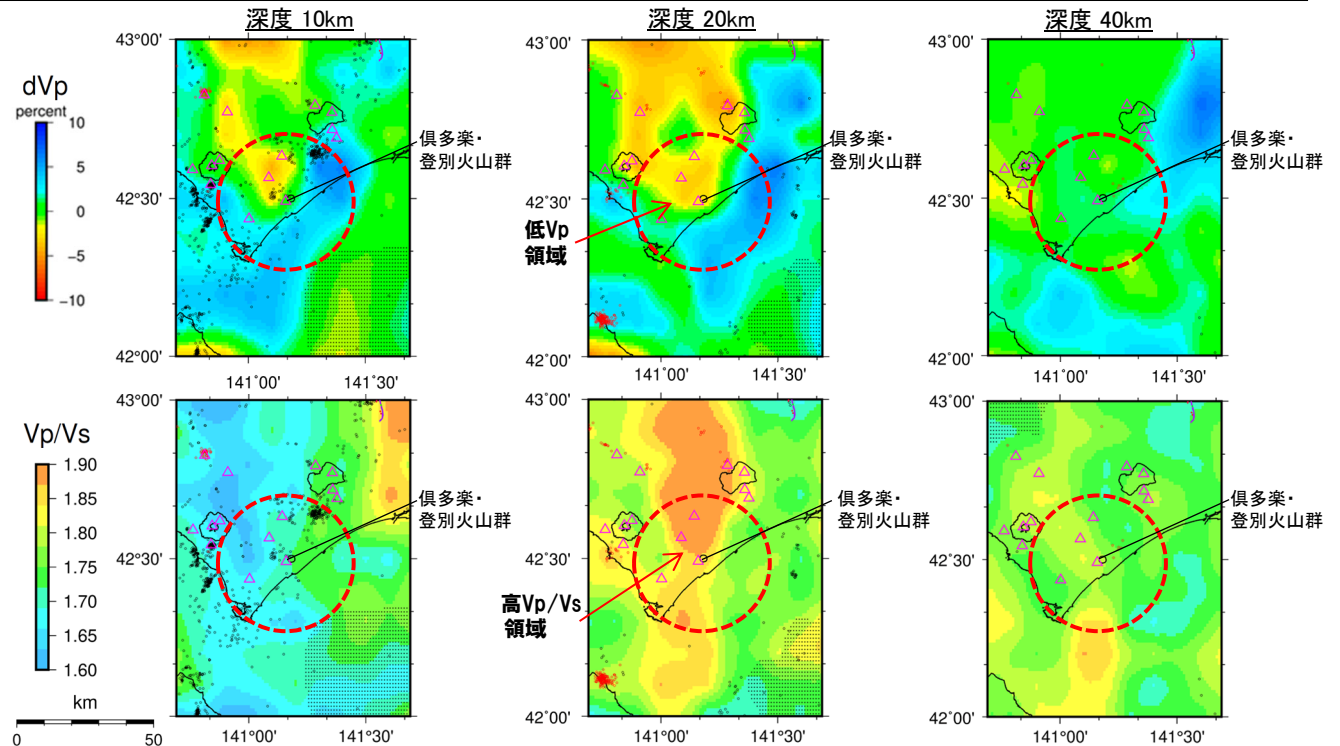
- 倶多楽・登別火山群直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、以下の状況が認められる。
 - ・メルトの存在を示唆する低Vpかつ高Vp/Vs領域が、やや北方で、上部地殻の一部まで広がっているものの、その中心部は下部地殻に位置している(次頁に示す南北断面を参照)。また、当該領域が倶多楽・登別火山群直下の浅所まで連続する状況は認められない。
 - ・深度約10km程度以浅においては、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。
 - ・倶多楽・登別火山群直下の浅所においては、低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域は信頼度が高くない範囲に含まれる若しくは隣接しており、また、通常地震が深度10km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。
- 倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。

【当社におけるマグマ溜まりの状況の検討方法(P92~P96参照)】

- 地球物理学的調査のうち、地下構造については、上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認することとする。
- 地震波速度構造については、メルトの存在を示唆する低Vpかつ高Vp/Vs領域が存在するか否かを確認する。
- 地震波速度構造について確認する際は、低周波地震及び通常地震の分布状況についても考慮する。

凡例

- △ 第四紀火山
- 震源(MJMA \geq 0)
- 低周波地震の震源(期間:2000/10/1-2020/12/31)
- 半透明黒色部 チェッカーボードテストの復元率が20%以下の範囲
- 活断層 } 今泉ほか編(2018)をトレース
- 推定活断層
- 倶多楽・登別火山群を中心とした、半径25kmの範囲

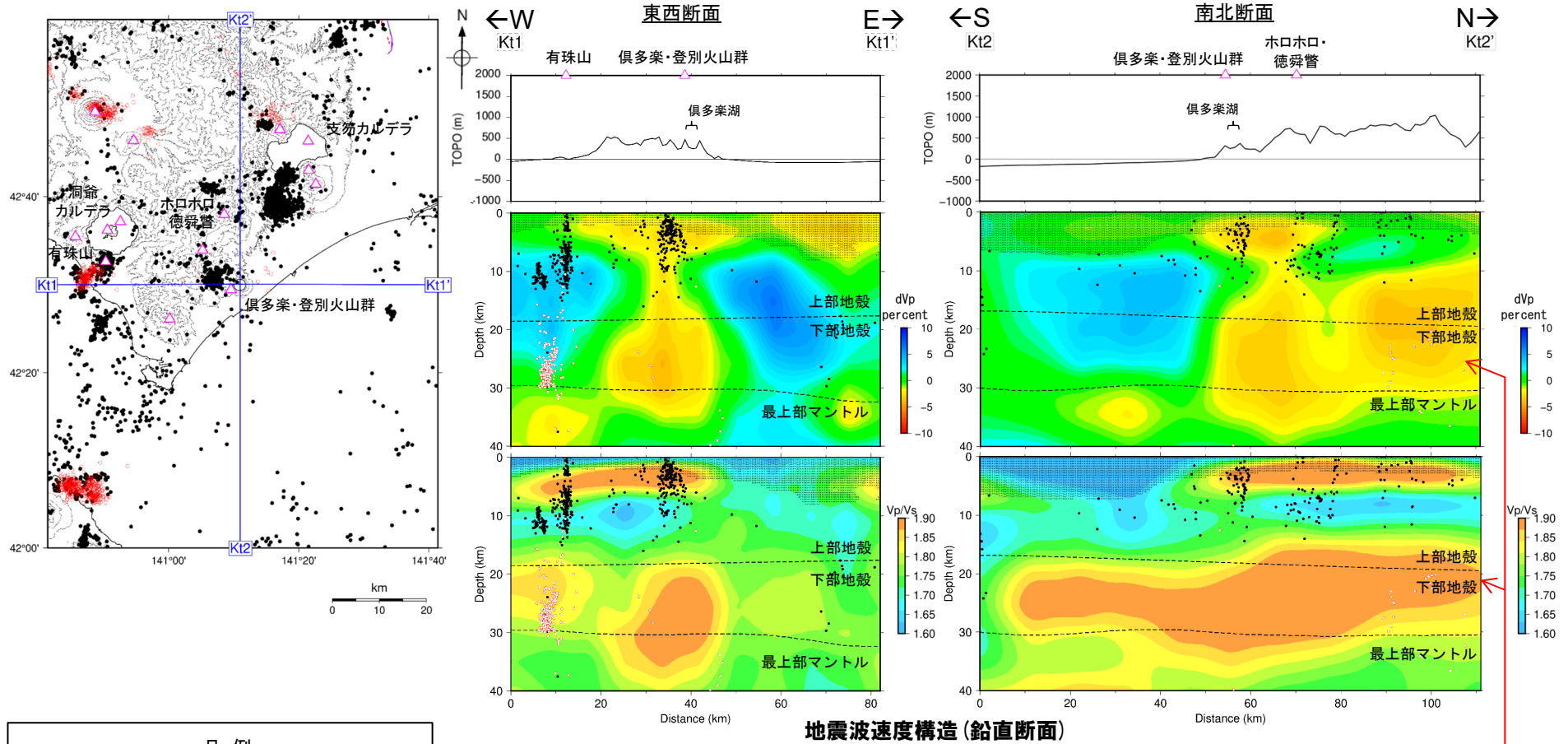


地震波速度構造(水平断面)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造) (3/3)

一部修正 (R5/1/20審査会合)



凡例

△	第四紀火山
黒点	震源 (M _{JMA} ≥ 0)
赤点	低周波地震の震源 (期間: 2000/10/1-2020/12/31)
半透明黒色部	チェッカーボードテストの 復元率が20%以下の範囲
—	活断層
—	推定活断層

今泉ほか編(2018)をトレース

- メルトの存在を示唆する低Vpかつ高Vp/Vs領域が、やや北方で、上部地殻の一部まで広がっているものの、その中心部は下部地殻に位置している。また、当該領域が倶多楽・登別火山群直下の浅所まで連続する状況は認められない。
- 深度約10km程度以浅においては、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。
- 倶多楽・登別火山群直下の浅所においては、低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域は信頼度が低い範囲に含まれる若しくは隣接しており、また、通常の地震が深度10km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。

鉛直断面に記載している火山は、断面位置を中心に±5km内の火山を投影した。なお、水平方向の分解能は約20km。鉛直方向の分解能は深さごとに異なるが、深さ0km~10kmでは分解能約5km、深さ10km~40kmでは分解能約10kmである。上部地殻と下部地殻の境界(コンラッド面)はZhao et al. (1992)、下部地殻と最上部マントルの境界(モホ面)はMatsubara et al. (2017)をトレースした。また、断面から±5kmの範囲の震源をプロットした。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造-まとめ-) (1/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

【目的】

- 後藤・三ヶ田(2008)によれば、比抵抗は岩石中の伝導性物質の量に依存し、間隙水、マグマ及び湿潤状態の粘土鉱物は高い導電性(低比抵抗)を示すとされている。
- このことから、比抵抗構造においては、倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)における低比抵抗領域の有無を確認する。



【検討結果(次頁~P159)】

- Goto and Johmori(2015)に基づくと、倶多楽・登別火山群直下の浅部には、熱水変質帯によると考えられる低比抵抗領域が認められる。
- Hashimoto et al.(2019)に基づくと、登別温泉及び倶多楽湖(クツラカルデラ)の北東部から南側の浅部には、熱水、高温及び熱水変質帯によると考えられる低比抵抗領域が認められ、倶多楽湖直下には低比抵抗領域は認められない。
- なお、倶多楽湖直下に認められる数十Ωmの領域については、メルト分率が低く冷えたマッシュ状マグマの存在を否定するものではないとされており、このことは、深度4km以深に広がるマグマ溜まり※の縁辺部を捉えている可能性を示唆していると考えられるが、以下のことからマッシュ状マグマである可能性は小さいものと判断される。
 - ・当社が作成した地震波速度構造断面においては、深度4km程度までの表層付近は信頼度が高くない範囲に含まれる若しくは隣接している。
 - ・通常の地震が深度10kmから地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。
 - ・下部地殻に中心部が位置する低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域が倶多楽・登別火山群直下まで連続する状況は認められない。



- 倶多楽・登別火山群直下の浅部(4km以浅)には熱水、高温及び熱水変質帯によると考えられる低比抵抗領域が部分的に認められるが、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域は認められない。

※東宮(2016)の“magma reservoir”に対応する領域(P94参照)。

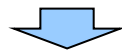
(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造)(2/5)

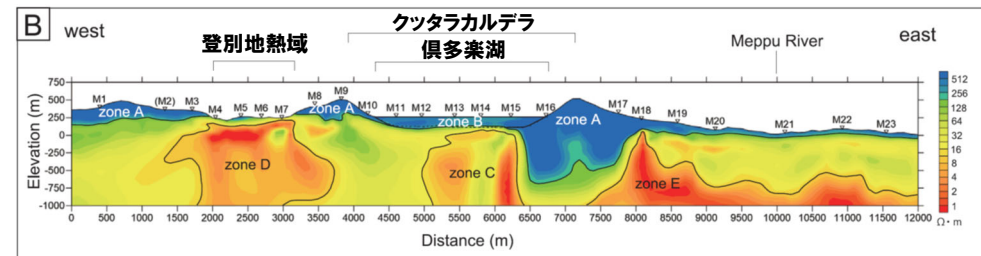
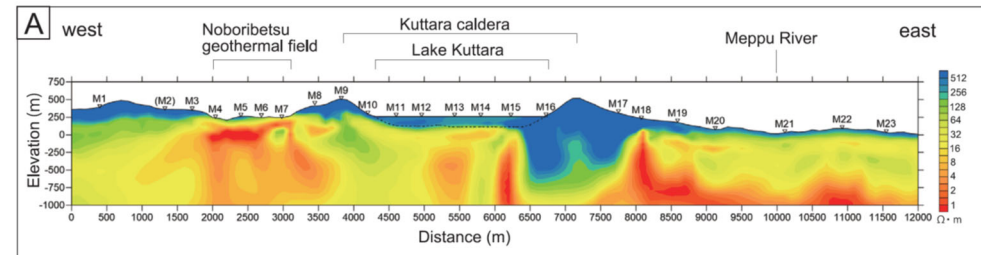
再掲(R5/1/20審査会合)

【Goto and Johmori (2015)】

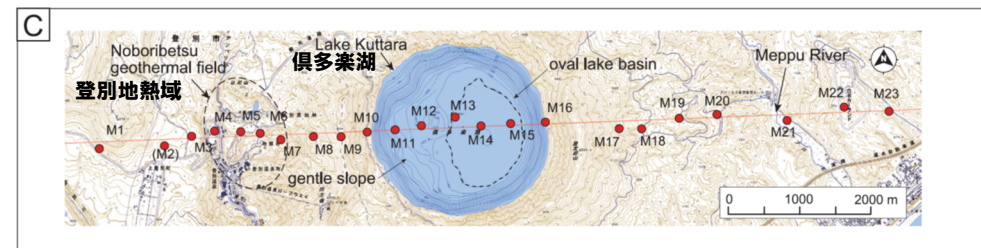
- 倶多楽・登別火山群において、CSAMT法による電磁気探査を実施しているGoto and Johmori (2015) をレビューした。
- ・Goto and Johmori (2015) によれば、倶多楽湖直下の柱状の低比抵抗領域(右図Bの「zone C」)、登別地熱域直下の柱状の低比抵抗領域(右図Bの「zone D」)及びクッタラ火山東部の地下に広がる低比抵抗領域(右図Bの「zone E」)が認められるとされている。
- ・「zone C」は、クッタラカルデラ直下に位置していることから、カルデラ崩壊時に沈降した溶岩塊や火砕物が熱水変質を受けた領域と解釈しているとされている。
- ・「zone D」は、地熱域の直下に位置することから、高温流体の湧出によって生じた熱水変質帯であると解釈しているとされている。
- ・「zone E」は、当該領域における掘削データがないため、適切な解釈を行うことはできないが、熱水変質を受けた可能性が考えられるとされている。



- Goto and Johmori (2015) に基づくと、倶多楽・登別火山群直下の浅部には、熱水変質帯によると考えられる低比抵抗領域が認められる。



クッタラ火山直下の比抵抗構造(図A:注釈なし, 図B:注釈あり)
(Goto and Johmori (2015) に加筆)



MT観測点位置図
(Goto and Johmori (2015) に加筆)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造)(3/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

【Hashimoto et al. (2019)】

- 倶多楽・登別火山群において、MT法による電磁気探査を実施しているHashimoto et al. (2019) をレビューした。
 - ・Hashimoto et al. (2019) によれば、倶多楽湖を横切る東西断面の浅部において、Goto and Johmori (2015) と同様な結果が得られたとされている。
 - ・登別温泉直下の深度1km以浅において、低比抵抗領域(1~10Ωm, 次頁右図「C1」) が認められる。
 - ・既往調査において堆積物中に熱水変質鉱物が多く含まれること及び温泉水中の酸素と水素の同位体比が深部起源を示唆することが報告されていることを踏まえると、低比抵抗領域C1は、深部から上昇する熱水、熱水または火山ガスによる高温並びに熱水変質鉱物による複合作用により低比抵抗を示すと考えられるとされている。
 - ・クッタラカルデラの北東部から南側の浅部において、パッチ状の低比抵抗領域(1~10Ωm, 次頁右図「C2」及び次頁左下図) が認められる。
 - ・深部の掘削データはないものの、低比抵抗領域C2が地下水によるものとする、大気由来または倶多楽湖の湖水由来の水はそこまで比抵抗が低くないことから、火山性流体が注入されたために低比抵抗を示す水が存在すると考えられるとされている。
 - ・倶多楽湖直下の深度4km以浅(次頁右図「M」)において、1Ωmオーダーの比抵抗値を示しマグマ溜まりを示唆するような低比抵抗領域は認められないとされている。
 - ・しかし、領域Mの数十Ωmという比抵抗値を考慮すると、メルト分率が低く冷えたマッシュ状マグマ或いは気液が混合した熱水貯留層の存在を否定するものではないとされている。



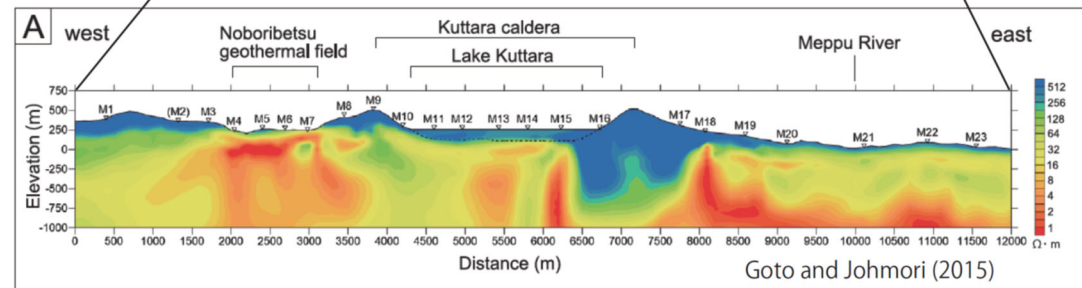
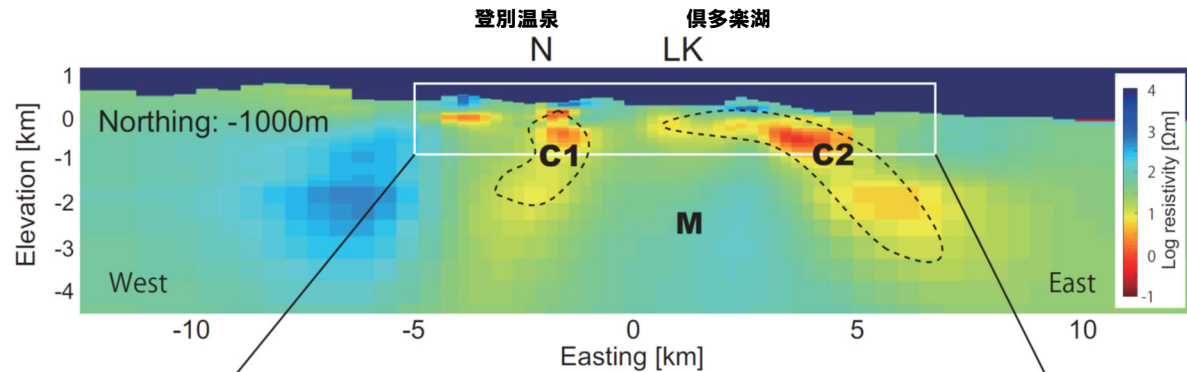
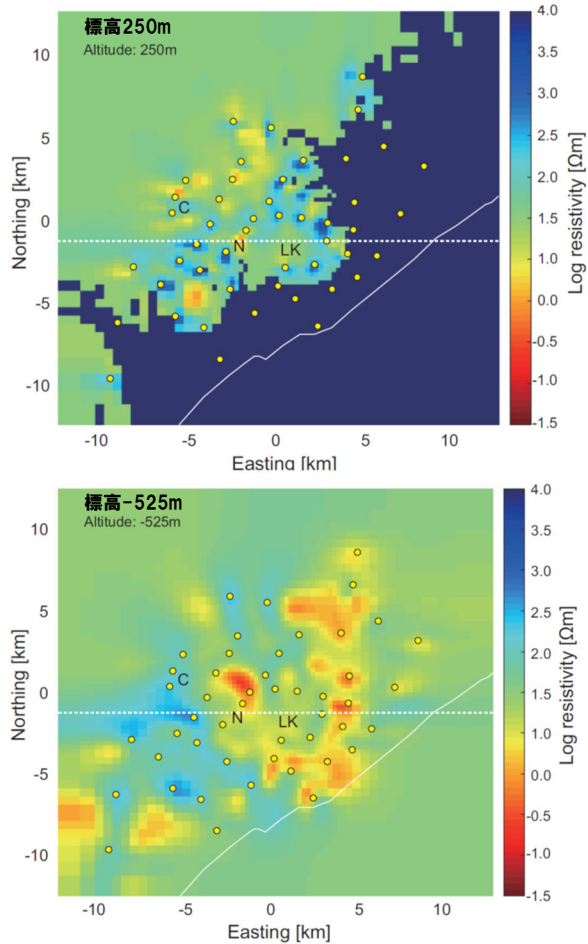
- Hashimoto et al. (2019) に基づくと、登別温泉及び倶多楽湖(クッタラカルデラ)の北東部から南側の浅部には、熱水、高温及び熱水変質帯によると考えられる低比抵抗領域が認められ、倶多楽湖直下には低比抵抗領域は認められない。
- なお、倶多楽湖直下に認められる数十Ωmの領域については、メルト分率が低く冷えたマッシュ状マグマの存在を否定するものではないとされており、このことは、深度4km以深に広がるマグマ溜まり*の縁辺部を捉えている可能性を示唆していると考えられるが、以下のことからマッシュ状マグマである可能性は小さいものと判断される。
 - ・当社が作成した地震波速度構造断面においては、深度4km程度までの表層付近は信頼度が高くない範囲に含まれる若しくは隣接している(P159図中①)。
 - ・通常の地震が深度10kmから地表付近まで分布していることから(P159図中②)、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる(P159図中②)。
 - ・下部地殻に中心部が位置する低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域が倶多楽・登別火山群直下の浅所まで連続する状況は認められない(P159図中③)。

*東宮(2016)の“magma reservoir”に対応する領域(P94参照)。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造) (4/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)



上段:クッタラ火山の比抵抗構造(東西断面, 断面位置は左図参照)
 下段:上段図中の白枠に対応するGoto and Johmori (2015) による比抵抗構造 (P155参照)
 (Hashimoto et al. (2019) に加筆)

LK: 倶多楽湖
 N: 登別温泉
 C: カルルス温泉
 ● : MT観測点
 白破線: 右図東西断面位置

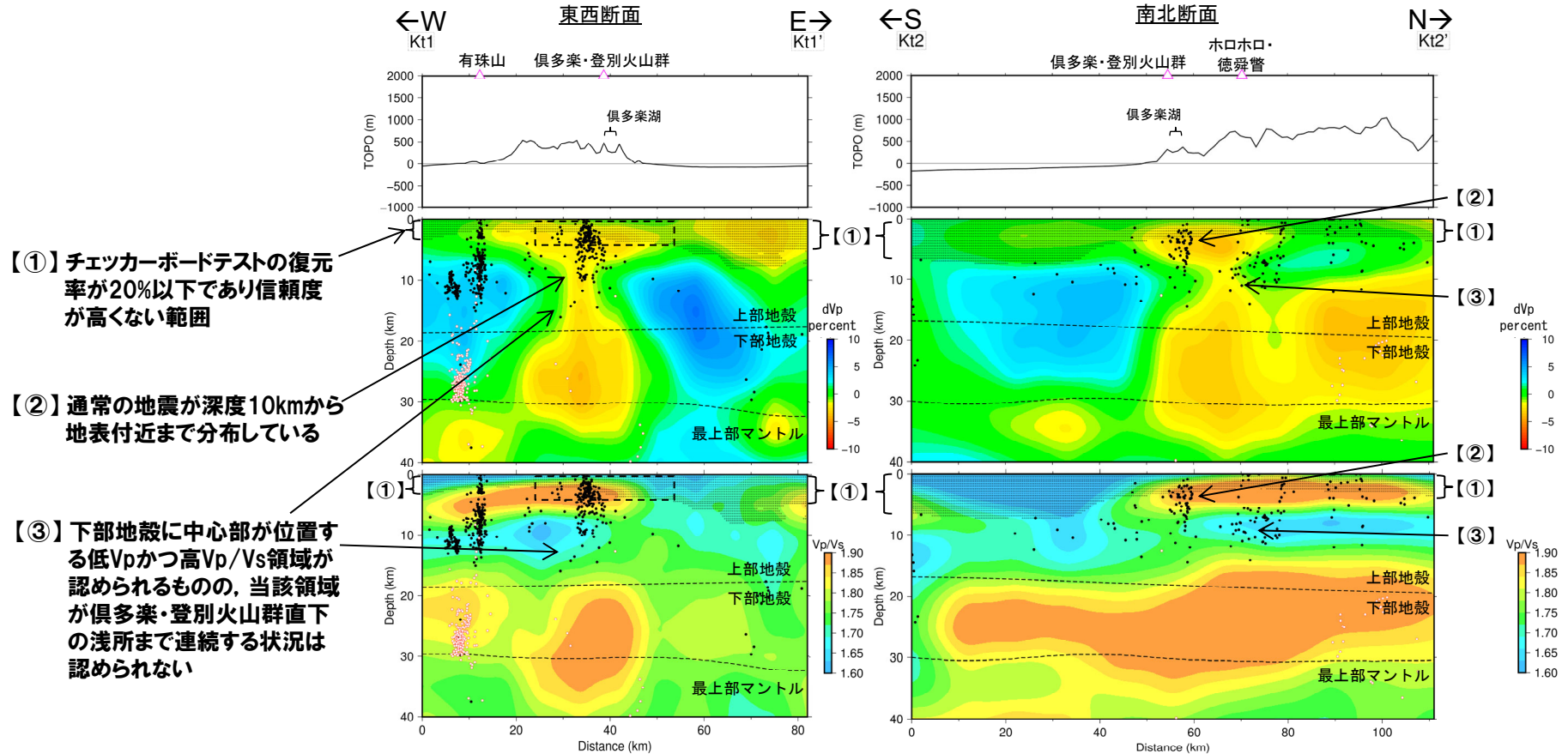
クッタラ火山の比抵抗構造(水平断面)
 (Hashimoto et al. (2019) に加筆)

余白

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造) (5/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)



【①】チェッカーボードテストの復元率が20%以下であり信頼度が高くない範囲

【②】通常の地震が深度10kmから地表付近まで分布している

【③】下部地殻に中心部が位置する低Vpかつ高Vp/Vs領域が認められるものの、当該領域が倶多楽・登別火山群直下の浅所まで連続する状況は認められない

地震波速度構造 (鉛直断面, 断面位置図はP153参照)

凡例	
△	第四紀火山
黒点	震源 (MJMA \geq 0)
赤点	低周波地震の震源 (期間: 2000/10/1-2020/12/31)
半透明黒色部	チェッカーボードテストの復元率が20%以下の範囲

鉛直断面に記載している火山は、断面位置を中心に ± 5 km内の火山を投影した。なお、水平方向の分解能は約20km。鉛直方向の分解能は深さごとに異なるが、深さ0km~10kmでは分解能約5km、深さ10km~40kmでは分解能約10kmである。上部地殻と下部地殻の境界(コンラッド面)はZhao et al. (1992)、下部地殻と最上部マントルの境界(モホ面)はMatsubara et al. (2017)をトレースした。また、断面から ± 5 kmの範囲の地震をプロットした。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常-まとめ-) (1/4)

【目的】

- 下鶴ほか編(2008)によれば、重力異常から地下密度構造を求めることができ、周辺の地殻に比べて火山の下に何らかの質量欠損があるか、過剰があるかは火山の地下構造を論ずるうえで重要であるとされている。
- このことから、重力異常を踏まえた支笏カルデラ周辺の地下構造に関して考察している文献について確認する。



【検討結果(次頁~P163)】

- 森泉(1998)に基づくと、倶多楽・登別火山群周辺には、アヨロステージ以前の火口位置を示唆する可能性も考えられる低重力異常域が認められる。
- 畠山ほか(2005)に基づくと、倶多楽・登別火山群周辺においては、現在のクツタラカルデラより大きい低重力異常型カルデラが存在していたことを示唆する可能性も考えられる低重力異常域が認められる。
- 重力異常を踏まえたマグマ溜まりに関する考察はされていない。



- 重力異常を踏まえたマグマ溜まりに関して考察されている文献は認められない。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常)(2/4)

一部修正(R5/1/20審査会合)

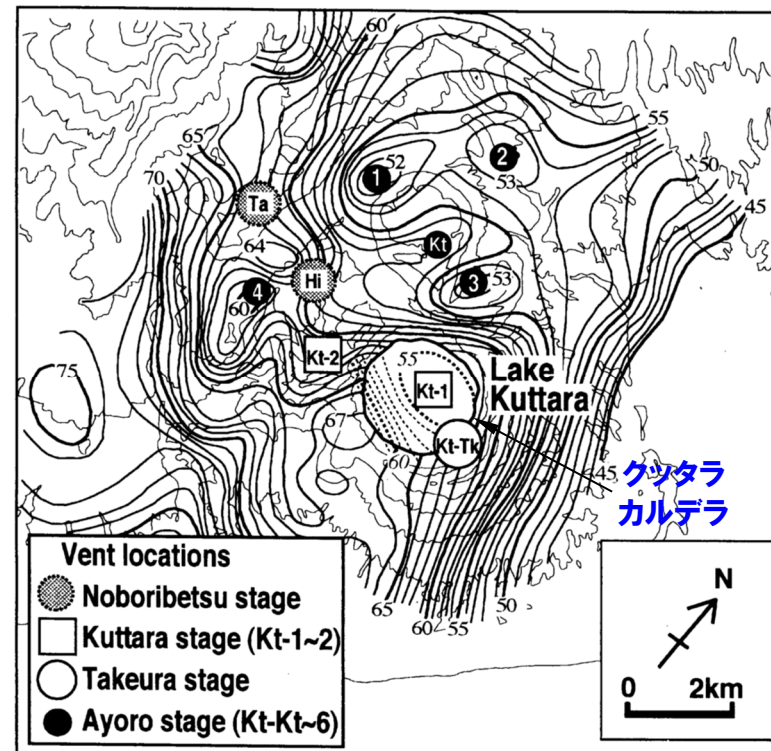
【森泉(1998)】

- 倶多楽・登別火山群周辺における地形と重力測定の結果から火口位置の推定を行っている森泉(1998)をレビューした。
- ・森泉(1998)によれば、アヨロステージ※のKt-6, 4, 3テフラの噴火では噴出体積が10km³(D.R.E.)を超えることから、クッタラステージ※のKt-1と同様にカルデラが形成された可能性があるとしてされている。
- ・クッタラカルデラを給源とするKt-1火砕流の分布地域に比べるとアヨロステージの火砕流がクッタラカルデラの東側に偏って分布することから、下図の1~3の低重力異常地域はアヨロステージの火口である可能性があるとしてされている。

※各活動ステージについてはP148参照。



- 森泉(1998)に基づく、倶多楽・登別火山群周辺には、アヨロステージ以前の火口位置を示唆する可能性も考えられる低重力異常域が認められる。
- 重力異常を踏まえたマグマ溜まりに関する考察はされていない。



クッタラ火山群周辺の重力異常及び推定火口位置(森泉(1998)に加筆)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

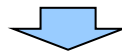
②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常) (3/4)

再掲 (R5/1/20審査会合)

【畠山ほか(2005)】

○地形、重力異常等から現在のクッタラカルデラを取り巻く先クッタラカルデラを提唱している畠山ほか(2005)をレビューした。

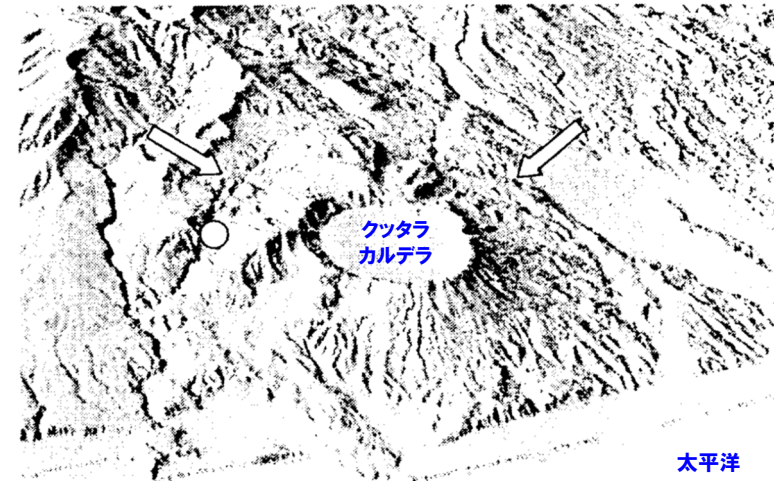
- ・畠山ほか(2005)によれば、衛星画像でこの地域を見てみると、倶多楽カルデラの北方から西方にかけて環状構造(下図矢印)が確認できるとされている。
- ・新エネルギー・産業技術総合開発機構(1990)による等重力線図(次頁参照)では、環状構造の内側(成層火山により埋積されていない部分)に複数の低重力異常域が見られ、これらの低重力異常域の存在から、この環状構造はカルデラに伴うものであると考えられるとされている。
- ・森泉(1998)(前頁参照)は、これらの低重力異常域それぞれが火口であると推定したが、これらの低重力異常域はひとつひとつの火口を示しているのではなく、大きな低重力異常型カルデラを示すものであると想定できるとされている。
- ・環状構造の存在を考えると、現在のクッタラカルデラよりも大きいカルデラが成層火山により埋められ、カルデラ壁と成層火山体との間に低重力異常域が残っていると考えたほうが合理的であるとされている。
- ・クッタラ火山の噴出量は 100km^3 を優に超えたと考えられ、洞爺カルデラ(径 $11\times 12\text{km}$, 噴出量 118km^3), 支笏カルデラ(径 $14\times 18\text{km}$, 噴出量 120km^3)に匹敵する噴出量であるが、クッタラカルデラは径 3km であり、その量を噴出したと考えるのは難しいとされている。
- ・今回発見した環状構造が成層火山の形成以前にできた古いカルデラであると考えれば、噴出量とカルデラのサイズは合理的に説明できるとされている。



- 畠山ほか(2005)に基づく、倶多楽・登別火山群周辺においては、現在のクッタラカルデラより大きい低重力異常型カルデラが存在していたことを示唆する可能性も考えられる低重力異常域が認められる。
- 重力異常を踏まえたマグマ溜まりに関する考察はされていない。

凡例

- ⇒ : 成層火山体を取り巻く環状構造
- : 登別温泉

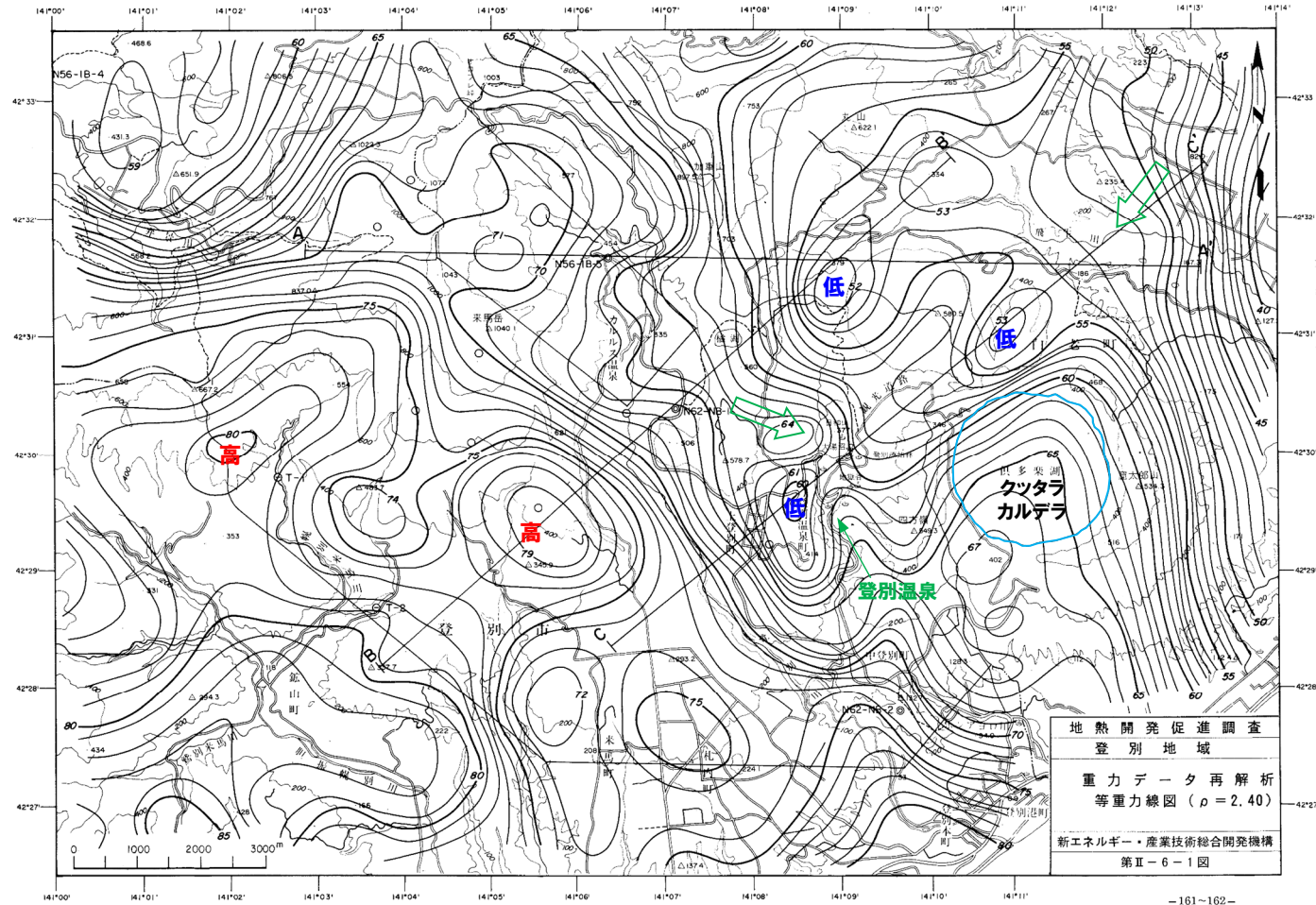


先クッタラカルデラ周辺の3D地図画像(畠山ほか(2005)に加筆)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常) (4/4)

再掲 (R5/1/20審査会合)



高・低: 新エネルギー・産業技術総合開発機構 (1990) における主な高重力域又は主な低重力域を示す

⇒: 前頁図中で環状構造 (矢印) が示される位置付近を示す

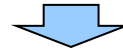
倶多楽・登別火山群周辺の等重力線図
(新エネルギー・産業技術総合開発機構 (1990) に加筆)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-5 地球物理学的調査(火山性地震及び地殻変動:まとめ)

【目的】

○マグマの移動・上昇, 集積等の活動の有無を把握するため, 火山性地震及び地殻変動の観点から検討を実施する。



【各項目における検討結果】

(火山性地震(低周波地震))(次頁~P171参照)

○倶多楽・登別火山群周辺の火山性地震のうち, 低周波地震活動は, ほとんど認められない。

(地殻変動)(P172~P180参照)

○倶多楽・登別火山群周辺の地殻変動は, 白老町の局所的な変動, プレート間固着効果等に伴う定常的な変動, 周辺の地震及び2000年有珠山噴火による余効変動等が認められる。

○また, 倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)において, 2016年以降に確認される隆起及び当該領域を含む基線の伸びは認められるが, 熱水の上昇・貯留に伴うものと推定される。

○これらの変動以外に継続的かつ顕著な変位の累積は認められない。



○倶多楽・登別火山群直下の上部地殻内(約20km以浅)には, 現状, 大規模なマグマの移動・上昇, 集積等の活動を示す兆候は認められないと判断される。

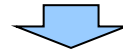
(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震-まとめ-) (1/6)

一部修正 (R3/10/14審査会合)

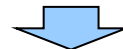
【目的】

- 下鶴ほか編(2008)によれば、火山性地震のうち低周波地震は、マグマや熱水などの流体が関与して発生していると考えられているものが多いとされている。
- このことから、倶多楽・登別火山群周辺の低周波地震の時空間分布を確認した上で、上部地殻における低周波地震群の有無を確認する。



【検討結果】

- 確認に当たっては、公的機関の観測結果を取りまとめた気象庁編(2013)「日本活火山総覧(第4版)」, 「第151回火山噴火予知連絡会資料」気象庁(2022)並びに気象庁地震月報(カタログ編)(2001年10月～2020年3月), 気象庁一元化処理検測値データ(2020年4月～2021年9月)等を用いた。
- 確認結果は以下の通り(下線部は低周波地震に関する事項)。
(気象庁, 2013)(次頁～P167参照)
 - 地震活動は、日和山の西側の浅部に認められ、規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。
 - 低周波地震活動は、ほとんど認められない。
- (気象庁, 2022)(P168参照)
 - 地震活動は、日和山の西側において2020年及び2021年に一時的に増加傾向が認められるが、それ以外の期間では火山性地震は少なく、地震活動は低調に経過している。
 - 低周波地震活動は、ほとんど認められない。
- (気象庁地震月報(カタログ編)及び気象庁一元化処理検測値データ)(P170～P171参照)
 - 倶多楽・登別火山群周辺においては、日和山の西側に普通地震の震央が集中している。
 - マグニチュード0以上の地震は、日和山の西側において2020年及び2021年に一時的に増加傾向が認められるが、低周波地震については、発生数は少なく増加傾向も認められない。



- 倶多楽・登別火山群周辺の火山性地震のうち、低周波地震活動は、ほとんど認められない。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)(2/6)

再掲(R5/1/20審査会合)

【気象庁編(2013)】

○倶多楽・登別火山群周辺には、公的機関の地震計が設置されている。

○気象庁編(2013)「日本活火山総覧(第4版)」に地震活動及び深部低周波地震活動の時空間分布が取りまとめられている。



倶多楽・登別火山群周辺の地震計位置図
 (気象庁編(2013)「日本活火山総覧(第4版)」に基づき作成)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震) (3/6)

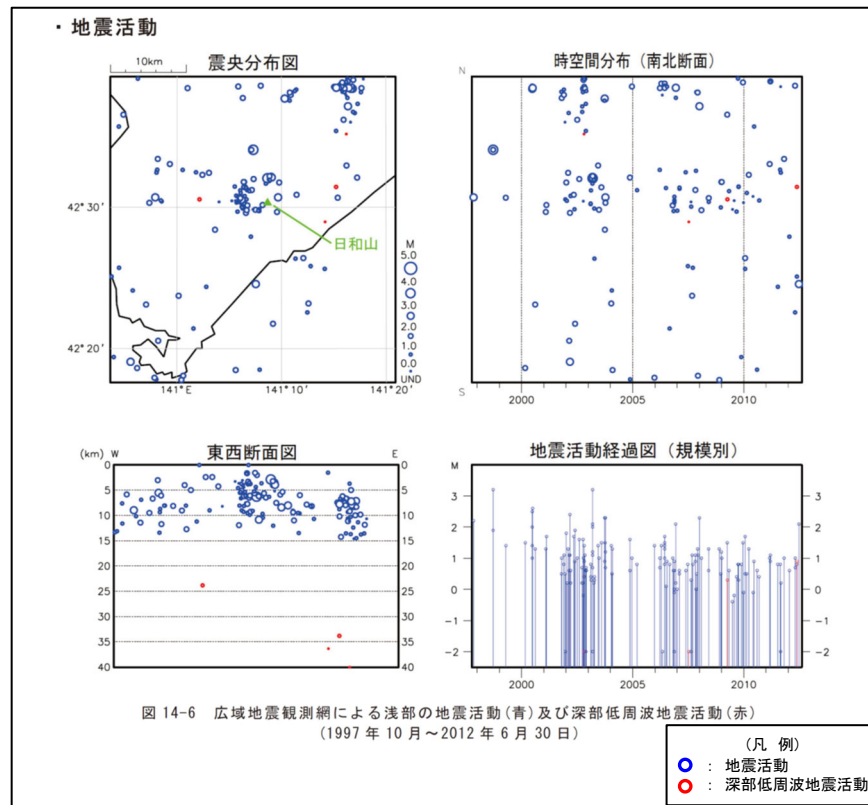
一部修正 (R5/1/20審査会合)

【気象庁編(2013)】

○倶多楽・登別火山群周辺の地震活動(1997年10月～2012年6月)を下図に示す。



- 倶多楽・登別火山群周辺においては、日和山の西側に震央の分布が認められる。
- 地震活動は、日和山の西側の浅部に認められ、規模・位置の時空間分布に変化の兆候は認められない。
- 低周波地震活動は、ほとんど認められない。



倶多楽・登別火山群周辺の地震活動
(1997年10月～2012年6月30日, 「日本活火山総覧(第4版)」に加筆)

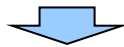
(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)(4/6)

一部修正 (R5/7/7審査会合)

【気象庁(2022)】

○「第151回火山噴火予知連絡会資料」(気象庁, 2022)では, 倶多楽・登別火山群周辺の地震活動(1997年10月~2022年10月)について, 右図の通り示されている。



- 倶多楽・登別火山群周辺においては, 日和山の西側に震央の分布が認められる。
- 地震活動は, 日和山の西側において2020年及び2021年に一時的に増加傾向が認められるが, それ以外の期間では火山性地震は少なく, 地震活動は低調に経過している。
- 低周波地震活動は, ほとんど認められない。

低周波地震活動は, ほとんど認められない

日和山の西側において2020年及び2021年に一時的に増加傾向が認められる

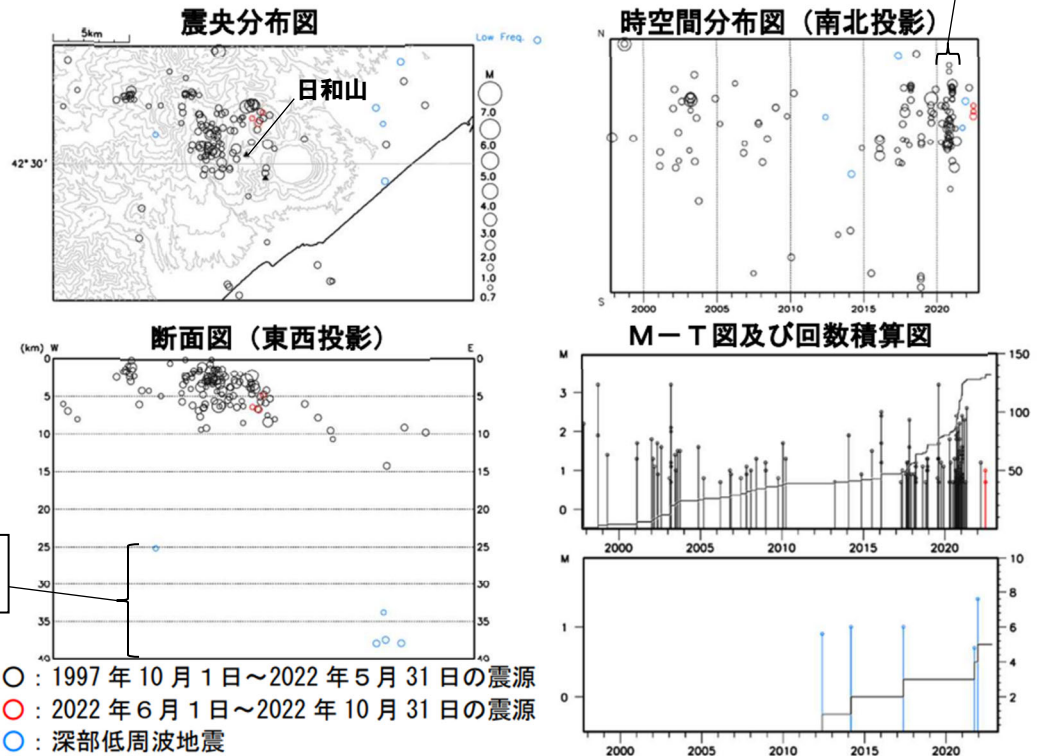


図2 倶多楽 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動(1997年10月~2022年10月, M \geq 0.7, 深さ40km以浅)
 ・震源分布に特段の変化は認められなかった。

倶多楽 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動
 (気象庁(2022)に加筆)

余白

(3)巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)(5/6)

一部修正(R5/1/20審査会合)

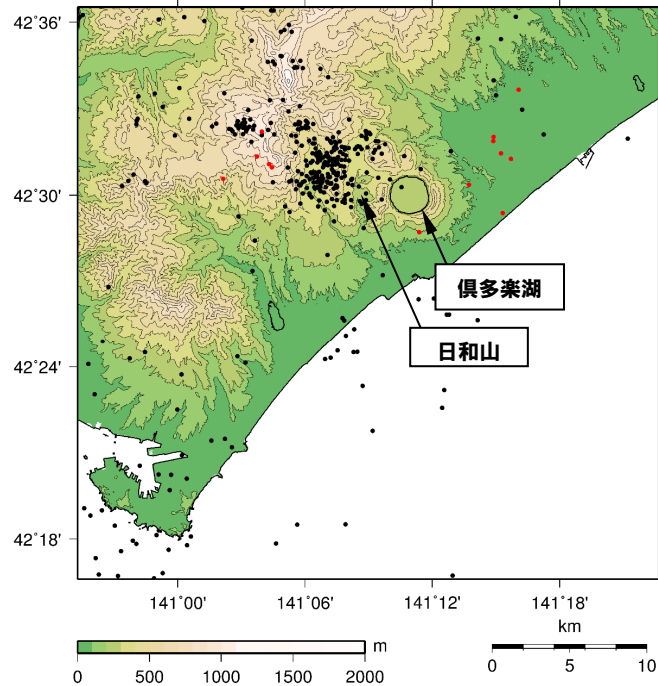
【気象庁地震月報(カタログ編), 気象庁一元化処理検測値データ等】

○過去約20年間における倶多楽・登別火山群周辺の深さ40km以浅の地震活動の震央分布を示す。震央のデータは気象庁地震月報(カタログ編)(2001年10月~2022年3月), 気象庁一元化処理検測値データ(2022年4月~2023年3月)等を使用した。



○倶多楽・登別火山群周辺においては, 日和山の西側に普通地震の震央が集中している。

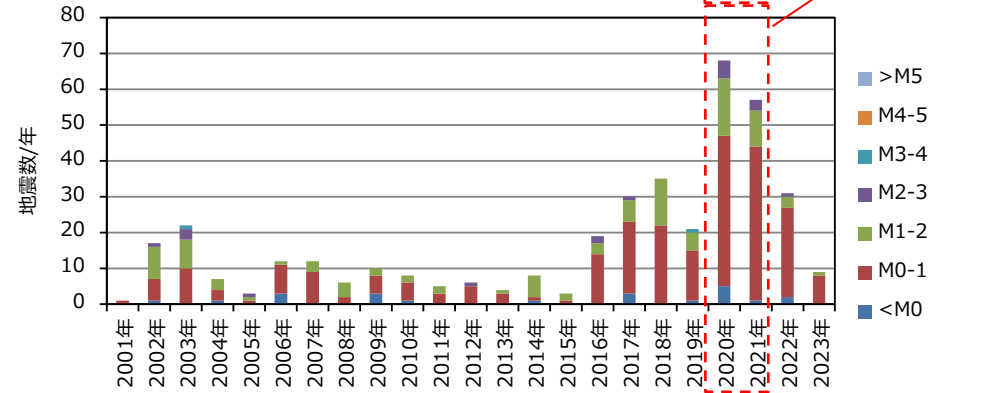
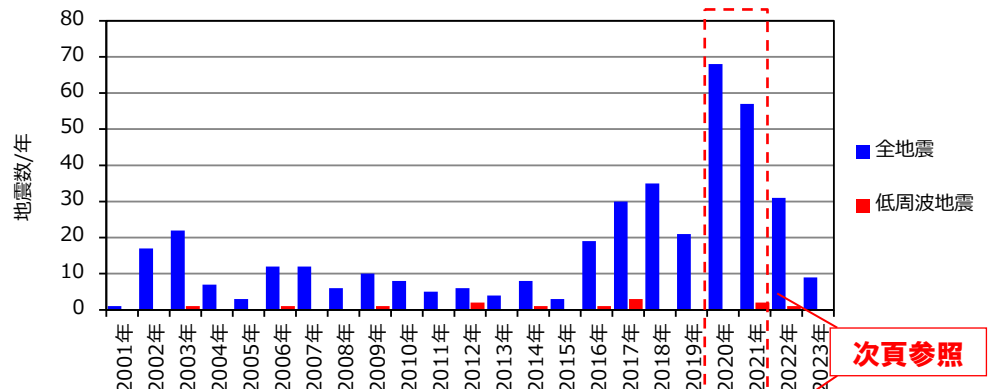
○マグニチュード0以上の地震は, 日和山の西側において2020年及び2021年に一時的に増加傾向が認められるが, 低周波地震については, 発生数は少なく増加傾向も認められない(次頁参照)。



凡例
 ●:震央
 ●:低周波地震震央

2001/10/1~2022/3/31:
 気象庁地震月報(カタログ編)
 2022/4/1~2023/3/31:
 気象庁一元化処理検測値データ

倶多楽・登別火山群周辺の震央分布 (2001年10月1日~2023年3月31日の記録(深さ40km以浅))



地震発生回数の年別時間変化(2001年~2023年※, 深さ40km以浅)

※2001年は10月1日~12月31日, 2023年は1月1日~3月31日のデータを掲載。

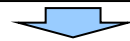
(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)(6/6)

一部修正(R5/1/20審査会合)

【気象庁, 2020; 気象庁HP】

○「第147回火山噴火予知連絡会資料」(気象庁, 2020) 及び「火山活動解説資料(令和3年年報)」(気象庁HP) では, 倶多楽・登別火山群について, 地震の発生状況を示している。



○日和山の西側を震源とする地震活動は, 2020年10月10日及び11月17から21日にかけて並びに2021年5月1日に一時的に地震が増加したとされているが, それ以外の期間では火山性地震は少なく, 地震活動は低調に経過している。
○上記の一時的な地震の増加に伴う低周波地震の増加は認められない。

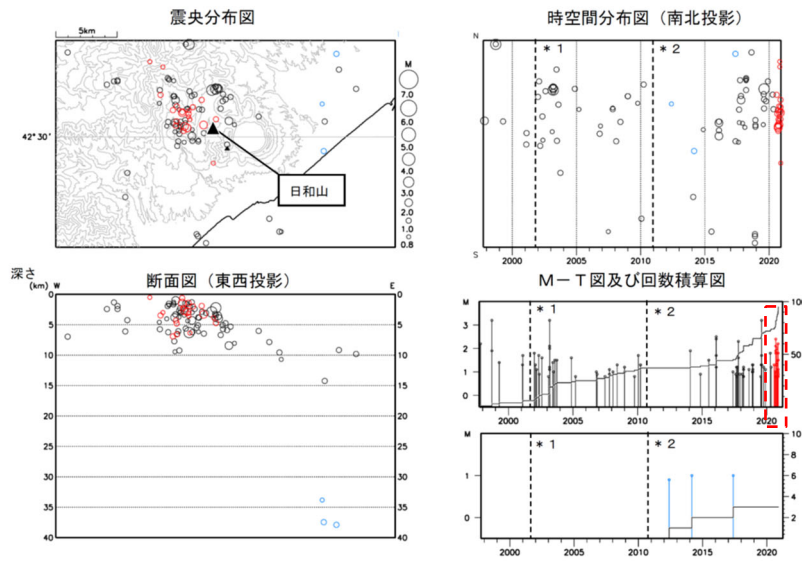


図8 倶多楽 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動 (1997年10月1日~2020年11月30日, M \geq 0.8、深さ40km以浅)
○: 1997年10月1日~2020年5月31日
●: 2020年6月1日~2020年11月30日
○: 深部低周波地震
* 1: 2001年10月以降、Hi-netの追加に伴い検知能力が向上している。
* 2: 2010年9月以降、火山観測点の追加に伴い検知能力が向上している。
2020年4月18日から10月23日までの地震について、暫定的に震源精査の基準を変更しているため、その前後の期間と比較して微小な地震での震源決定数の変化(増減)が見られる。
2020年9月以降の震源は、地震観測点の標高を考慮する等した新手法で求められている。
この地図の作成には国土地理院発行の「数値地図50mメッシュ(標高)」を使用した。

倶多楽 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動 (気象庁(2020)に加筆)

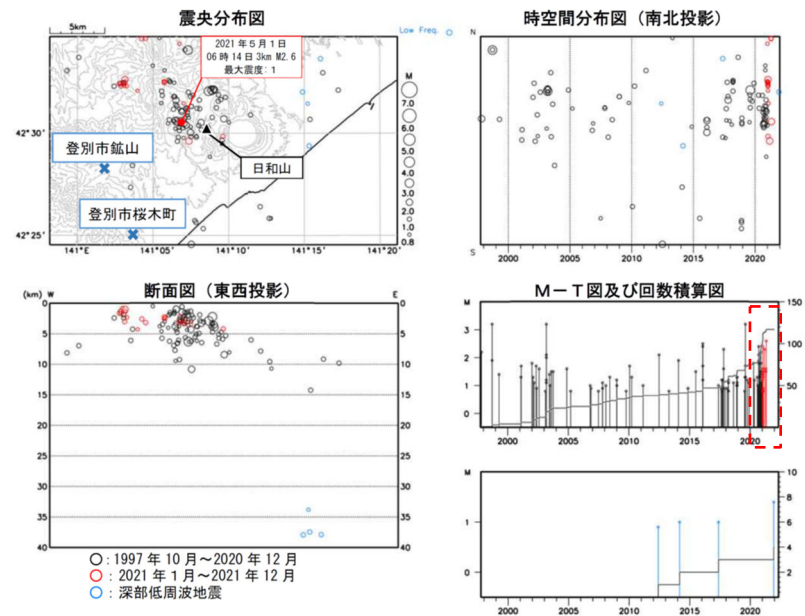


図9 倶多楽 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動 (1997年10月~2021年12月, M \geq 0.8、深さ40km以浅)
○: 1997年10月~2020年12月
●: 2021年1月~2021年12月
○: 深部低周波地震
* 5月1日に日和山の西側で地震が一時的に増加し、そのうち日和山の西約2km、深さ3kmで発生した地震(マグニチュード2.6)により、図中に×で示した登別市鉢山及び登別市桜木町で震度1を観測しました。
* 6月以降、山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過しました。

倶多楽 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動 (気象庁HPに加筆)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動-まとめ-) (1/9)

一部修正 (R3/10/14審査会合)

【目的】

- 青木(2016)によれば、マグマ溜まりにマグマが注入されると、マグマ溜まりが増圧し山体は膨張するとされている。
- このことから、電子基準点等のデータを整理した上で、継続的かつ顕著な変位の累積等の地殻変動の有無を確認する。



【検討結果】

(地殻変動(上下変動及び基線長変化)) (P174~P175参照)

- 全ての基線において、2011年東北地方太平洋沖地震の余効変動に伴う基線の伸びが、一部基線において、プレート間固着効果等による定常的な沈降及び2000年有珠山噴火の余効変動に伴う基線の縮みが認められる。
- 倶多楽・登別火山群付近の上下変動は、上記の余効変動等に由来する小樽1地点との相対的な差異を捉えているものと考えられ、これ以外に継続的かつ顕著な比高変化は認められない。
- 倶多楽・登別火山群付近の基線長変化は、一部基線において、2000年有珠山噴火の余効変動に伴う基線の縮みが、一部基線において、2003年十勝沖地震及び2011年東北地方太平洋沖地震に伴う余効変動に伴う基線の伸びが認められる。
- また、一部基線において、2020年頃から現在にかけて基線の伸びが認められるが、これは、倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)の隆起に伴うものと考えられる。
- これらの基線長変化以外に、継続的かつ顕著な膨張又は収縮傾向は認められない。

(地殻変動(干渉SAR時系列解析)) (P176~P179参照)

- 倶多楽・登別火山群周辺においては、2016年から2021年にかけて、倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)で衛星に近づく変動(隆起傾向)が認められる。
- 電子基準点に基づく基線長変化においても、倶多楽を取り囲む基線で2020年頃からわずかな伸びの傾向が認められることから、当該領域の地下に何らかの膨張源が存在している可能性が考えられる。
- このため、膨張源の成因について、地下構造(地震波速度構造及び比抵抗構造)の観点から検討を行った。
 - ・洞爺カルデラにおける当社電磁気探査結果に基づくと、当該領域の地下10km程度に低比抵抗領域が認められる。
 - ・地震波トモグラフィ解析結果からは、当該領域の地下10~20km付近に低Vpかつ低Vp/Vs領域が認められ、水の存在が示唆される。
- 以上から倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)に認められる隆起及び基線の伸びは、熱水の上昇・貯留に伴うものと推定される。

(次頁へ続く)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動-まとめ-) (2/9)

一部修正 (R3/10/14審査会合)

(前頁からの続き)

(地殻変動(水準測量)) (P180参照)

- 国土地理院一等水準点検測成果集録においては、白老町に局所的な変動が認められるものの、倶多楽・登別火山群規模の顕著な隆起又は沈降は認められない。



- 倶多楽・登別火山群周辺の地殻変動は、白老町の局所的な変動、プレート間固着効果等に伴う定常的な変動、周辺の地震及び2000年有珠山噴火による余効変動等が認められる。
- また、倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)において、2016年以降に確認される隆起及び当該領域を含む基線の伸びは認められるが、熱水の上昇・貯留に伴うものと推定される。
- これらの変動以外に継続的かつ顕著な変位の累積は認められない。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

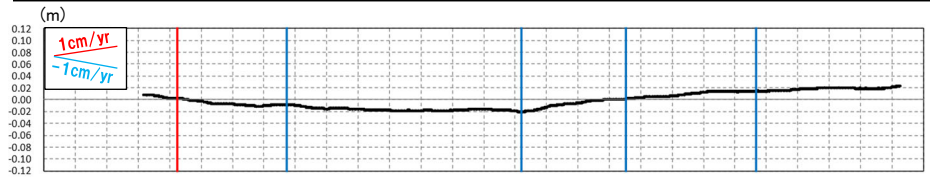
②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(3/9)

【上下変動】

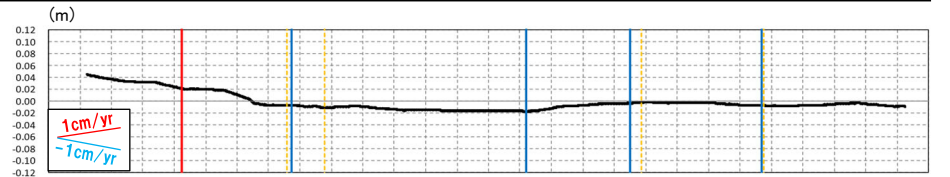
- 倶多楽・登別火山群付近の4基準点(登別, 白老, 大滝及び伊達)について, 各電子基準点設置以降から2023年3月までの上下変動を示す。
- 固定局は, 倶多楽・登別火山群と同様に東北日本弧延長部に位置し, 第四紀火山から離隔があること等を踏まえ, 小樽1地点とした。
- 季節変化に伴う影響(気象条件に関するノイズ, 電子基準点周辺の樹木の生長等)を除去するために, 各基準点の上下変動について1年間の移動平均グラフを作成した。



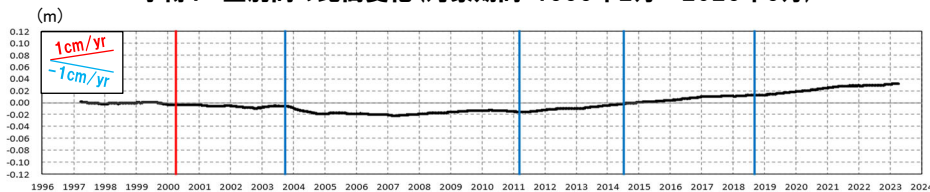
- 全ての基線において, 2011年東北地方太平洋沖地震の余効変動(補足説明資料4.1章参照)に伴う隆起が認められる。
- また, 一部基線において, プレート間固着効果等による定常的な沈降及び2000年有珠山噴火の余効変動(補足説明資料4.1章参照)に伴う沈降が認められる。
- 倶多楽・登別火山群付近の上下変動は, 上記の余効変動等に由来する小樽1地点との相対的な差異を捉えているものと考えられ, これ以外に継続的かつ顕著な比高変化は認められない。



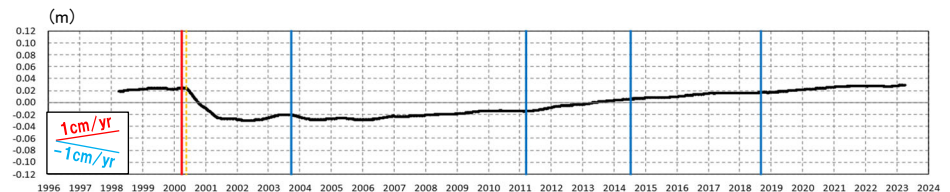
小樽1—登別間の比高変化(対象期間: 1999年2月~2023年3月)



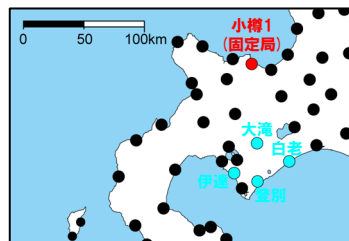
小樽1—白老間の比高変化(対象期間: 1997年3月~2023年3月)



小樽1—大滝間の比高変化(対象期間: 1997年3月~2023年3月)



小樽1—伊達間の比高変化(対象期間: 1998年3月~2023年3月)



倶多楽・登別火山群付近
電子基準点位置図

- 2000年3月有珠山噴火
- 2003年9月十勝沖地震
- 2011年3月東北地方太平洋沖地震
- 2014年7月胆振地方中東部の地震
- 2018年9月北海道胆振東部地震
- 伐木

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

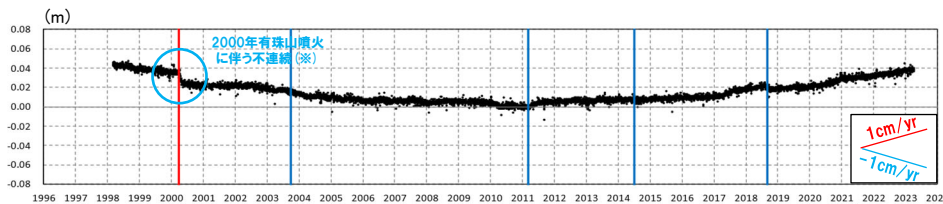
②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(4/9)

【基線長変化】

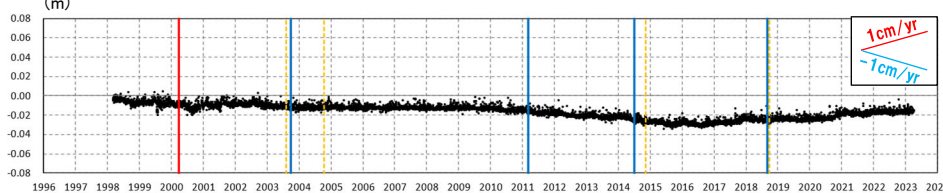
- 倶多楽・登別火山群付近の4基準点(登別, 白老, 大滝, 及び伊達)を結んだ4基線について, 各電子基準点設置以降から2023年3月までの基線長変化を示す。
- 噴火, 地震, 伐木イベント等による不連続を除去するため, 左下黒枠内に示すイベントについて, イベント前後7日間の平均値を基に不連続を除去する補正を実施した。



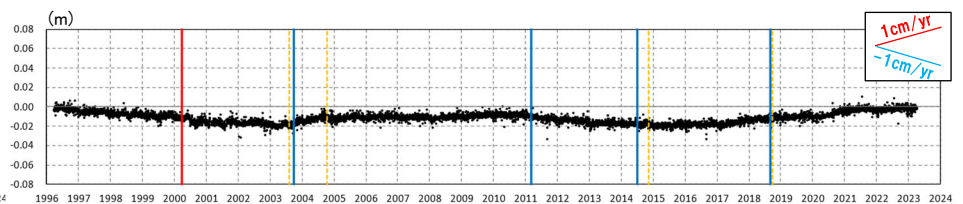
- 倶多楽・登別火山群付近の基線長変化は, 一部基線において, 2000年有珠山噴火の余効変動(補足説明資料4.1章参照)に伴う基線の縮みが認められる。
- 同様に, 一部基線において2003年十勝沖地震及び2011年東北地方太平洋沖地震に伴う余効変動(補足説明資料4.1章参照)に伴う基線の伸びが認められる。
- また, ①大滝-登別間及び②大滝-白老間において, 2020年頃から現在にかけて基線の伸びが認められるが, これは, 後述する倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)の隆起(P177~P179参照)に伴うものと考えられる。
- これらの基線長の変化は認められるが, これ以外に継続的かつ顕著な膨張又は収縮傾向は認められない。



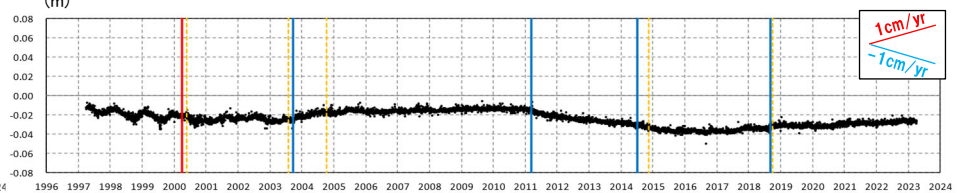
①大滝-登別間の基線長変化(対象期間:1998年2月~2023年3月)



③白老-登別間の基線長変化(対象期間:1998年2月~2023年3月)



②大滝-白老間の基線長変化(対象期間:1996年3月~2023年3月)



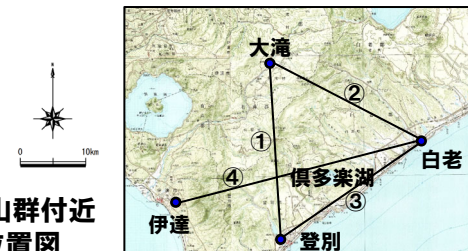
④白老-伊達間の基線長変化(対象期間:1997年3月~2023年3月)

補正対象イベント

- 2000年3月有珠山噴火 (Red line)
- 2003年9月十勝沖地震 (Blue line)
- 2011年3月東北地方太平洋沖地震 (Blue line)
- 2014年7月胆振地方中東部の地震 (Blue line)
- 2018年9月北海道胆振東部地震 (Blue line)
- 伐木 (Yellow dashed line)

※各イベントに対して, 一律前後7日間の移動平均値を基に補正を行う当社手法では, 一部地域において1週間以上余効変動が続いた2000年有珠山噴火に伴う不連続が残っているものと考えられる。

倶多楽・登別火山群付近電子基準点位置図



(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(5/9)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

【干渉SAR時系列解析】

- 第151回火山噴火予知連絡会資料(倶多楽)(気象庁, 2022)によると, 「2016年から2021年にかけて, 倶多楽湖の北西側で衛星に近づく変動が見られます※1」とされているが, 火山活動との関連について言及はされていない。
- 同文献のGEONET(電子基準点等)連続観測によれば, 上記隆起域を含む「倶多楽を取り囲む基線で2020年頃からわずかな伸びの傾向が見られます」とされている※2。

【干渉SAR時系列解析(最新版)】

- 2014年8月から2022年12月を対象とした干渉SAR時系列解析(国土地理院, 2023)※3によれば, 倶多楽・登別火山群規模の顕著な地殻変動は認められない。

※1 気象庁(2022)では, 北行軌道では約3cm, 南行軌道からは約4cmの衛星に近づく変化が確認できるが, 電離圏補正を行っていないため, ノイズが重畳している可能性があるとしてされている。

※2 当社作成の電子基準点に基づく基線長変化においては, 継続的な膨張又は収縮は認められないものの, 2020年頃以降, わずかな伸びの傾向が一部の基線で認められる(前頁参照)。

※3 国土地理院では, 宇宙航空研究開発機構(JAXA)が運用する衛星「だいち2号(ALOS-2)」のSARデータを使用し, 地殻変動の監視を行っている。2023年3月に日本全域の干渉SAR時系列解析結果をHP上で公表した。ここで示す干渉SAR時系列解析結果は大規模な地震に伴う地殻・地盤変動及びプレート運動等に伴う広い範囲に生じる地殻変動は除去されている。

2016年から2021年にかけて, 倶多楽湖の北西側で衛星に近づく変動が見られます。

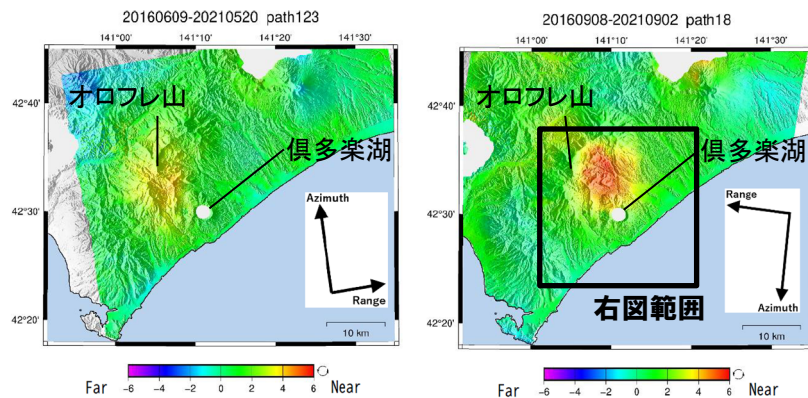
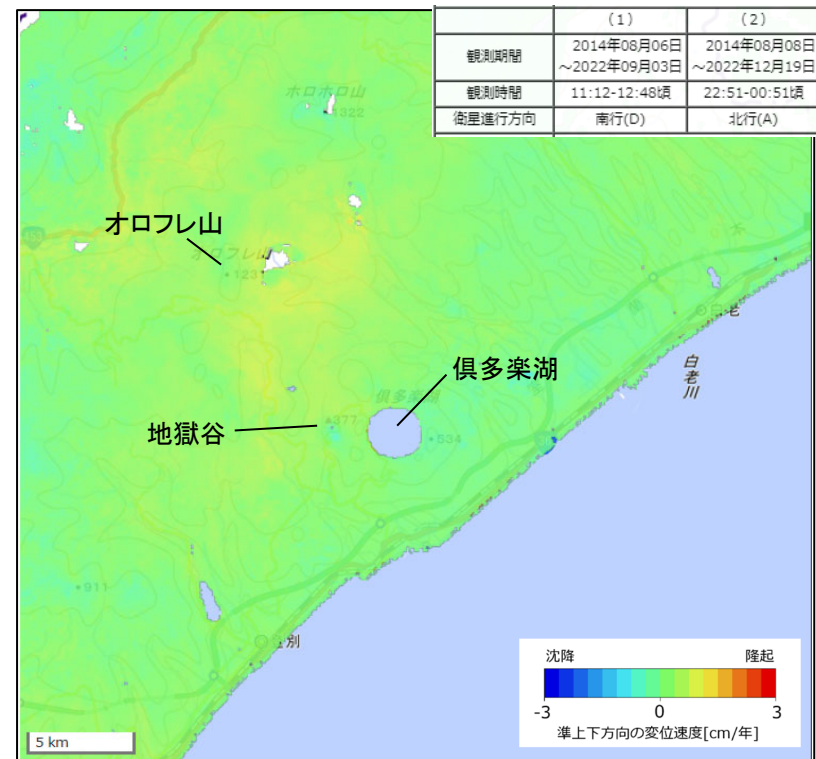


図1 パス 123(SM1_U2-7)による
長期間の干渉解析結果
(2016/06/09~2021/05/20)

図2 パス 18(SM1_U2-8)による
長期間の干渉解析結果
(2016/09/08~2021/09/02)

倶多楽・登別火山群周辺の干渉SAR時系列解析結果(気象庁(2022)に加筆)



倶多楽・登別火山群周辺における2014-2022年間の
干渉SAR時系列解析結果(準上下成分の変位速度)(国土地理院(2023)に加筆)

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(6/9)

一部修正(R5/7/7審査会合)

- 第151回火山噴火予知連絡会資料(倶多楽)(気象庁, 2022)において, 倶多楽湖北西(オロフレ山周辺)の隆起及び当該領域を含む基線の伸びが報告されていることを踏まえると, 当該領域の地下に何らかの膨張源が存在している可能性が考えられる。
- 倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)に認められる隆起及び基線の伸びについて, 地下構造(地震波速度構造及び比抵抗構造)の観点から検討を行った。
- 後述する洞爺カルデラにおける当社電磁気探査結果に基づくと, 当該領域の地下10km程度に低比抵抗領域(10Ωm以下の領域)が認められる(P179参照)。
- 地震波トモグラフィ解析結果からは, 当該領域の同様な位置及び深度に低V_pかつ低V_p/V_s領域が認められ, 水の存在が示唆される(次頁参照)。

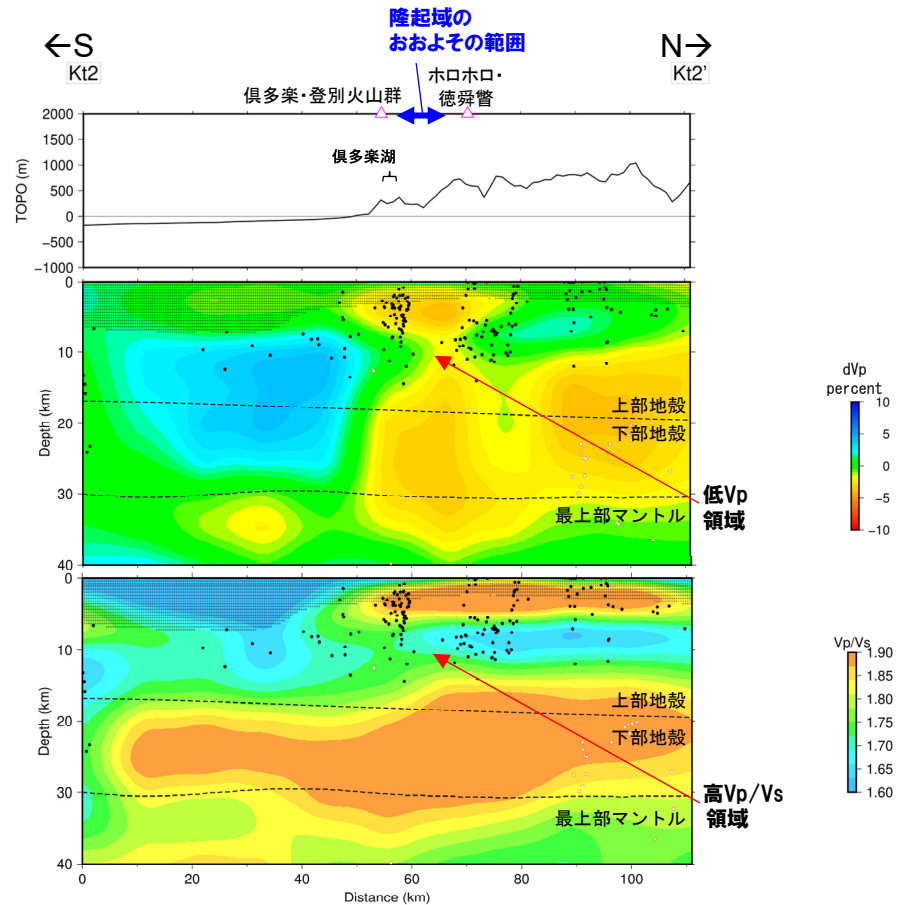
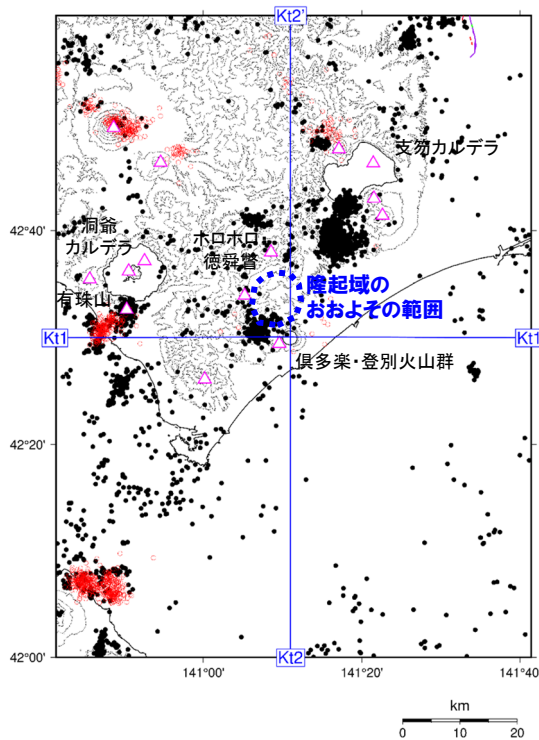


- 倶多楽湖の北西側(オロフレ山周辺)に認められる隆起及び基線の伸びは, 熱水の上昇・貯留に伴うものと推定される。

(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(7/9)

一部修正 (R5/7/7審査会合)



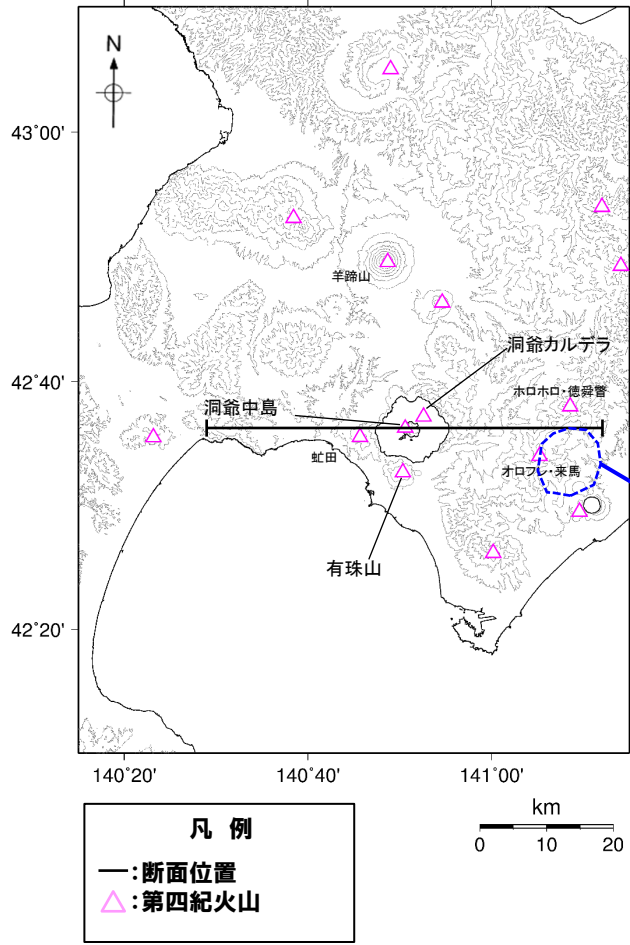
凡例	
△	第四紀火山
黒点	震源 (MJMA ≥ 0)
赤点	低周波地震の震源 (期間: 2000/10/1-2020/12/31)
半透明黒色部	チェッカーボードテストの 復元率が20%以下の範囲
—	活断層
—	推定活断層
	今泉ほか編(2018) をトレース

地震波速度構造(南北方向の鉛直断面)
(解析の詳細はP152~P153参照)

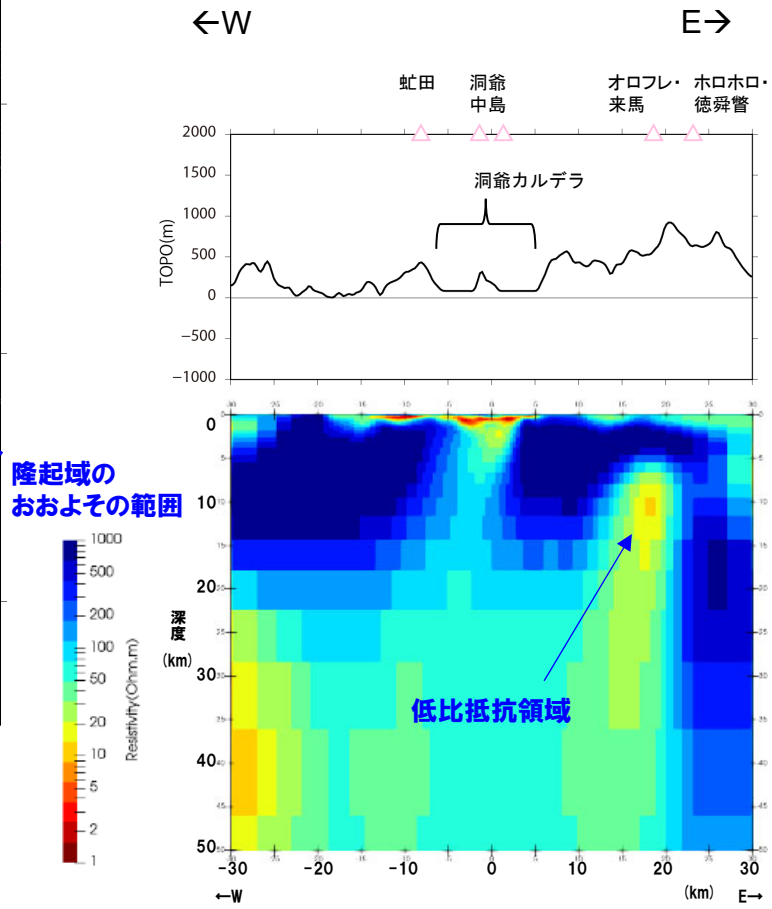
(3)巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(8/9)

一部修正 (R5/7/7審査会合)



比抵抗構造断面位置図



東西比抵抗断面

当社電磁気探査に基づく洞爺湖～倶多楽周辺の比抵抗断面
(当社電磁気探査の詳細は後述するP199～P201参照)

(3)巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)(9/9)

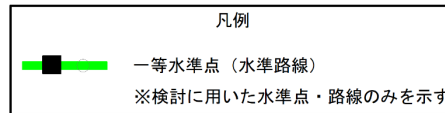
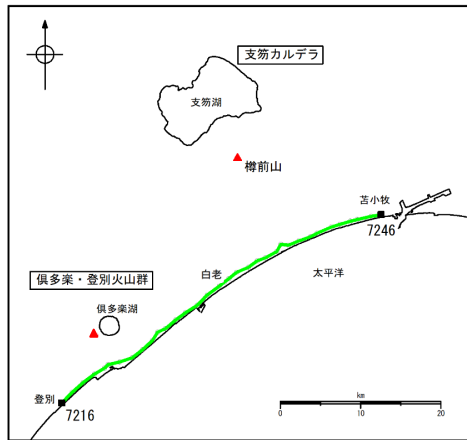
再掲(R5/1/20審査会合)

【水準測量】

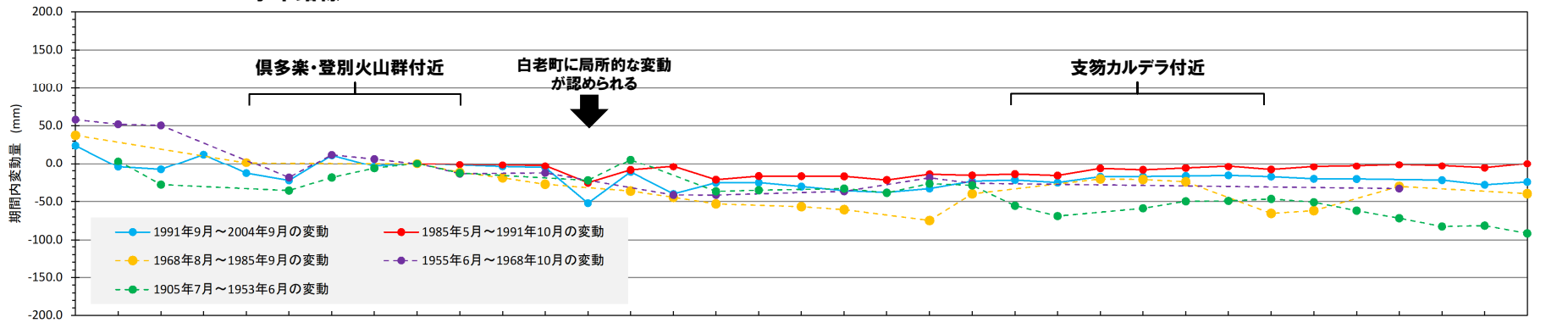
○過去約100年間における倶多楽・登別火山群周辺の水準点の上下変動を示す。水準測量のデータは国土地理院一等水準点検測成果集録を使用した。



○当該検測成果集録においては、白老町に局所的な変動が認められるものの、倶多楽・登別火山群規模の顕著な隆起又は沈降は認められない。



水準路線



水準路線(水準点番号:7216-7246)沿いの期間内変動量(固定点:7223)

目次

1. 火山影響評価の概要	P. 4
2. 網羅的な文献調査の概要	P. 42
3. 原子力発電所に影響を及ぼし得る火山の抽出	P. 62
3.1 地理的領域にある第四紀火山	P. 65
3.2 将来の火山活動可能性の評価	P. 69
4. 原子力発電所の運用期間における火山活動に関する個別評価	P. 76
4.1 設計対応不可能な火山事象を伴う火山活動の評価	P. 79
4.1.1 火山活動の可能性評価	P. 81
4.1.2 巨大噴火の可能性評価	P. 91
4.1.2(1) 巨大噴火の可能性評価方法	P. 92
4.1.2(2) 巨大噴火の可能性評価(支笏カルデラ)	P. 100
4.1.2(3) 巨大噴火の可能性評価(倶多楽・登別火山群)	P. 142
4.1.2(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)	P. 184
4.2 火山活動の規模と設計対応不可能な火山事象の評価	P. 225
5. 個別評価の結果を受けた原子力発電所への火山事象の影響評価	P. 266
5.1 降下火砕物の影響評価	P. 268
5.1.1 敷地及び敷地近傍で確認される降下火砕物の影響	P. 268
5.1.2 降下火砕物シミュレーションによる影響評価	P. 277
5.1.3 設計に用いる降下火砕物の層厚による影響評価	P. 278
5.2 地理的領域内の火山による火山事象の影響評価	P. 280
6. 火山活動のモニタリング	P. 281
6.1 監視対象火山	P. 282
6.2 モニタリングの実施方法及び火山の状態に関する評価	P. 288
7. 火山影響評価のまとめ	
参考文献	

・本章の説明内容

【評価結果】洞爺カルデラの巨大噴火の可能性評価

① 活動履歴

②-1 地球物理学的調査(地下構造:まとめ)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造)

②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常)

②-5 地球物理学的調査(火山性地震及び地殻変動:まとめ)

②-6 地球物理学的調査(火山性地震)

②-7 地球物理学的調査(地殻変動)

(参考) 有珠山火山防災協議会(2021)

「5. 個別評価の結果を受けた原子力発電所への火山事象の影響評価」及び「6. 火山活動のモニタリング」の詳細については今後説明予定

余白

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

【評価結果】洞爺カルデラの巨大噴火の可能性評価(1/2)

一部修正(R5/1/20審査会合)

- 洞爺カルデラの活動状況は、以下の検討結果(詳細は次頁表参照)を総合的に踏まえると、巨大噴火が差し迫った状態ではないと評価される。
 - ・活動履歴を踏まえると、巨大噴火(Tp噴出)時の状況と現在の状況は、噴出物の体積及び噴出物の組成の観点において差異が認められることから、現状、Tpを噴出したような噴火を起こす状態ではないと判断される。
 - ・地球物理学的調査のうち、地下構造調査(地震波速度構造、比抵抗構造及び重力異常)を踏まえると、上部地殻内において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さいと判断される。
 - ・地球物理学的調査のうち、火山性地震(低周波地震)及び地殻変動を踏まえると、大規模なマグマの移動・上昇、集積等の活動を示す兆候は認められないと判断される。
- また、網羅的な文献調査の結果、現状、巨大噴火が起こる可能性があるとする知見は認められない※ことから、運用期間中における巨大噴火の可能性を示す科学的に合理性のある具体的な根拠は得られていない。
- これらのことから、洞爺カルデラの運用期間中における巨大噴火の可能性は十分に小さいと評価される。

※現状想定されている噴火規模について、参考としてP222に示す。

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

【評価結果】洞爺カルデラの巨大噴火の可能性評価(2/2)

一部修正 (R5/1/20 審査会合)

検討項目		検討結果	該当頁
①活動履歴		<ul style="list-style-type: none"> ○洞爺カルデラでは、約11万年前に、噴出物体積にして354km³の噴出物を噴出した巨大噴火が1回発生しているとされている。 ○このため、巨大噴火の活動間隔及び最後の巨大噴火からの経過時間の観点において、判断することは難しい。 ○しかし、巨大噴火以降に活動を開始した後カルデラ火山においては複数回の活動が認められるが、噴出物体積は最大でも14km³であり、巨大噴火の噴出物体積と異なっている。 ○また、巨大噴火による噴出物(Tp)は、現在の洞爺カルデラを形成した噴火以降に噴出した噴出物と組成が異なる。 	次頁～ P193
		<p>○巨大噴火(Tp噴出)時の状況と現在の状況は、噴出物の体積及び噴出物の組成の観点において差異が認められることから、現状、Tpを噴出したような噴火を起こす状態ではないと判断される。</p>	
地球物理学 的調査	②地下構造	<p>【地震波速度構造】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地震波トモグラフィ解析結果では、洞爺カルデラ直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。 ・洞爺カルデラ直下の上部地殻内には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。 ・通常の地震が深度15km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。 <p>【比抵抗構造】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・洞爺カルデラ直下の上部地殻内には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域は認められない。 <p>【重力異常】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重力異常を踏まえマグマ溜まりに関して考察されている文献は認められない。 	P195～ P197
			<p>○洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さいと判断される。</p>
	③火山性地震	<ul style="list-style-type: none"> ○火山性地震のうち、低周波地震活動は、有珠山周辺の下部地殻に認められるが、上部地殻にはほとんど認められない。 	P207～ P213
	④地殻変動	<ul style="list-style-type: none"> ○地殻変動は、周辺の地震及び2000年有珠山噴火による余効変動等が認められる。 ○また、昭和新山を含む有珠山周辺の局所的な沈降傾向が認められる。 ○これらの変動以外に継続的かつ顕著な変位の累積は認められない。 	P215～ P221
		<p>○洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)には、現状、大規模なマグマの移動・上昇、集積等の活動は認められないと判断される。</p>	
	<p>○洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さく、大規模なマグマの移動・上昇等の活動を示す兆候も認められない。</p>		

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

① 活動履歴(1/7)

【目的】

- 洞爺カルデラにおける巨大噴火時の状況と現在の状況との差異について、巨大噴火の活動間隔、最後の巨大噴火からの経過時間、噴出物の分布・体積及び噴出物の組成の観点から検討を実施する。



- 洞爺カルデラ、洞爺中島及び有珠山の活動履歴、噴出量-年代階段ダイアグラム等をP189～P191に示し、支笏カルデラの活動の概要は以下のとおり。
 - ・約11万年前にTp(洞爺火山灰(Toya)及び洞爺火砕流)を噴出した噴火により、現在の洞爺カルデラが形成され、その後、洞爺中島及び有珠山が形成された。
 - ・約11万年前にTpを噴出した噴火以降の、洞爺中島の活動から現在までの活動期は後カルデラ期である。

【検討結果】

(巨大噴火の活動間隔、最後の巨大噴火からの経過時間、噴出物の分布・体積)(P189～P191参照)

- 約11万年前にTpを噴出した噴火は、火砕流堆積物が広範囲に分布し、噴出物体積が 354km^3 * (マグマ体積: 170km^3 (DRE))となることから(P191参照)、巨大噴火に該当する。
- 約11万年前にTpを噴出した噴火以降の後カルデラ期においては、いずれの後カルデラ火山に関しても、火砕流を含む火山噴出物の分布は山体近傍に限定されることから(補足説明資料P49参照)、いずれの噴火も巨大噴火に該当しない。
- 各後カルデラ火山における最大の噴出物体積は、洞爺中島が 14km^3 (中島-東山ドーム)、有珠山が 2.5km^3 * (1663年噴火 Us-b, マグマ体積: 1.5km^3 (DRE))である。

(噴出物の組成)(P192～P193参照)

- 巨大噴火による噴出物(Tp)は、現在の洞爺カルデラを形成した噴火以降に噴出した噴出物と組成が異なる。

(その他)

- 町田・新井(2011)によれば、Tp(洞爺火山灰(Toya)及び洞爺火砕流)を噴出した噴火によって現在の姿が形成されたといえるが、この噴火が優れて水蒸気マグマ噴火の性質をもっていること及びこのテフラより古い火砕流堆積物が数枚カルデラの周りに存在することなどから、この噴火以前にもカルデラ様の低地ないし水域の存在が推定されるとされている。
- 当該カルデラ様の低地ないし水域は、噴火によって形成された可能性が考えられるものの、現況の知見においては、その噴火に伴う噴出物、噴火規模等は不明である。

*マグマ体積を山元(2014)に基づき、当社が噴出物体積へ換算した値。



(次頁へ続く)

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

① 活動履歴(2/7)

(前頁からの続き)



- 洞爺カルデラでは、約11万年前に、噴出物体積にして 354km^3 の噴出物を噴出した巨大噴火が1回発生しているとされている。
- このため、巨大噴火の活動間隔及び最後の巨大噴火からの経過時間の観点において、判断することは難しい。
- しかし、巨大噴火以降に活動を開始した後カルデラ火山においては複数回の活動が認められるが、噴出物体積は最大でも 14km^3 であり、巨大噴火の噴出物体積と異なっている。
- また、巨大噴火による噴出物(Tp)は、現在の洞爺カルデラを形成した噴火以降に噴出した噴出物と組成が異なる。
- したがって、巨大噴火(Tp噴出)時の状況と現在の状況は、噴出物の体積及び噴出物の組成の観点において差異が認められることから、現状、Tpを噴出したような噴火を起こす状態ではないと判断される。

余白

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

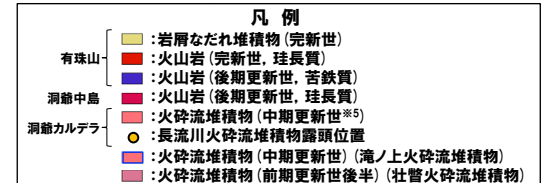
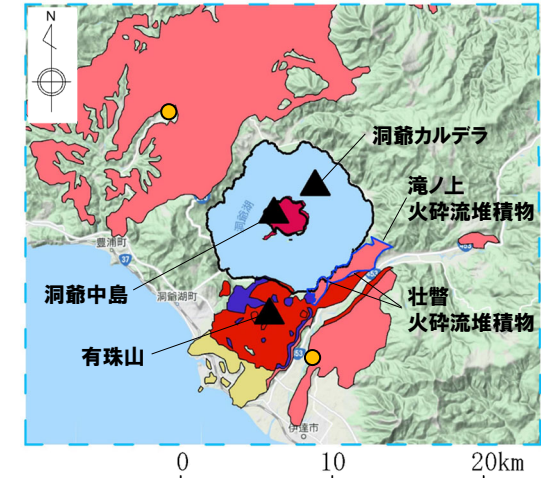
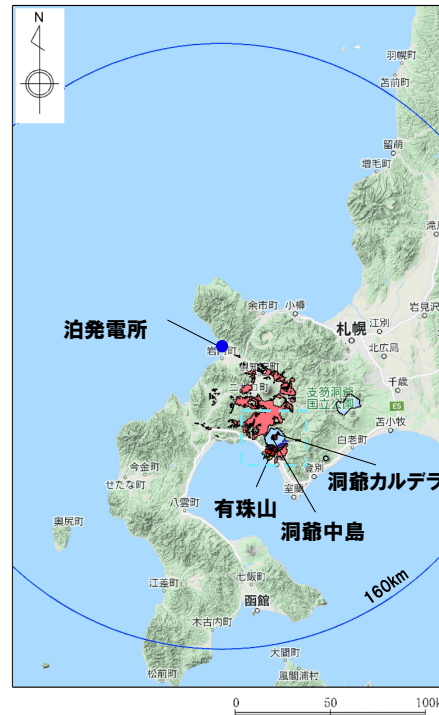
① 活動履歴 (3/7)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

洞爺カルデラの概要

火山名※1	C20 洞爺カルデラ (後カルデラ火山含む) C21 洞爺中島 C22 有珠山
敷地からの距離	54.8km (洞爺中島:55.1km, 有珠山:60.7km)
火山の形式	洞爺カルデラ: 火砕流台地-カルデラ※2 洞爺中島: 溶岩ドーム※1, ※2 有珠山: 成層火山, 溶岩ドーム※2
活動年代※3	洞爺カルデラ: 約11万年前にカルデラ形成※4 洞爺中島: 約5-3万年前 有珠山: 約3万年前に活動開始
評価	約1万年前以降に活動しており, 完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2023年8月確認。
 ※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2023年8月確認。
 ※3 P191に示す洞爺カルデラ, 洞爺中島及び有珠山の活動履歴に基づく。



※5 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) においては, 洞爺火砕流堆積物の噴出年代は中期更新世に分類されているが, 注釈4に示す理由から, 約11万年前 (後期更新世) と考えられる。

洞爺カルデラ, 洞爺中島及び有珠山の噴出物分布図
 (産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) 及びGoto et al. (2018) より作成)

※4 洞爺カルデラの形成時期について, 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」及び西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・噴火岩体データベース」では, 「約14万年前にカルデラ形成」とされている。これは, 以下に示す理由によると考えられる。

- ・李 (1993) においては, 洞爺カルデラ起源の大規模な珪長質マグマによる噴出物は, 火砕流堆積物の間に顕著な風化程度の差が認められることから2回のカルデラ形成期 (Toya-1及びToya-2) があつたと判断されている。
- ・同一著者によるその後の文献であるLee (1996) においては, 従来, 4つの異なるフェーズからなるひと続きの噴火であると考えられていた洞爺カルデラでの大規模火砕流噴火について, 3回の別個の噴火であり, FT法年代測定結果から, その噴火年代は14万年前, 10万年前, そして8万年前とされ, 2回目の噴火が現在見られる洞爺カルデラを作った最も主要な噴火とされている。
- ・一方, 鷹澤ほか (2007) においては, 洞爺火砕流を下位より, TpfI / II, TpfIII及びTpfIVユニットに区分しているが, これらのユニット間に堆積間隙を示す堆積物の根拠は見出されず, これらのユニットを対象に実施したSAR法による平均Red TL年代は, TpfI / IIで132ka, TpfIII及びTpfIVで113-114kaであり, 後者は町田・新井 (2003) が地形, テフラ対比から総合的に推定したToyaの年代 (110~115ka) と良く一致しているとされている。この年代値の差については, 今回の実験では多粒子 (40~70粒子) を用いているので, 年代の古い石英粒子の混入も否定できないとされている。
- ・また, Goto et al. (2018) は, 洞爺カルデラ形成噴火噴出物 (Tp) を大きく6つのユニットに区分しているが, 李 (1993) におけるToya-1及びToya-2は, それぞれGoto et al. (2018) におけるUnit2及びUnit3~Unit6に対比されている。
- ・これらのことから, 洞爺カルデラ形成噴火について, Lee (1996) では3回の別個の噴火とされたが (上記下線箇所), 以降の文献 (鷹澤ほか (2007) 等) では別個の噴火ではなく, 1輪廻の噴火として扱われており, この噴火年代として, 「日本の火山 (DB)」等のデータベースにおいては, Lee (1996) で示された年代値のうち, 最も古い14万年前が採用されたものと考えられる。

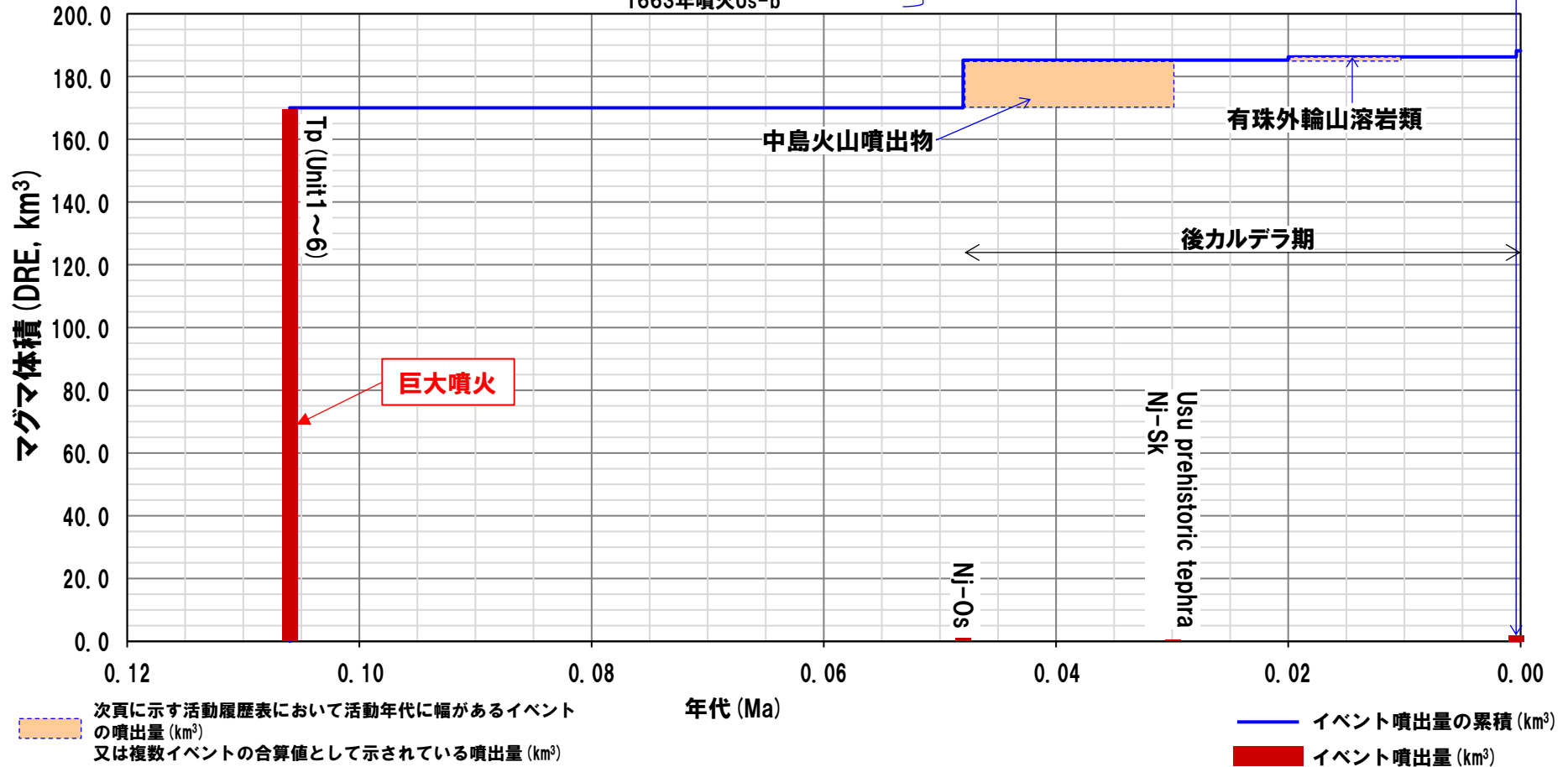
このため, 「約14万年前にカルデラ形成」は, 現行では, P191に示す洞爺カルデラの活動履歴のとおり, 約11万年前にTpを噴出し, 現在の洞爺カルデラを形成した噴火に対応するものと考えられる。

(4)巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

① 活動履歴 (4/7)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

- 2000年噴火
- 1977-1978年噴火
- 1943-1945年噴火
- 1910年噴火Us-II a
- 1853年噴火Us-III a, 嘉永火砕流
- 1822年噴火Us-IV a, 文政火砕流
- 1769年噴火Us-V a, 明和火砕流
- 先明和噴火
- 1663年噴火Us-b



噴出量-年代階段ダイアグラム

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

① 活動履歴 (5/7)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

洞爺カルデラ活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km ³)	火山体体積 (km ³)	参考文献
完新世				
更新世				
106ka ^{*1}	Tp (Unit1~6) :afa,pfl	170		Goto et al. (2018) Amma-Miyasaka et al. (2020)
122.5ka	Osr:pfa,afa,pfl ^{*2}	不明		金田ほか (2020)
0.90±0.15Ma	滝ノ上火砕流堆積物	不明	—	産業技術総合研究所 (2021)
1.59±0.33Ma	壮瞥火砕流堆積物	不明		後藤ほか (2021)
不明	立香火砕流堆積物	不明		

※1 東宮・宮城 (2020) においては、洞爺噴火の年代値については、MIS5dのピークより後の約106kaである可能性も含め、109±ca.3kaと考えるのが妥当であろうとされている。

※2 Osrは、金田ほか (2020) における長流川火砕流堆積物に対応する。同文献においては、洞爺カルデラの南縁付近に、いずれも給源不明の壮瞥火砕流堆積物 (熱ルミネッセンス年代測定値: 1.59±0.33Ma) とそれを覆う滝ノ上火砕流堆積物 (熱ルミネッセンス年代測定値: 0.90±0.15Ma) が露出しており、これらの上位には、長流川火砕流堆積物が堆積しているとされている。

長流川火砕流堆積物は、土壌を挟むものの、洞爺火砕流堆積物の直下に存在し、その年代も、カルデラ形成よりも約1万年前であることから、Tp噴火前の重要な長期的前駆活動とみなすことができるかとされている。

しかし、長期的前駆活動については以下の様な知見もあることから、これらの火砕流堆積物 (Osr, 滝ノ上火砕流堆積物, 壮瞥火砕流堆積物及び立香火砕流堆積物) を噴出した噴火のいずれもを、洞爺カルデラの活動履歴に示すこととした。

・産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022) では、壮瞥火砕流堆積物, 滝ノ上火砕流堆積物及び長流川火砕流堆積物を噴出した噴火は、いずれもTp噴火の長期的前駆活動とされている。

・後藤ほか (2021) では、洞爺カルデラ地域において新たに発見した立香火砕流堆積物は、壮瞥火砕流堆積物の下位に位置することから、洞爺火砕流堆積物の先カルデラ期の火砕流堆積物の層序は、下位から立香火砕流堆積物, 壮瞥火砕流堆積物, 滝ノ上火砕流堆積物, 長流川火砕流堆積物とされている。

洞爺中島活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km ³)	火山体体積 (km ³)	参考文献
完新世				
更新世				
ca.30ka	Nj-Sk ^{*3} :pumice-fall deposit	0.01		第四紀火山カタログ委員会編 (2000) 山元 (2014)
48-30ka	中島火山噴出物 (溶岩ドーム群: 中島-東山ドーム等)	15.09 ^{*4}	5.0	Miyabuchi et al. (2014) 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022)
ca.48ka	Nj-Os :pumice-fall deposit	0.11		

※3 Miyabuchi et al. (2014) によれば、Nj-Skの上位に、洞爺カルデラ内の水蒸気噴火に由来する火山豆石を含む褐色から灰色の微細な降灰層の互層が認められ、当該堆積物の総体積は0.077km³と推定されている。

※4 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022) によれば、中島火山噴出物のうちマグマ体積が最大のものは中島-東山ドームの14km³ (DRE) とされている。

有珠山活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km ³)	火山体体積 (km ³)	参考文献
完新世				
A.D.2000	有珠:2000年噴火	0.0006		
A.D.1977-1978	有珠:1977-1978年噴火	0.05		
A.D.1943-1945	有珠:1943-1945年噴火	0.006		
A.D.1910	有珠:1910年噴火Us-IIa	0.002		第四紀火山カタログ委員会編 (2000)
A.D.1853	有珠:1853年噴火Us-IIIa, 嘉永火砕流	0.21		曾屋ほか (2007)
A.D.1822	有珠:1822年噴火Us-IVa, 文政火砕流	0.17	有珠山: 2.5	山元 (2014)
A.D.1769	有珠:1769年噴火Us-Va, 明和火砕流	0.07	昭和新山:0.5	Miyabuchi et al. (2014)
17世紀末	有珠:先明和噴火	0.0006	未滿	Nakagawa et al. (2022)
A.D.1663	有珠:1663年噴火Us-b	1.50		
ca. 8ka	外輪山:善光寺岩屑なだれ 〔外輪山:ドンコロ山スコリア〕	不明 不明		
約1~2万年前	外輪山:有珠外輪山溶岩類	1 ^{*5, *6}		
ca.30ka	Usu prehistoric tephra :ash-fall deposits	0.02		

※5 1663年噴火以降の活動によって形成された溶岩ドーム (有珠溶岩ドーム) のマグマ体積も一括計上されている。

※6 Miyabuchi et al. (2014) によれば、有珠外輪山溶岩のマグマ体積は、0.5km³ (DRE) とされている。

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

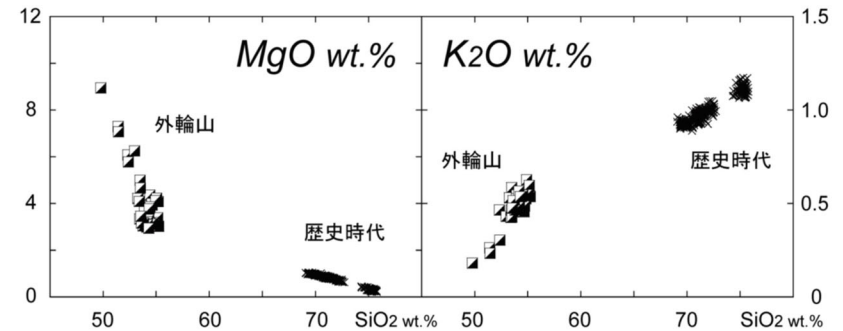
① 活動履歴 (6/7)

【噴出物の組成】

- 産業技術総合研究所 (2022) によれば, Tpは, 全岩化学組成分析の結果, かんらん石斑晶を含む1試料が安山岩である以外は, すべて流紋岩であるとされている。
- 気象庁編 (2013) 及びGoto et al. (2015b) によれば, 各後カルデラ火山 (洞爺中島及び有珠山) の噴出物のうち, 有珠山歴史時代以外の噴出物はデイサイト~安山岩である (右上図及び右下表参照)。
- 有珠山歴史時代の珪長質な噴出物については, 全岩化学組成分析の結果, Tpの大半を占めている斑晶に乏しい (CPタイプ) 軽石と比較して, K_2O が低い (次頁図参照)。



- 巨大噴火による噴出物 (Tp) は, 現在の洞爺カルデラを形成した噴火以降に噴出した噴出物と組成が異なる。



有珠火山先史時代噴出物 (外輪山) 及び歴史時代噴出物の全岩化学組成ハーカー図 (気象庁編 (2013) に加筆)

洞爺中島 全岩主要元素化学組成 (Goto et al. (2015b) に加筆)

Table 3. Whole-rock major-element chemical compositions of volcanic rocks from the Nakajima Islands.

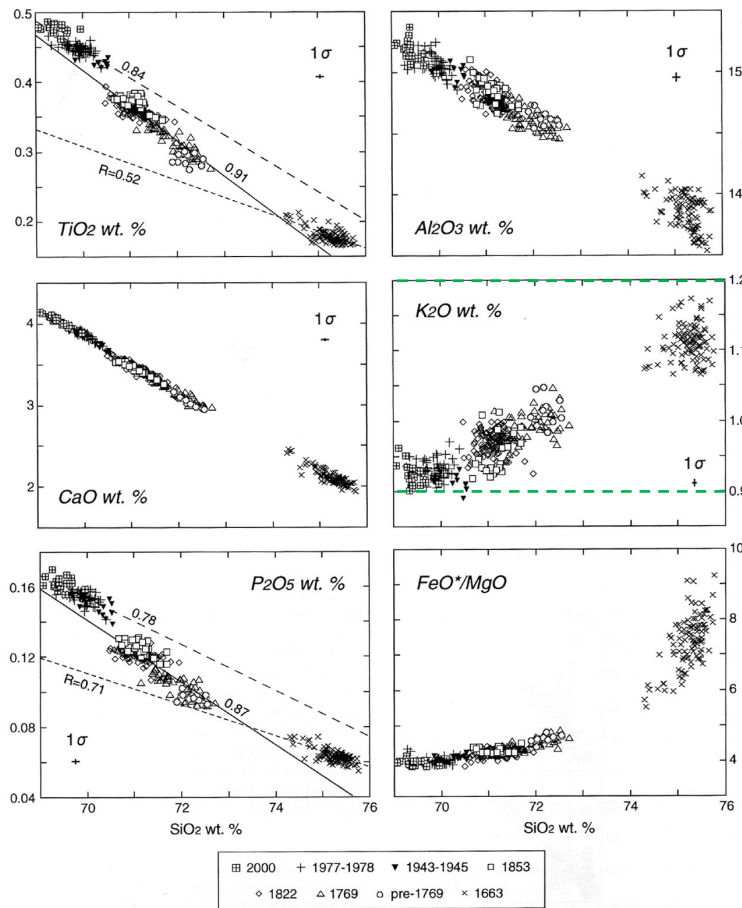
Name	Higashiyama pyroclastic cone	Higashiyama pyroclastic cone	Higashiyama dome	Higashiyama dome	Nishiyama dome	Hokusei dome
Sample No.	NJ-03-L2A	NJ-03-L2B	NJ-01	NJ-02	NJ-34	NJ-32
SiO ₂ (wt. %)	65.80	64.61	63.65	63.09	64.06	62.81
TiO ₂	0.52	0.55	0.64	0.64	0.61	0.67
Al ₂ O ₃	15.96	16.02	16.09	16.36	16.13	16.87
Fe ₂ O ₃ *	5.44	5.83	6.60	6.66	6.67	6.91
MnO	0.14	0.15	0.18	0.19	0.17	0.17
MgO	1.86	2.00	2.05	2.04	1.96	2.17
CaO	4.99	5.09	5.53	5.56	5.63	5.93
Na ₂ O	3.63	3.64	3.66	3.57	3.38	3.37
K ₂ O	1.34	1.36	1.00	0.99	0.92	0.84
P ₂ O ₅	0.11	0.11	0.14	0.14	0.14	0.15
Total	99.80	99.38	99.54	99.24	99.37	99.89
L.O.I.	1.14	1.25	-0.04	0.07	-0.06	0.15

Name	Kitayama dome	Hokutou-misaki dome	Nansei dome	Kannon-jima dome	Benten-jima dome	Manju-jima dome
Sample No.	NJ-31	NJ-80	NJ-37	KJ-03	BJ-02	MJ-03
SiO ₂ (wt. %)	64.61	64.44	65.90	60.23	64.00	59.01
TiO ₂	0.62	0.59	0.51	0.69	0.55	0.68
Al ₂ O ₃	16.25	16.06	16.12	16.66	16.12	17.32
Fe ₂ O ₃ *	6.56	6.36	5.56	8.34	6.22	7.34
MnO	0.15	0.15	0.13	0.18	0.15	0.16
MgO	2.07	1.98	1.92	2.78	2.24	4.13
CaO	5.53	5.46	5.09	6.45	5.55	7.23
Na ₂ O	3.28	3.26	3.32	3.23	3.36	3.01
K ₂ O	1.05	1.07	1.24	0.82	1.10	1.00
P ₂ O ₅	0.12	0.11	0.08	0.11	0.10	0.15
Total	100.24	99.48	99.87	99.49	99.39	100.04
L.O.I.	0.00	-0.04	0.63	0.04	0.14	1.22

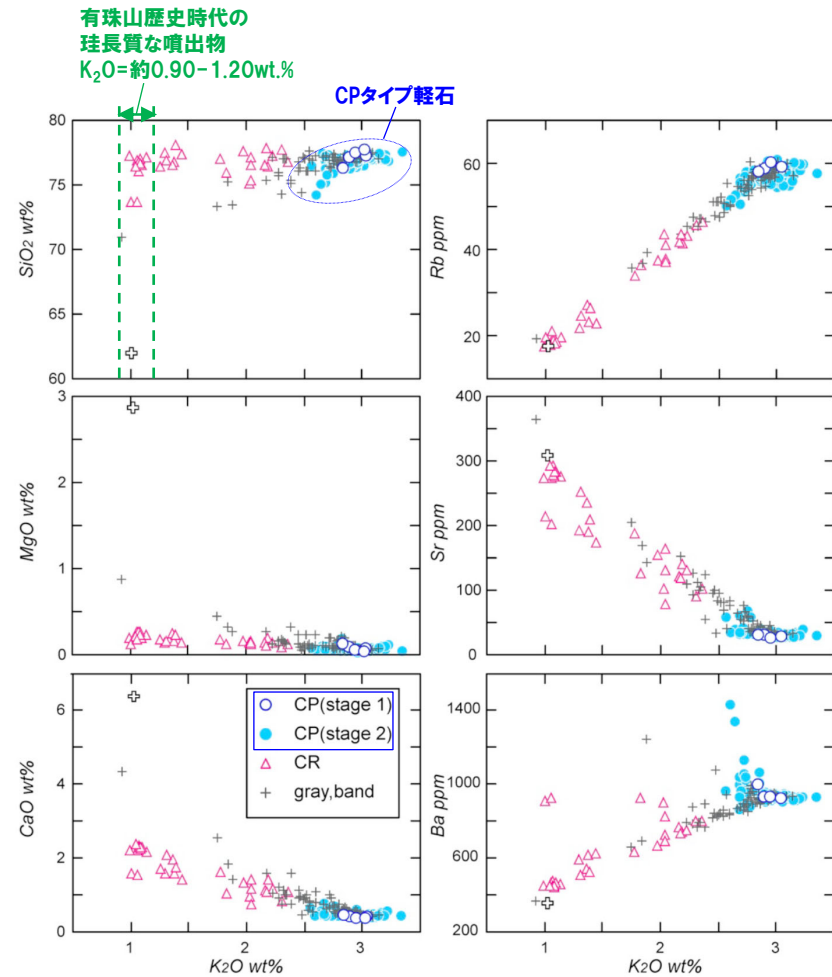
Compositions were determined by X-ray fluorescence (Rigaku RIX-2000) at Shimane University, Japan, following Kimura and Yamada (1996). Fe₂O₃*=total iron as Fe₂O₃. L. O. I.=loss on ignition.

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

① 活動履歴(7/7)



歴史時代噴出物の全岩化学組成ハーカー図
(気象庁編(2013)に加筆)



Tp噴出物の全岩組成分析 K₂O主要・微量元素組成図
(産業技術総合研究所(2022)に加筆)

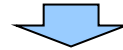
(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-1 地球物理学的調査(地下構造:まとめ)

一部修正 (R5/1/20 審査会合)

【目的】

○マグマ溜まりの位置、規模等を把握するため、地下構造調査(地震波速度構造、比抵抗構造及び重力異常)を実施する。



【各項目における検討結果】

(地震波速度構造) (次頁～P197参照)

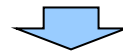
- 洞爺カルデラ直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。
- また、洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。
- 通常の地震が深度15km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。

(比抵抗構造) (P198～P203参照)

- 当社探査結果及び文献(Goto and Danhara (2018) 及び Matsushima et al. (2001))に基づくと、洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域は認められない。

(重力異常) (P205参照)

- 重力異常を踏まえたマグマ溜まりに関して考察されている文献は認められない。



- 洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)において、現状、深度約10km程度以浅には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりが存在する可能性は十分小さいと判断される。

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造-まとめ-) (1/3)

【目的】

- Nakajima et al. (2001) 及び中道 (2022) によると、活火山直下の上部地殻で観測される低Vp、低Vsかつ低Vp/Vs領域は水の存在でしか説明できないとされていることから、同領域は水の存在を示唆するものと判断される。
- また、最上部マントルから下部地殻で観測される低Vp、低Vsかつ高Vp/Vs領域は、メルトによるものとする方が適当であるとしてされていることから、本検討(地震波速度構造の観点からの地下構造の確認)においては、同領域はメルトの存在を示唆するものとして扱う。
- このことから、地震波速度構造においては、支笏カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)を広く確認した上で、さらに約10km程度以浅において、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域の有無を確認する。
- また、あわせて低周波地震及び通常の地震の分布状況についても考慮する。



【検討結果(次頁~P197参照)】

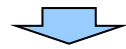
- 洞爺カルデラ直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。
- また、洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。
- 通常の地震が深度15km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造) (2/3)

一部修正 (R3/10/14審査会合)

○防災科学技術研究所HP上では、「日本列島下の三次元地震波速度構造(2022年度版)」として、Hi-net、F-net及びS-netの観測網による地震記録を用いた、海域を含む日本全国を対象とした地震波トモグラフィ解析結果を公開している(解析手法等の詳細はMatsubara et al.(2022)に記載)。その公開データを用いて、当社が洞爺カルデラ周辺における水平・鉛直断面図を作成した。



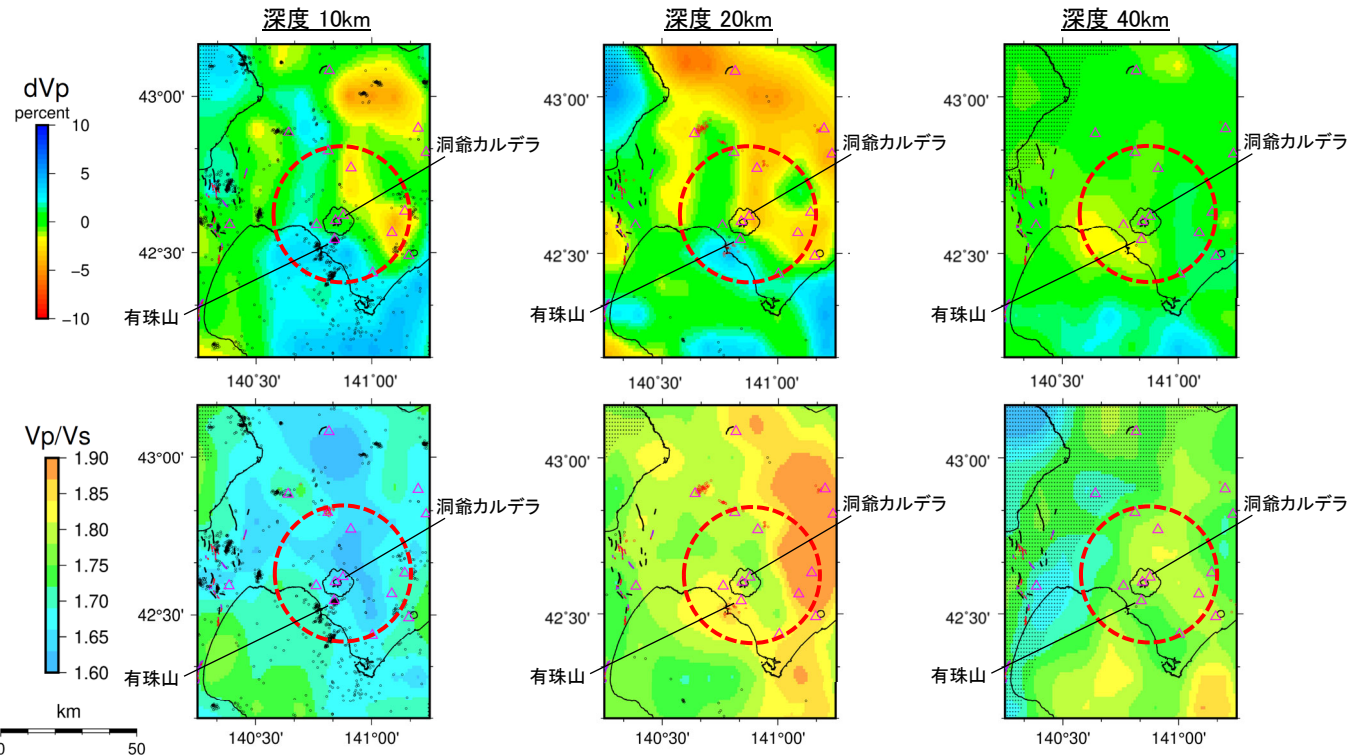
- 洞爺カルデラ直下の上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認した結果、メルトの存在を示唆する顕著な低Vpかつ高Vp/Vs領域は認められない。
- また、洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)には、マグマや熱水等の流体の移動を示唆する低周波地震群は認められない。
- 通常地震が深度15km程度から地表付近まで分布していることから、この深度では脆性的な破壊が生じていると考えられる。

【当社におけるマグマ溜まりの状況の検討方法(P92~P96参照)】

- 地球物理学的調査のうち、地下構造については、上部地殻(約20km以浅)を広く確認の上、さらに火山直下の約10km程度以浅の状況を確認することとする。
- 地震波速度構造については、メルトの存在を示唆する低Vpかつ高Vp/Vs領域が存在するか否かを確認する。
- 地震波速度構造について確認する際は、低周波地震及び通常地震の分布状況についても考慮する。

凡例

- △ 第四紀火山
- 震源(MJMA \geq 0)
- 低周波地震の震源(期間:2000/10/1-2020/12/31)
- 半透明黒色部 チェッカーボードテストの復元率が20%以下の範囲
- 活断層 } 今泉ほか編(2018)をトレース
- 推定活断層
- 洞爺カルデラを中心とした、半径25kmの範囲

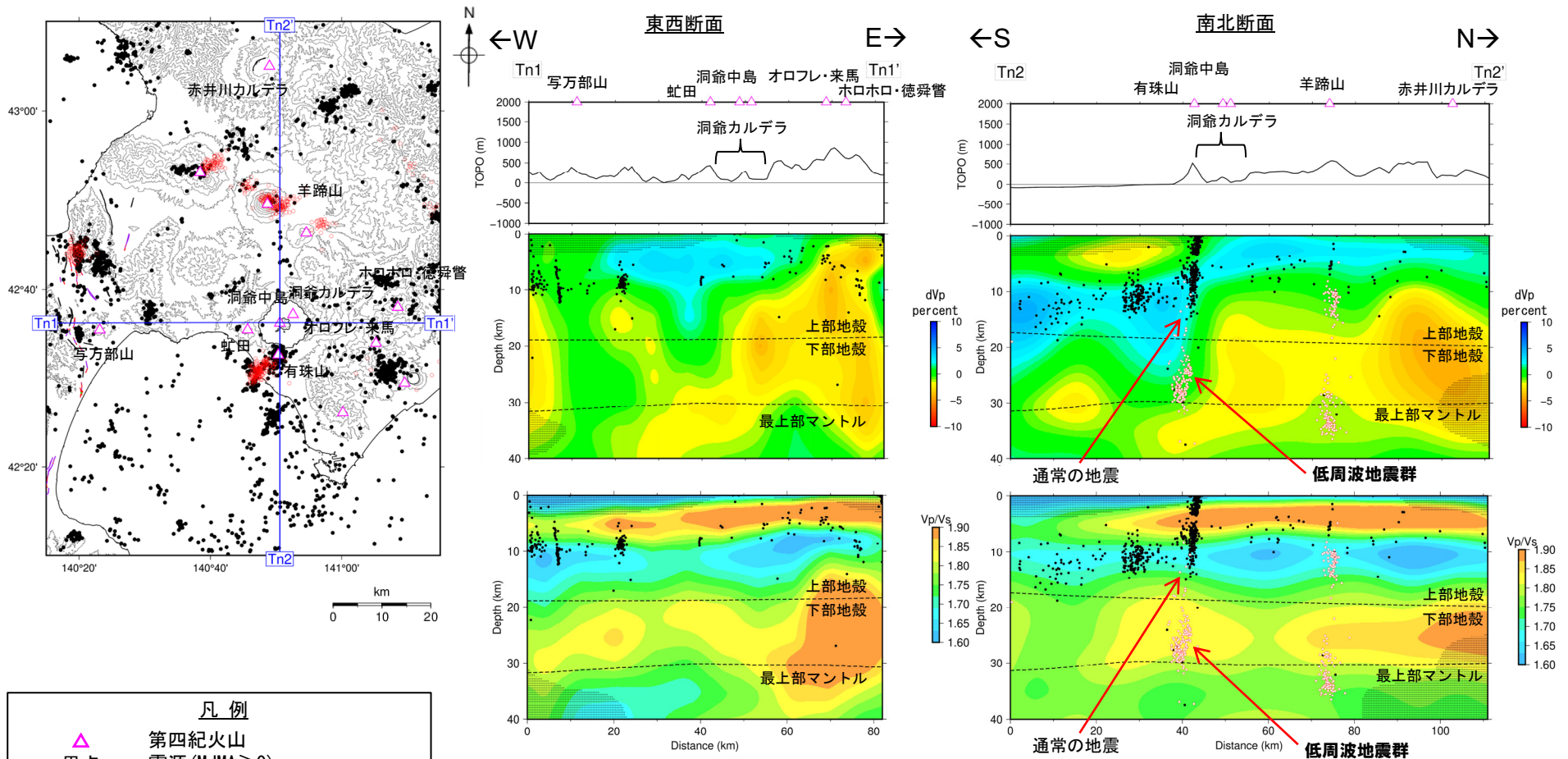


地震波速度構造(水平断面)

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-2 地球物理学的調査(地下構造:地震波速度構造) (3/3)

一部修正 (R3/10/14審査会合)



- 凡例**
- △ 第四紀火山
 - 黒点 震源 (MJMA ≥ 0)
 - 赤点 低周波地震の震源 (期間: 2000/10/1-2020/12/31)
 - 半透明黒色部 チェッカーボードテストの復元率が20%以下の範囲
 - 活断層
 - 推定活断層
- 今泉ほか編 (2018) をトレース

鉛直断面に記載している火山は、断面位置を中心に±5km内の火山を投影した。なお、水平方向の分解能は約20km。鉛直方向の分解能は深さごとに異なるが、深さ0km~10kmでは分解能約5km、深さ10km~40kmでは分解能約10kmである。上部地殻と下部地殻の境界(コンラッド面)はZhao et al. (1992)、下部地殻と最上部マントルの境界(モホ面)はMatsubara et al. (2017) をトレースした。また、断面から±5kmの範囲の震源をプロットした。

地震波速度構造(鉛直断面)

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造-まとめ-) (1/6)

【目的】

- 後藤・三ヶ田(2008)によれば、比抵抗は岩石中の伝導性物質の量に依存し、間隙水、マグマ及び湿潤状態の粘土鉱物は高い導電性(低比抵抗)を示すとされている。
- このことから、比抵抗構造においては、洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)における低比抵抗領域の有無を確認する。



【検討結果】

(当社電磁気探査)(次頁~P201参照)

- 洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)に、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域(数Ωm程度の領域)は認められない。
- 洞爺中島直下の表層から深度2km程度及び有珠山直下の表層から深度3km程度の範囲には、低比抵抗領域(数Ωm程度の領域)が認められる。

(Goto and Danhara(2018))(P202参照)

- 洞爺中島直下に示される低比抵抗領域は、当社電磁気探査において洞爺中島直下の表層から深度2km程度の範囲に認められる低比抵抗領域に相当し、当該低比抵抗領域はマグマではなく、熱水変質帯と考えられる。

(Matsushima et al.(2001))(P203参照)

- 有珠山直下に示される低比抵抗領域は、当社電磁気探査において有珠山直下の表層から深度3km程度の範囲に認められる低比抵抗領域に相当し、当該低比抵抗領域はマグマではなく、熱水変質帯と考えられる。



- 当社探査結果及び文献(Goto and Danhara(2018)及びMatsushima et al.(2001))に基づくと、洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)には、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域は認められない。

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造) (2/6)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

【当社電磁気探査】

- 洞爺カルデラの地下構造を把握するため、電磁気探査(MT法)を行い、洞爺カルデラ周辺の比抵抗構造解析を実施した※1。
- 観測点は、洞爺湖、洞爺湖周辺の陸域及び内浦湾に配置した。
- 洞爺カルデラを中心とした東西20km程度及び南北20km程度の範囲に観測点を数多く配置することにより、洞爺カルデラ付近の比抵抗構造の信頼性を高めた。

※1 本電磁気探査の結果については、小森ほか(2022)として、地球惑星科学連合2022年大会で発表されている。

【当社電磁気探査(MT法)の概要】

- ・調査期間:2018年11月~2019年7月
- ・観測点:洞爺湖を中心として陸域92点、湖域9点、海域16点 計117点
- ・測定時間:陸域40時間以上、湖域及び海域60時間以上
- ・解析パラメータ
成分:12成分
周波数:10Hz~0.0003Hz※2

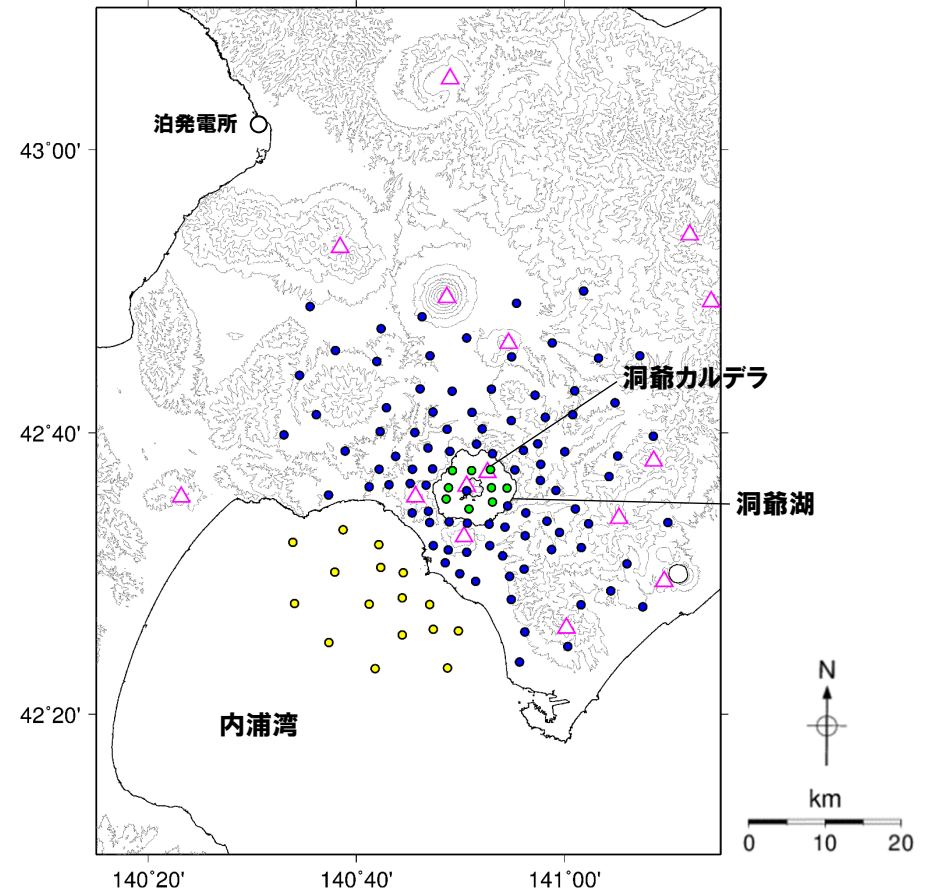
※2 Hata et al. (2016) を参考に設定。

【当社におけるマグマ溜まりの状況の検討方法(前頁参照)】

- 比抵抗構造については、マグマが存在する可能性が考えられる低比抵抗領域が存在するか否かを確認する。

凡例

- :陸域観測点
- :湖域観測点
- :海域観測点
- △:第四紀火山



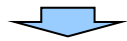
比抵抗構造解析に用いたMT法観測点位置図

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

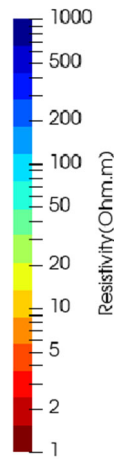
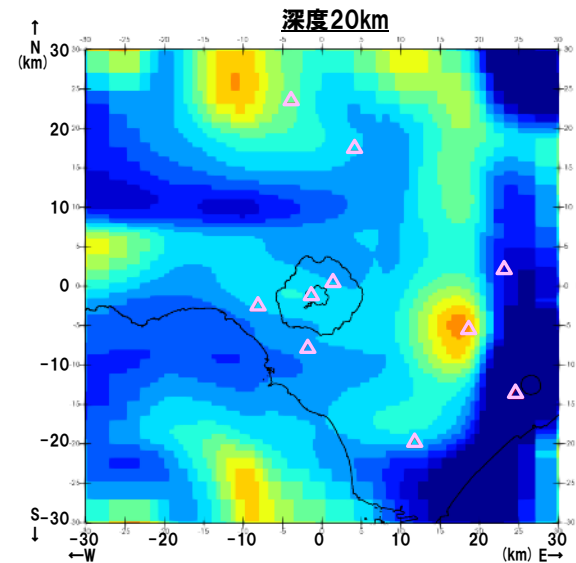
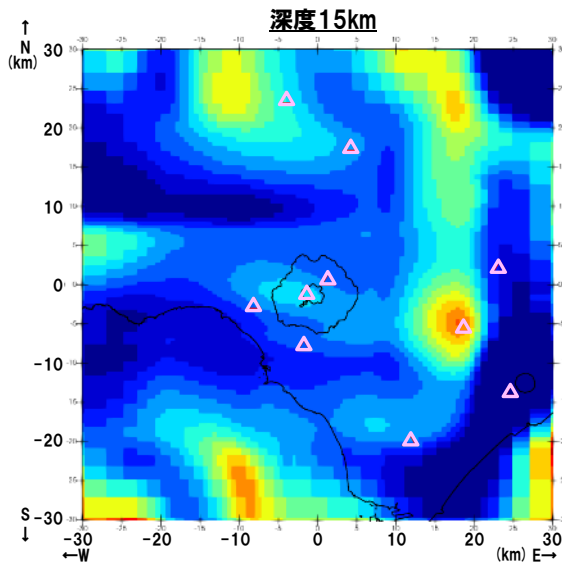
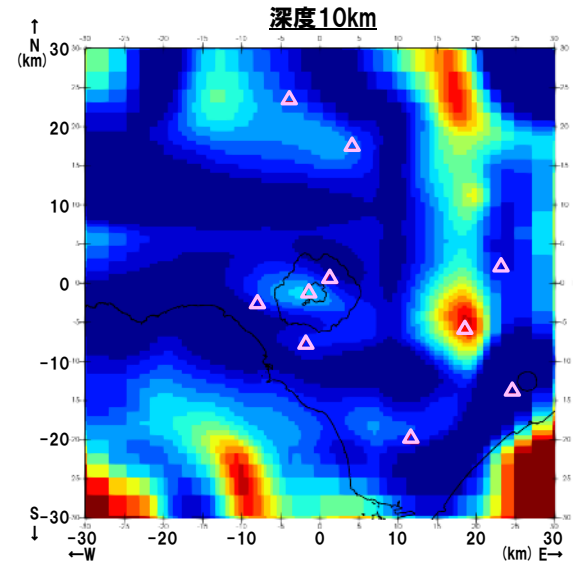
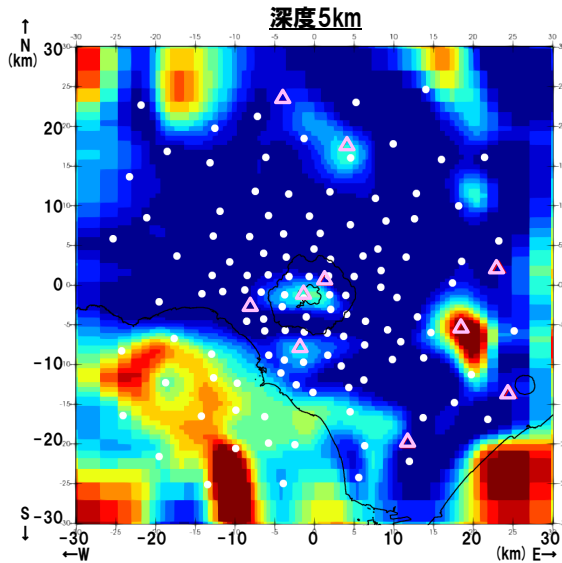
②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造) (3/6)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

○観測データを用いて比抵抗構造解析を実施し、洞爺カルデラ周辺における比抵抗構造の水平・鉛直断面図を作成した。



- 洞爺カルデラ直下の上部地殻内(約20km以浅)に、巨大噴火が可能な量のマグマ溜まりを示唆する低比抵抗領域(数Ωm程度の領域)は認められない。
- 洞爺中島直下の表層から深度2km程度及び有珠山直下の表層から深度3km程度の範囲には、低比抵抗領域(数Ωm程度の領域)が認められる(次頁参照)。



- 凡例
- △ 第四紀火山
 - MT観測点 (深度5km断面のみ記載)

比抵抗構造(水平断面)

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

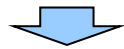
②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造) (5/6)

再掲 (R5/1/20審査会合)

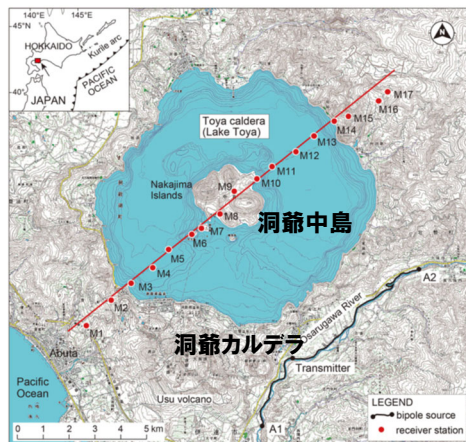
【Goto and Danhara (2018)】

○洞爺カルデラにおいて、深度1.5km程度までのCSAMT法による電磁気探査を行っているGoto and Danhara (2018)をレビューした。

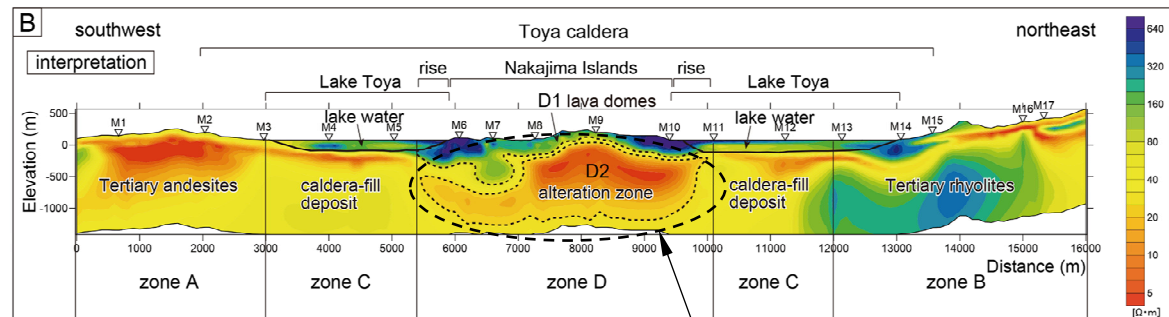
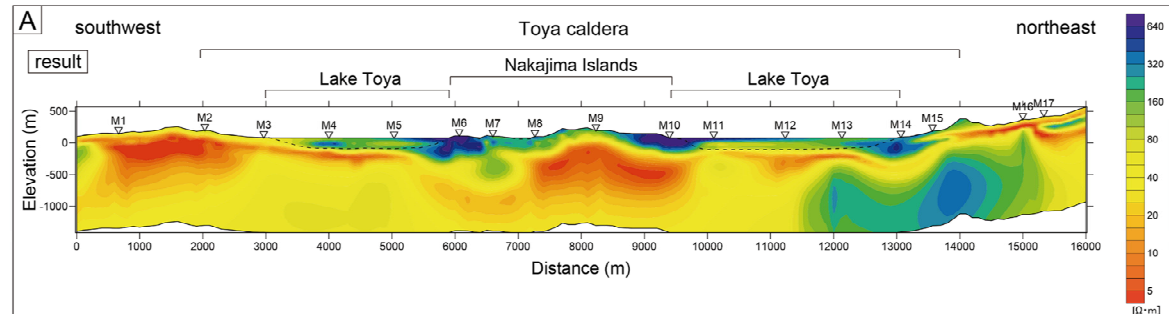
- ・Goto and Danhara (2018)によれば、洞爺中島とその周囲の隆起域の地下には低比抵抗領域(幅4500m, 厚さ1000m, 下図D2)が存在するとされている。
- ・この低比抵抗領域は、熱水鉱物に富む熱水変質帯である可能性があり、また洞爺中島の地表面において温泉等の地熱域を示すものが認められないことから、高温帯である可能性は低いとされている。
- ・この低比抵抗領域は、洞爺中島とその周囲の隆起域の形成時に上昇した地下のマグマにより、カルデラフィル堆積物が加熱されて形成された熱水変質帯と考えられるとされている。



○Goto and Danhara (2018)において洞爺中島直下に示される低比抵抗領域は、当社電磁気探査において洞爺中島直下の表層から深度2km程度の範囲に認められる低比抵抗領域(前頁参照)に相当し、当該低比抵抗領域はマグマではなく、熱水変質帯と考えられる。



探査測線位置図
(Goto and Danhara (2018) に加筆)



D2: 洞爺中島とその周囲の隆起域の地下の低比抵抗領域

比抵抗構造 (Goto and Danhara (2018) に加筆)

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-3 地球物理学的調査(地下構造:比抵抗構造) (6/6)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

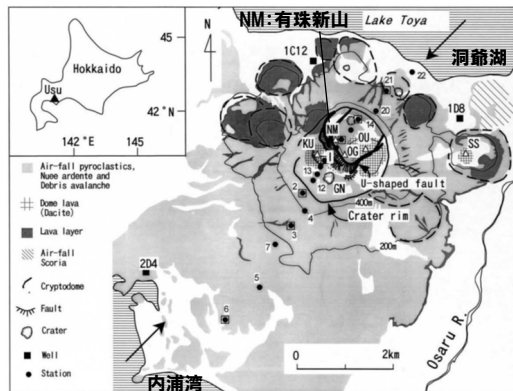
【Matsushima et al. (2001)】

○洞爺カルデラの後カルデラ火山である有珠山において、深度7km程度までのMT法による電磁気探査を行っているMatsushima et al. (2001) をレビューした。

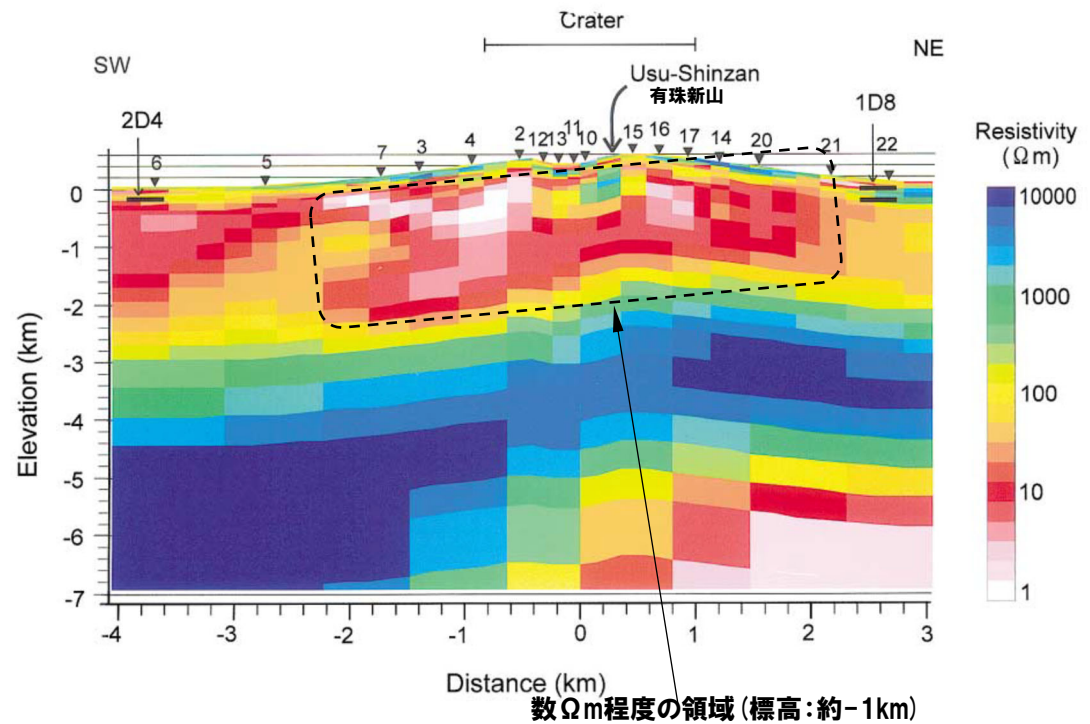
- Matsushima et al. (2001) によれば、有珠山の地下(標高:約-1km)には、数Ωm程度の領域が存在するとされている。
- 当該領域の大部分は、繰り返されるマグマの貫入の熱水変質により生成された粘土鉱物(スメクタイト)を大量に含む低比抵抗岩であるとされている。



○Matsushima et al. (2001) において有珠山直下に示される低比抵抗領域は、当社電磁気探査において有珠山直下の表層から深度3km程度の範囲に認められる低比抵抗領域(P201参照)に相当し、当該低比抵抗領域はマグマではなく、熱水変質帯と考えられる。



探査測線位置図 (Matsushima et al. (2001) に加筆)



数Ωm程度の領域(標高:約-1km) 比抵抗構造 (Matsushima et al. (2001) に加筆)

余白

(4) 巨大噴火の可能性評価(洞爺カルデラ)

②-4 地球物理学的調査(地下構造:重力異常)

一部修正 (R5/1/20 審査会合)

【目的】

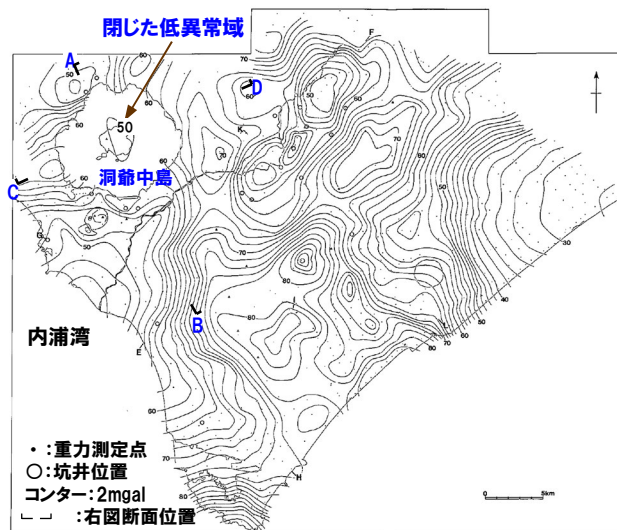
- 下鶴ほか編(2008)によれば、重力異常から地下密度構造を求めることができ、周辺の地殻に比べて火山の下に何らかの質量欠損があるか、過剰があるかは火山の地下構造を論ずるうえで重要であるとされている。
- このことから、重力異常を踏まえた洞爺カルデラ周辺の地下構造に関して考察している文献について確認する。

【和田ほか(1988)】

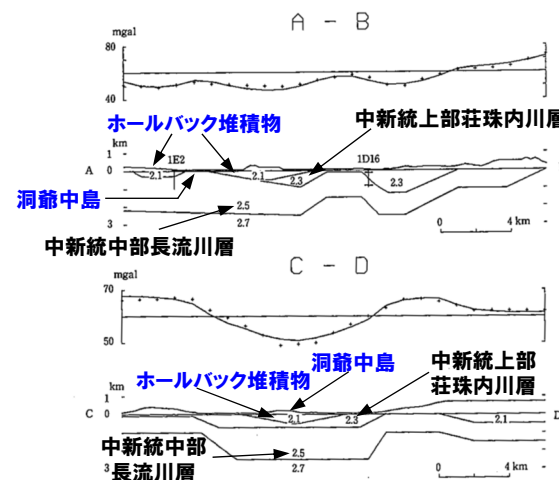
- 洞爺カルデラを含む北海道西胆振地域において、重力測定を行っている和田ほか(1988)をレビューした。
 - ・和田ほか(1988)によれば、低異常型カルデラを特徴づける閉じた低異常域が洞爺カルデラ中央部の中島を中心に分布している。
 - ・ボーリング調査結果による地質構造の推定に基づくと、上記の低重力異常は、新第三系の地質構造に逆円錐型のホールバック堆積物(最大層厚0.5km)が重畳した構造で説明できるとされている。

【検討結果】

- 重力異常を踏まえたマグマ溜まりに関して考察されている文献は認められない。



西胆振地域における重力異常図(和田ほか(1988)に加筆)



重力解析断面図
 (A-B断面及びC-D断面)
 各断面における上図は観測値及び計算値
 (+印は観測値を、実線は計算値を示す)
 下図は地形と構造モデル
 (記載されている数値は各地層の密度(g/cm³)を示す)
 (和田ほか(1988)に加筆)